

# 遊☆戯☆王 NEXT

せなあ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

嘗て、伝説のデュエリスト武藤 遊戯が、数多の闇のデュエリストと戦った世界。

遊城 十代が、破滅の光と戦い、愛する物と戦い、12の宇宙を守り抜いたこの世界。

不動 遊星が、九十九 遊馬が榊 遊矢が藤木 遊作が。

伝説を作り上げたこの世界。

これは12つ存在する宇宙の誰も知らぬ世界で繰り広げられた。

新たなる召喚方法と共に描かれる伝説の物語。

人間とモンスター、真の絆で結ばれし時。

悠久の彼方から、勝利の記憶が甦る。

# 目次

エヴォルモンスター覚醒編

入学デュエル!? 炸裂! エヴォル召喚!!

1

呆気の無い勝利

62

発覚する世界の異変、新たなるエヴォ

ルモンスター 前編

104

発覚する世界の異変、新たなるエヴォ

ルモンスター 後編

136

模索する進化の術 前編

168

模索する進化の術 後編

200

闇に潜む怪しき影

224

妖紅に染まりし覇王の眷族

251

月の少女

異世界からの支援



# エヴォルモンスター―覚醒編

## 入学デュエル!? 炸裂! エヴォル召喚!!

『この世界は、近い内に滅びを迎える…』

『俺が… 止めて… や、る…』

『もう喋らないで、それ以上声を出すと、本当に死んでしまうわ…』

『俺が… 止めなければ… ならないんだ…』

『ええ、全ては貴方に託された』

『だから、遥か彼方で。』

『自分の誤ちに気付いてきて…』

光が差し、小鳥が囀り、目覚ましが鳴る。

時は現代、時期は春、そして朝の八時だ。

鳴り響く目覚ましの音で、少年が一人目を覚ました。

「はっ!」

「…ん?」

「げげっ!!」

先程も言ったが今は春だ。

春で、八時に目覚まし。

そう彼は学生だ、そして今日は入学式だ。

「ち、ち、遅刻だー!」

彼の名は創奇 海王、

彼は今日からデュエルアカデミアに通う事となる新入生だ。

泡を食って飛び起きる海王。

寝巻きを脱ぎ捨て、慌てて着替える。

シワだらけのぐちゃぐちゃな制服姿で、

デツキケースを腰のベルトに引っかけて。

彼はリビングへと飛び出した。

「なんで起こしてくれなかったんだよお!!」

リビングには彼の父の花道 白妙が居る。

「遊英君が何度も起こしたよ。

起きなかつたの、海王君じゃない」

「遊英は?」

「もう学校に行つたよ」

「だー！時間がやべえ!!」

「海王君、朝ごはん食べなよ」

「食つてる暇ねえよ〜!」

勧められた朝食を断り。

彼は家を飛び出し、全力ダツシユでアカデミアへ向かう。

満開に咲き誇る美しい桜並木。

海王は、遅刻に焦りながらも。

新たな学生生活に胸を踊らせている。

暫く走ると少し先に、見覚えのある背中を見つけた。

「遊英!」

「あ、海王君おはよう」

花道 遊英、彼は海王の兄弟だ。

「ひ、酷いぜ遊英…置いてくなんてき…!」

「いつまでも起きないからだよ」

「こつちはダツシユだぜ…!」

「間に合いそうだから良いじゃない。

流石、足が早いね」

息も絶え絶えの海王にクスリと微笑む遊英。

なんやかんやあつたが、ダッシュの甲斐合つて。

海王は何とか遅刻は免れそうだ。

二人はチャイムギリギリで教室に到着した。

騒然とする教室の中、二人は自分の席を探す。

遊英は席を探しつつ、

クラスメイトとなるであろう人達の顔を見て行く。

筋肉質で背が高く強面の男から、

背が小さめで細身の少年。

教室の端に佇む静かな男と。

様々な特徴を持った面々が揃っている。

「あ、君の席、私の隣だよ」

橙の髪をポニーテールとしている少女が、

キョロキョロと教室を見回している遊英に話しかけて来た。

「どうやら、彼女の隣が遊英の席となるらしい。」

「ありがとう、海王君の席は僕の前だから、ここだね」



クラスメイト達は大笑い。

恥ずかしくなりながらも海王は出席番号順に並び、皆と共に体育館へと向かった。

長い長い校長先生の話。

教員達の紹介。

校歌の斉唱。

とても平和で穏やかな入学式が。

遊英達を歓迎してくれた。

入学式は終わり。

早くも放課後となった。

「つか〜!」

校長の話、長かったなあ」

「小学も中学も、同じなんだねえ…。」

圧倒的に長かった立ち時間草臥れる二人。

デツキケースを一度机に置き。

背伸びしつとも帰る準備をしていると。

愛結が二人の間に入ってきた。

「ね！二人はこれからなにか予定ある？」

「へ？俺達は帰るだけ……だよな？」

「うん、特に用事はないよ」

「じゃあさ、三人で一緒にカードショップ行かない？」

「カードショップかあ……いいなあ！

行こうぜ！」

「うん！折角だから一緒に行こう！」

愛結と二人は早くも意気投合。

三人でカードショップへ行く事となり。

早々に準備を整え、ショップへと向かった。

海王が、デッキを机の上に忘れていた事に気づかずに……。

「なんだあ、あいつデッキ忘れて行きやがったな……へっへ」

カードショップへ到着した三人。

古いカードから最新のカード。

バラ売りにパック売り。

ショップの中は選り取り緑のカードで一杯だ。

「どのパック買おうか!」

「バラ売りのも見てみようぜ!」

「海王君、丁度デツキの強化したいって言ってたよね」

「おうよ!俺様の最強機械軍団が…あれ?」

「どうしたの?」

本来ベルトに着けるタイプの海王デツキケースだが。

それが彼の腰にはついて無いのだ。

「無い… 無い、無い!デツキが無い!」

慌ててくねくねと身体中をまさぐる海王。

嘆きの声と共に、ムンクの叫びが如く。

顔を歪ませ崩れ落ちた。

「ええー!海王君なにしてるのさ!」

「まさか、海王デツキ忘れちゃったの?!」

「朝にはあつたんだ…!」

「どこ行つちまつたんだああ!!」

「心当たりは!?!」

「心当たり…!」

心当たりが無いが記憶を巡らせる海王だが、すぐに思い出した。  
一度デッキケースを机に置いたことを。

「あー！机の上だ！」

帰る準備をする時に置いた！」

「急がないと学校閉じちゃうよ！」

「急いで取りに行こう！」

踵を返してカードシヨップを後にする三人。

走りアカデミアへと向かうと。

用務員によって校門が閉じられようとしていた。

「まっ……！」

慌てて用務員を止める愛結。

「な、なんだ君達！」

もう完全下校の時間だよ」

「デッキ忘れちまっ……！」

頼むから入らせてくれ！」

「な!?!」

し……仕方がない……デッキを取ったら早く帰りなさいよ」

「ありがとうございます、用務員さん!」

間一髪、後数秒遅ければ。

理由を説明する用務員も居なく、

教室は愚かアカデミアにすら入れなくなる所だ。

何とかアカデミアへ入り、

三人は無事教室に到着する。

「机机、デツキデツキ!」

早々に机の上を見る海王だが。

そこにデツキケースの姿は無い。

不思議に思い、首を傾げつつ海王は机の中を覗く。

だがそこにもデツキの姿は無い。

「ね、ねえ...」

「え?」

「デツキがねえー!!」

「ええー!」

「くそ!どいつたんだよー!」

俺のデツキー!!!」

ガラリとした教室に叫び嘆く海王の声が鳴り響く。

「お探しものはこれかい？」

海王が悲しみに打ちひしがれていると。

教室の影から声が聞こえてきた。

ポケットトに手を入れゆつくりと歩いてくる一人の男。

影の中から現れたのは。

つい朝、目にした強面の男だった。

「机の上に置きっぱだったぜ」

男がポケットトから手を出すと。

海王のデツキケースが彼の手に握られていた。

「おおおお！取っておいてくれたのかサンキューー！」

落ち込んでいた顔に輝きを灯し、

嬉しそうに彼の持つデツキケースに飛び付く海王。

だが海王の手がデツキを掴もうとしたその瞬間。

男はするりと海王を避け、海王の脚に足を引っかけ転ばせた。

「あいでー！」

海王は勢いよく顔面を床に叩きつける。

「海王君!」

「いつてえな!

何すんだよ!返せよ!」

腹を立てて飛び付く海王だが、

男は再びそれをするりと避ける。

「そいつは出来ねえ相談だ」

「なんですって!」

男はしたり顔で舌舐めずりをする。

その姿に遊英は、一つ噂を思い出した。

「舌舐めずり…まさか君は!」

「遊英、知ってるの?」

「彼は、間牛 鉄也!」

間牛 鉄也、彼は札付きの悪で知られる。

アンティールールで数々の決闘者からレアカードを奪う凄腕の決闘者だ。

「間牛 鉄也!」

アカデミア入学は聞いてたけど…。

あいつ、私らのクラスだったの!」

「ほお、間牛様の名を知っていたか。

そうよ、俺様は間牛 鉄也。

このカーネーションシオンシテイ最強の決闘者とは俺様の事よ!!」

「こんのやろう!ぶっ飛ばしてやる!」

「まっつて海王君!」

間牛に殴りかかろうとする海王だが。

遊英が慌ててそれを止めた。

「な、なんだよ遊英!止めるなよ!」

「間牛君は、腕つぶしも強いことで有名なんだ!」

大人三人を相手にして無傷で殴り勝ったって!」

「はあ!?な、なんだそりゃ!」

「来るなら来いよ、病院送りにしてやるぜ?」

冷や汗を垂らす海王の姿を見て笑いをこらえつつ、

したり顔で見下す様に背を反らす間牛。

なにも出来ずに歯を食い縛る三人に。

一つ提案を持ちかけた。

「返してやっても良いぜ」

「ほ、本当か!」

「ああ、アンティールールの決闘で。」

「この俺様に勝てたらな」

「な、なんだそりや!」

「俺のデツキはお前が持つてるんだろが!」

「そうともよ。」

「だがお前には、お友達二人が居るじゃねえか。」

「頼み込めよ、僕の代わりに決闘して下さいな」

「直ぐ様自分のデツキの中身を確認する愛結。」

「真つ先に助けてくれようとする彼女の姿を見て、」

「海王はより一層歯を食い縛った。」

「デツキをまとめて一步踏み出す愛結だが。」

「俯く遊英が、彼女を止めた。」

「待って」

「何よ!こいつは私が!」

「僕がやる」

「俯く顔を上げる遊英。」

彼の顔は、怒りと闘志が溢れ出ると言わんばかりに。  
強く歪んでいた。

「海王君は僕の兄弟だ。」

それに、君に迷惑をかけるわけにはいかない」

愛結は思わずたじろいだ。

先程まで、あんなにも穏やかで優しそうな顔をしていた遊英から迸る闘志に。  
思わず気圧されてしまったのだ。

「いい目だ。」

さっきも言ったがルールはアンティールル。

俺様が負けたらこいつのデツキを返してやる。

だが、俺様が勝てば」

「僕のデツキを君にあげるよ」

「なっ!?!遊英!」

己のデツキを賭けることを即答する遊英。

海王は、驚きも思わず声を上げた。

「なんだよ!」

「いいってそこまでしなくても!」

「いいや、僕は必ず勝つ。」

「だから海王君、止めないでくれ」

「ゆ、遊英」

海王と目を合わせる遊英。

歪んだ顔だが、海王を見つめるその目は真っ直ぐで。

どこか安心感のあるものだった。

「…… わかった……。」

頼んだぜ、遊英！」

「任せてー！」

海王のウインクにウインクで答える遊英。

遊英がデュエルをする事が決定された。

「ここじゃあ狭くて敵わねえ、グラウンドへ行こうや」

間牛に促され、皆はグラウンドへと移動した。

「確認するよ。」

僕が負けたら僕のデッキを君に渡す。

「だけど」

「ああ、俺様が負けたら海王とやらのデッキを返してやるよ」

「その言葉、忘れないでね」

「ああ、勝つのは俺様だがな」

グラウンドで向かい合う二人の決闘者。

腕に着けているリングにスマートフォンをセットすると。

スマートフォンは変形に変形を繰り返した。

そう、彼等の持つスマートフォンは。

デュエルディスクなのだ。

忽ち形を変えるスマートフォン。

五つのモンスターゾーン。

五つの魔法、罨ゾーン。

フィールド魔法ゾーン、墓地。

デッキセットゾーン。

物の数秒でスマートフォンは。

近代的なデュエルディスクへと姿を変えた。

「デュエルディスク！セット完了！」

腰のケースからデッキを手にする遊英と間牛。

「ソリッドビジョンシステム！起動！」

二人は勢いよくディスクにデッキを差し込む。

「デュエルオポーンメント！リンク完了！」

ディスクにより自動シャッフルされる互いのデッキ。

デュエルの準備が。

完了した。

「決闘!!」

二人の掛け声と共に。

ソリッドビジョンにより。

辺り一帯の風景にサイバネティックなエフェクトが広がった。

互いにデッキからカードを五枚ドロウ。

デュエルの幕が、開けられた。

『花道 遊英』

手札

五枚

モンスターゾーン

無し

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

4000

『間牛 鉄也』

手札

五枚

モンスターゾーン

無し

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

4000

「先行は俺様が貰うぜ！ドロー！」

「俺様は、モンスター一体を、裏守備表示でセット！

更に伏せカードを二枚セットし。

これでターンエンドだ！」

ソリッドビジョンによりカードの映像が立体的に出現した。

これがソリッドビジョン。

立体映像を持ってして、

迫力抜群のデュエルを行う事を可能とした最新の技術だ。

『花道 遊英』

手札

五枚

モンスターゾーン

無し

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

4000

『間牛 鉄也』

手札

三枚

モンスターゾーン

セットモンスター

魔法、罨ゾーン

セットカード×2

ライフ

4000

「僕のターン、ドロー！」

「僕は、忍耐の花 バジルを召喚！」

忍耐の花 バジル、レベル3、ATK/1450

「はあああ！」

ソリッドビジョンにより現れ出でるモンスター。

花の名に相応しく、咲き誇るが如く。

忍耐の花 バジルのソリッドビジョンが現れた。

「攻撃力1450ねえ」

首を掻きながらポキポキと肩を鳴らす間牛。

遊英の召喚したバジルを見て、遊英を馬鹿にした様な態度だ。

「忍耐の花 バジルでセットモンスターに攻撃！」

ウインドフレイバー！」

「たああ！」

「安直な攻撃だ、トラップ発動!検問!」

「なに!?!」

「このトラップはな。」

相手モンスターが攻撃を仕掛けてきた時。

相手の手札を全て確認して、その中にモンスターが存在すれば攻撃を無効にし。

更に相手の手札からモンスター一枚を捨てさせるカードさあ!

さあ手の内を晒しな!!」

「くっ...」

トラップカード「検問」の効果により遊英は手札を見せる。

晒された遊英の手札の中に存在するカードは。

速攻魔法、魔法の早咲き種

永続罫、スピリットバリア

レベル7モンスター、守護結界の魔剣士

レベル4モンスター、忠実の花 アレキア

レベル4モンスター、目覚めの花 ハナズオウ

の五枚だ。

「ほほう、モンスターがたっぷりだ。」

しかも、レベル7の強力モンスターがあるじゃねえか。

攻撃は無効！そして守護結界の魔剣士を捨てて貰うぜえ!!」

「くっ…！」

検問の効果は成功、バジルの攻撃は無効となり。

更に遊英の手札から、レベル7モンスター。

守護結界の魔剣士が捨てられてしまった。

「さあ、どうする頼みの強力モンスターは墓地に消え去っちゃったぜ」

「僕は…カードを二枚セットしてターンエンド！」

『花道 遊英』

手札

二枚

モンスターゾーン

忍耐の花 バジル レベル3 ATK/1450

魔法、罨ゾーン

セットカード×2

ライフ

4000

『間牛 鉄也』

手札

三枚

モンスターゾーン

セットモンスター

魔法、罨ゾーン

セットカード

ライフ

4000

「っは！」

見え見えの伏せカードだ！

俺様のターンドロー！」

「俺様は激昂のミノタウルスを召喚！」

激昂のミノタウルス レベル4 ATK/1700

「ブモオオ！」

「更に俺様は、モンスターを反転召喚！」

目を覚ましな！高ぶる魔牛！」

高ぶる魔牛 レベル4 ATK/1600

「モオオオ！」

「高ぶる魔牛のリバース効果！」

このモンスターがリバースされた時。

フィールドの高ぶる魔牛は攻撃力を400ポイントアップし、レベルも1アップする  
！」

高ぶる魔牛 レベル5 ATK/2000

「ブモオオオオ！」

「攻撃力1700と2000だど!？」

「ヤバイぜ遊英！」

「対する遊英のモンスターは一体。

攻撃力も1450しか無いわ…。」

圧倒的劣勢に焦る二人だが、

遊英は落ち着いた様子だ。

何が彼に落ち着きを与えるのか。

それはバジルと伏せカードの存在にあった。

忍耐の花 バジルは、攻撃表示の場合戦闘では破壊されない効果を持つ。

そして伏せカードのスピリットバリア。

このカードは、フィールドにモンスターが存在する場合。

戦闘により受けるダメージを0にするカード。

そう、モンスターが存在する限り戦闘ダメージを0にするトラップと。

戦闘では破壊されないモンスター。

この鉄壁のカードコンボが、彼に落ち着きを与えているのだ。

「スピリットバリアがあれば安心。

そう思っただけか？」

「思ってるよ、戦闘破壊耐性を持つバジルとこのカードがあれば。

僕は半永久的に耐え抜く事ができる」

モンスターが戦闘を行った場合。

攻撃力の数値の勝負となる。

そして数値の少ないモンスターは破壊される。

だが忍耐の花 バジルは攻撃表示の場合のみ戦闘では破壊されない。

「まあいいさ、俺は高ぶる魔牛で。

忍耐の花バジルを攻撃！

魔撃突進！」

「ブモオオオオ！」

バジルへ向けて突進攻撃を仕掛けてくる高ぶる魔牛。

その角がバジルを襲うその瞬間。

遊英はトラップカードを発動させた。

「永続トラップ、リバーズ！」

スピリットバリア！

フィールドにモンスターが存在する限り。

僕が受ける戦闘ダメージは0になる！」

「それはどうかな！」

「なっ…!?!」

「俺様は手札から速攻魔法！サイクロンを発動！

フィールドの魔法、罫を一枚破壊する！

俺が破壊するのは。

たつた今発動させたスピリットバリアだ!!」

遊英の持つ鉄壁のコンボが。

物の一瞬で崩壊した。

発動されたスピリットバリアが。

その瞬間、間牛の発動したサイクロンにより破壊されてしまったのだ。

「これで戦闘ダメージは受けて貰うぜ！」

高ぶる魔牛と、激昂のミノタウルスで攻撃だ！

くらえええい！」

攻撃表示のモンスター同士で戦闘を行った場合。

モンスターの攻撃力が負けているプレイヤーは、

その数値の差分のダメージを戦闘ダメージとして受けてしまうのだ。

バジルの攻撃力は1450、対する高ぶる魔牛は2000。

その差は550。

よって遊英は高ぶる魔牛との戦闘による550の戦闘ダメージ。

そして激昂のミノタウルスによる250の戦闘ダメージを。

合計で800の戦闘ダメージを受けてしまう事となった。

「うわあああ！」

遊英ライフポイント、4000—8000∥3200。

「くっ…！」

「はーっははははー！」

まだだ！

この程度で倒れられちゃ困るぜ！  
俺様はこれでターンエンドだ！」

『花道 遊英』

手札

二枚

モンスターゾーン

忍耐の花 バジル レベル3 ATK／1450

魔法、罨ゾーン

セットカード

ライフ

3200

『間牛 鉄也』

手札

二枚

モンスターゾーン

激昂のミノタウルス レベル4 ATK／1700

高ぶる魔牛 レベル5 ATK／2000

魔法、罨ゾーン

セットカード

ライフ

4000

「僕のターン、ドロロー!」

「僕は、目覚めの花 ハナズオウを召喚!」

目覚めの花 ハナズオウ レベル4 ATK/1400

「たあ!」

「目覚めの花 ハナズオウは召喚に成功した時。

ターン終了時まで攻撃力が600ポイントアップする。

更にその後。

ターン終了時まで、レベルを5に変更する事ができる!」

目覚めの花 ハナズオウ レベル5 ATK/2000

「よっしゃ!遊英のフィールドに攻撃力2000のモンスターが!」

「これで激昂のミノタウルスを破壊できるわ!」

「ハナズオウで、激昂のミノタウルスに攻撃!

起き様のレクイエム!」

「デヤアア！」

「簡単に通すかよ！トラップ発動！

マタドール・パリイ！

相手モンスターの攻撃時、

自分のモンスター一体を選択し。

相手モンスターの攻撃対象を選択したモンスターに移す！

そして選択された自分モンスターは、このバトルでは破壊されない！」

「なんだって!？」

「一方的にいいいい！」

粉碎しちまいなあああああ！」

「ブルモオオオオ！」

「デヤアアアア！グウアア！」

同じ攻撃力のモンスターが戦闘を行った場合。

互いのモンスターは破壊される。

だが、トラップカード「マタドール・パリイ」の効果により。

この戦闘では高ぶる魔牛は破壊されない。

よって、目覚めの花 ハナズオウが一方的に破壊されてしまう。

高ぶる魔牛の鋭い角に胸を貫かれ。

目覚めの花 ハナズオウは、呆気もなく破壊されてしまった。

「やべえぜ…！」

遊英のモンスターが、一方的に破壊されちまった！」

「遊英…！」

「僕は、これでターンエンド…！」

『花道 遊英』

手札

二枚

モンスターゾーン

忍耐の花 バジル レベル3 ATK/1450

魔法、罨ゾーン

セットカード

ライフ

3200

『間牛 鉄也』

手札

二枚

モンスターゾーン

激昂のミノタウルス レベル4 ATK/1700

高ぶる魔牛 レベル5 ATK/2000

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

4000

「俺様のターンドロロー！」

「一方的だ楽しいねえ愉快だねえ！」

俺様はああ!!!

………ぐふあつ?!?!?

大口を開けて高笑いをする間牛だが。

突然にして腹を殴られたかの様に。

声を上げ、膝を地につけ踞った。

「な、なんだ!?!」

「うぐ……!ぐう……な、なんだこれは……!!」

間牛の身に何かが起きている。

何が起きているのかわからないが。

だが一つ明確に理解できる事があった。

間牛の体から。

禍々しいオーラが出ているのだ。

「なに：：あれ：：!?!」

「なにかオーラを：：!」

遙か遠くの廊下の窓。

プリントを片手に歩く学生の人影が。

デュエルをする遊英達に気付き立ち止まる。

「あいつら：：何をしている」

遊英達は、そんな人影には気付きはしなかった。

そして呻き悶える間牛だが、突然にして呻き声を止ませ。

ゆっくりゆっくりと立ち上がった。

まるで上から糸で引かれるかの様に。

「くっくくくくくくくくく：：」

様子がおかしい。

つい直前で悶え呻いていた間牛が。  
今度は突然にして笑い始めたのだ。

「遊うう英いいい…！」

「このデュエル、俺様の勝ちだ…。」

お前はもう、圧倒的なこの状況を覆す事はできない…。」

「な、なんだって…？」

「なぜならなあ遊英…俺様は…。」

新たに力を手に入れたからさああ！

圧倒的で強大な！

力をなああああああああ！」

「レベル4、レベル5！」

異なるレベルのモンスターが二体、俺様のフィールドに存在する。

この意味がわかるかあ…？

フツフフフハハハハ…！！」

不気味な笑みを浮かべる間牛。

遊英には意味がわからなかった。

レベルの異なるモンスターがいるからなんなのだと。

疑問に思うことしかできなかつた。

「わからねえ様だな。

なら今すぐ教えてやるよ…! !

レベル4!レベル5!

俺様は二体の異なるレベルのモンスターで!

EXP (エクスポネンシャル) を取得!!」

「EXP!?!」

「な、なんだって!?!」

共鳴する二体のモンスター。

二重螺旋を描くように空へと飛び上がる。

「エヴォル召喚!!」

「エヴォル召喚!?!」

「全ての牛戦士を統べる魔王。

その巨大なる斧で、

あらゆる命を斬殺せよ!」

稲妻を迸らせ、光の大爆発を起こし。

二体のモンスターが融合した。

「現れよ！初期レベル6！

牛魔王！キング・バイソン！！」

牛魔王 キング・バイソン レベル6 ATK/2600

「ブルモオオオオオ！！」

「な、なんだあのモンスターは！

エヴォル召喚!？」

聞いたことも、見たこともない！」

「当たり前だあ！

こいつは俺様の、俺様だけの特別な力！

貴様を屠る必殺のモンスターなんだからなあああ！！」

「ブルモオオオオオー！！」

巨大な斧を持つ巨大な牛魔王。

禍々しいオーラと共に遊英達の前に姿を表したそのモンスターは。

名をエヴォルモンスター。

かつて存在しなかった特殊召喚方法。

かつて存在しなかった特殊召喚モンスター。

謎のモンスターである牛魔王キング・バイソンは、

圧倒的な存在感を放ち、遊英の前に立ちはだかった。

「恐れ戦くにはまだ早い…！」

見せてやる。

エヴォルモンスターの真の力を！」

「くっ…！」

足を踏み込み、身構える遊英。

突き上げられた間牛の指は天を指し。

間牛は高らかに宣言する。

「牛魔王 キング・バイソンの、

レベルアップエフェクト発動！」

「レベルアップエフェクト!?!」

「教えてやるよ！」

エヴォルモンスターはな!

1ターンに一度、

自身のレベルを1アップさせる事で。

特別な効果を発動できるのさ！」

「なんだって!?!」

「キング・バイソンの効果は。

1ターン一度、自身のレベルを1アップする事で、  
攻撃力、守備力を200ポイントアップする。

更に！このターン貴様はキング・バイソンを効果の対象にできない！！」

「殺戮の雄叫びを上げろ！

マードーハウリング！！」

「ブルアアアアアアアアア！！」

牛魔王 キング・バイソン

レベル7 ATK/2800。

耳を劈く様なキング・バイソンの雄叫び。

遊英達の肌をビリビリと迸る衝撃波と共に。

キング・バイソンの攻撃力、守備力が上昇した。

「レベルアップエフェクトだと…？」

遠くの廊下の学生もまた。

それを目の当たりにし密かに驚いていた。

「さあ、奴のモンスターをプレイヤー諸ともたたつ切れ！

キング・バイソンの攻撃！牛魔王！絶鋭斬！」

「ブルアアアア!!」

巨大な斧を振りかぶり。

キング・バイソンはバジルを遊英もろとも切り裂いた。

「うわああああ!!」

「遊英!」

遊英ライフポイント、3200—1350||1850

「っは!」

真の恐怖はこれからよ!!

ターンエンドだ!」

『花道 遊英』

手札

二枚

モンスターゾーン

忍耐の花 バジル レベル3 ATK/1450

魔法、罨ゾーン

セットカード

ライフ

## 『間牛 鉄也』

1850

手札

二枚

モンスターゾーン

牛魔王 キング・バイソン レベル7

ATK/2800

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

4000

「僕のターン、ドロロー！」

今、遊英のライフは1850。

対する間牛は未だに4000ポイント。

そしてフィールドのモンスターは、

下級モンスター一体の遊英と。

強力なエヴォルモンスターの居る間牛。

圧倒的な盤面。

「まずはダメージを与える！」

カクタス・シヨットマンを召喚！」

カクタス・シヨットマン レベル4 ATK/1600

「はっ！」

「カードを一枚セットし、

カクタス・シヨットマンの効果！

自分フィールドにセットされた

魔法、罨カードを任意の数破壊する事で。

相手ライフにその数×500ポイントのダメージを与える！」

速攻魔法、魔法の早咲き種、と

装備魔法、献花の祈勾玉、の。

二枚のセットカードを破壊する遊英。

カクタス・シヨットマンは。

ウエスタンハットをつばをピンと指で弾くと。

マントを払いのけ、

高速で腰のホルスターから銃を抜き。

間牛へ向け、その銃から何十本もの針を発射した。

「ぐうう！」

間牛ライフポイント、4000—1000=3000

「よっしゃ！遊英が間牛からライフを削り取ったぜ！」

「ここからよ！」

歓喜の声をあげる海王と愛結。

間牛は突き刺さる針を抜き捨てると。

海王達二人に指を指した。

「この程度でなに喜んでんだ？」

盤面を見てから言いな！この雑魚どもが！」

「な、なんだと…!?」

「言ってくれるわね、ムカつく〜！」

歯を食い縛る海王と。

「いーだ！」と歯を見せる愛結。

「僕はこれでターンエンド」

『花道 遊英』

手札

一枚

モンスターゾーン

カクタス・シヨットマン レベル4 ATK/1600

忍耐の花 バジル レベル3 ATK/1450

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

1850

『間牛 鉄也』

手札

二枚

モンスターゾーン

牛魔王 キング・バイソン レベル7 ATK/2800

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

3000

「俺様のターン、ドロー！」

「俺様は再び、キング・バイソンのレベルアップエフェクトを発動する！」  
「なっ！また発動できんのかよ！」

再び発動されるレベルアップエフェクトに息を飲む海王。  
冷や汗を垂らしつつも遊英は、

海王にカード効果の解説を入れる。

「海王君、あの効果は1ターンに一度の物だよ。」

自分のターンが来る限り、恐らく最大レベルの12に到達するまで。

攻撃力アップを繰り返す…！」

「そんな！」

「さ、最大攻撃力3800って、ま、マジかよ！」

「そう言うこつたあ！」

「マーダーハウリング!!」

牛魔王 キング・バイソン

レベル8 ATK/3000

「ブルアアアアアア!!」

「こ、攻撃力… 3000って…！」

「くっ…！」

「さあ！バジルを攻撃しろキング・バイソン！」

「そうはさせない！」

カクタス・シヨットマンの効果！

自分フィールドの他モンスターが攻撃対象にされた時！

守備表示となる事で、その対象をカクタス・シヨットマンに移す事ができる！」

「フンツ！」

バジルの前へ行き両腕を前に構えるカクタス・シヨットマン。

表示形式は変更され、守備力が表示される。

カクタス・シヨットマン DEF/1200。

守備表示と攻撃表示が戦闘を行う場合、

数値の低い方が破壊されるのは変わらないが。

モンスターを破壊されたプレイヤーは、

戦闘ダメージを受けない。

遊英はカクタス・シヨットマンの効果により。

このターン、無傷で凌ぐと言う戦術を取った。

「その選択は貴様のミスだ！」

キング・バイソンは守備表示モンスターを攻撃した時。

攻撃力が守備力を越えた分のダメージを与える！」

「な、なんだって!？」

「ブルアアアアアアア!!」

遊英ライフポイント、1850—1800=50

「うわあああああ！」

「遊英！」

ダメージを受けない為の遊英の戦術は反って仇となり。

遊英ライフポイントは残り、たったの50となってしまった。

「ライフポイント、たったの50って..」

「遊英..」

「ライフはたったの50、セットカードは無し！」

貴様の手札はさつき検問で確認した下級モンスター！

如何なる上級モンスターを持ってしても3000の攻撃力は越えられない！

逆転は不可能よ！俺様の勝ちだ！

ターンエンド！

ハーツハハハハハハ！」

『花道 遊英』

手札

一枚

モンスターゾーン

忍耐の花 バジル レベル3 ATK/1450

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

50

『間牛 鉄也』

手札

三枚

モンスターゾーン

牛魔王 キング・バイソン レベル8 ATK/3000

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

3000

「僕の… ターン！」

間牛の言う通りライフは残り僅か。

手札には下級モンスターが一体のみ。

効果的な魔法、罨も手には無い。

このドローに全てが。

このデュエルの全てが賭けられる。

その時、これからドローされるデッキの一番上のカードと。

手札の忠実の花 アレキアが突然にして光り始めた。

「な、なんだ!?!僕のカードが！」

確信。

この状況を覆す事ができる確信が。

突然遊英の心の中に現れた。

その思いを信じて。

心からの叫びと共に遊英はラストドローをする。

「ドロオオオオオオオ!!」

ドローされたカードは。

魔法カード、クロック・アップ・エヴオリユーション。

元々遊英が持っていたカードではない。

そして、誰が知るカードでもない。

たった今、遊英の手の中に現れたそのカードは。

「エヴォルモンスター…専用マジック…!?」

それだけではない。

フィールドに存在する限り。

コントロールを奪えないだけの効果だった、

忠実の花 アレキアのカードに。

新たなカードテキストが書き記されていたのだ。

光輝く点と点。

幾つもの点が線で繋がりに。

一筋の道を、遊英に気付かせた。

「見えた!唯一の勝ち筋!」

このターンで決着を着ける!

僕達の目指す、勝利の未来へ!

「なに!?!」

「僕は!忠実の花 アレキアを召喚!」

忠実の花 アレキア レベル4 ATK/1500

「はっ！」

遊英のフィールドに。

レベル3、レベル4、異なるレベルのモンスターが二体揃った。

「僕は、忠実の花 アレキアと！」

忍耐の花 バジルで！

EXP（エクスポネンシャル）を取得！」

「なに!?それは!!」

二重螺旋を描き上空へと舞い上がる。

忠実の花 アレキアと忍耐の花 バジル。

「遠き二つの魂は今一つとなる！」

遥かなる彼方の戦士よ！

二輪の力を糧とし蕾を開き。

今、栄光をその手に掴み取れ！」

収束する光と共に迸る稲妻。

「エヴォル召喚!!」

光の大爆発を起こしたその召喚は。

エヴォル召喚。

「開花せよ!初期レベル5!

栄光の花!ジンチョウゲ!!」

現れる巨大な沈丁花の蕾。

その蕾はゆっくと花を開く。

現れたのだ。

開花する沈丁花の中より。

花の侍、栄光の花 ジンチョウゲが。

「ハアッ!!」

栄光の花 ジンチョウゲ

レベル5 ATK/2200

「エヴォルモンスター…だと…!?

馬鹿な!それは俺様だけの特別な力の筈!」

驚き、思わず一步引く間半鉄也。

だが仕切り直すかのように頭を振ると。

遊英に指を指し叫んだ。

「だがそのモンスターの攻撃力は2200!

対するキング・バイソンは3000!

「どうやっても越えられやしねえ!」

「それはどうかな!」

「なにつ!」

「ジンチョウゲのレベルアップエフェクト!発動!!」

栄光の花 ジンチョウゲは!

1ターンに一度、自身のレベルを1アップする事で!

相手モンスター一体の攻撃力を、

ターン終了時まで半分にする!」

栄光の花 ジンチョウゲ レベル6 ATK/2200

「……ッ!!」

「な、なにいい!」

キング・バイソンに鋭い眼光を向けるジンチョウゲ。

その瞬間、キング・バイソンの足元から。

幾つもの蔓が飛び出し、キング・バイソンに巻き付いた。

「ブルモ!」

牛魔王 キング・バイソン レベル8 ATK/1500

「そして、エヴォル素材となった忠実の花 アレキアの効果!

このカードを素材とした植物族エヴォルモンスターが。

レベルアップエフェクトを発動した時!

そのエヴォルモンスターの攻撃力は、

ターン終了時まで500ポイントアップする!」

抜刀されるジンチョウゲの刀。

その刀はアレキアの力を受け継ぎ。

赤く燃え滾るオーラを纏っていた。

栄光の花 ジンチョウゲ レベル6 ATK/2700

「この状況で、攻撃力2700だとお!?!」

「更に僕は、マジックカード!

クロック・アツプ・エヴォリユーションを発動!!」

発動されるマジックは。

新たにドローされたエヴォルモンスター専用マジック。

「このカードは、エヴォルモンスター専用マジックカード!

選択されたエヴォルモンスターはこのターン、

エヴォル素材としたモンスターの数だけ攻撃できる!

ジンチョウゲのエヴォル素材は二体！

よって二回の攻撃が、可能!!」

「なんだってえええ!!」

「これで終わりだ！

栄光の花 ジンチョウゲで、

キング・バイソンに。

そして間牛君に！攻撃！

桜花一閃！舞血桜!!」

「ハアアアアア!!」

繰り出される高速の斬撃は。

間牛の目に止まることは無い。

いつ切られたのかも分からず。

ただゆつくりと納められ行く刀。

その刀が鞘に収まり、

鐙と鞘のぶつかる金属音が鳴った瞬間。

「ブルモオオオアアアアアア!!」

「ぐうああああああああ!!」

キング・バイソンが破壊され。

戦闘ダメージの1200。

そして直接攻撃の2700ダメージを受け。

間牛のライフは、0となった。

間牛ライフポイント

3000—3900=0

花道 遊英 勝利

遊英の勝利で、デュエルは終了した。

「海王君!」

「か、勝った...!」

「遊英が... 遊英が勝ったあー!」

遊英に駆け寄り勝利に歓喜する海王と愛結。

二人で遊英の手を掴み万歳をする。

「ばんざーい!」

「ばんざーい!」

「ちよ、ちよつとやめてよも〜!」

そんな三人を尻目に、

倒れていた間牛が起き上がった。

気付いた遊英、二人に手を放して貰い。

間牛に近づくと。

「僕の勝ちだよ。」

約束通り、海王君のデツキを返して貰おうか」

「ふ、ふざけやがって…」

てめえなぜエヴオルモンスターを…！」

間牛はムクリと立ち上がると。

即座に遊英の頬を殴り付けた。

鈍い音が鳴り、遊英がグラウンドに倒れ込む。

「うっ…！」

「て、てめえ！何しやがる！」

いきなり殴りかかってきた間牛に、

海王は驚き怒り、遊英と間牛の間に割って入った。

「約束がちげえぞ！」

「そうよ！遊英が勝ったら。」

大人しくデツキを返してくれるんじゃないの!？」

「気が変わった。」

それにお前エヴォルモンスターを手に入れたじゃねえか。

それが俺の賭けだ、よかったなあ!

強力なカードを手に入れたぜ?

ハーツハハハハハハ!

「大丈夫:遊英:?:」

起き上がる遊英に手を貸す愛結。

海王と共に、間牛の所業に怒っている。

「どういう道理よ!」

「て、てめえ:ふざけんな!」

ついに我慢の限界が来た海王。

彼が間牛に殴りかかった瞬間。

どこからともなく現れた生徒がそれを止めた。

「待て」

「な、なんだよお前」

彼は先程まで密かに遊英のデュエルを見ていた生徒だ。

「事情は把握した。」

アンティールールでデュエルを行っていたのだな？」

「お、おう」

「アンティールールは予め賭けた物を敗者が勝者に受け渡すのがルール。

見た所、貴様は創奇 海王のデツキを賭けてたのだろう？」

であれば、大人しくそれを渡す事だ」

「な、なんだあテメエ、この俺様に指図しようつてのか！ああ!？」

いきなりやつて来た生徒の発言に腹を立てた間牛。

勢いよく生徒の胸ぐらを掴んだ途端。

急に怒りの表情を変えた。

「なるほど、貴様ごときがこの俺に逆らうか」

「い、いや、別にそう言う訳じゃ……」

「俺がその気になれば貴様なぞこのカーネーションシティから追放できる。

それだけは覚えて置け」

「わ、わかった。

デツキを返しやいんだろ返しや、ほらよ」

生徒の出現により縮こまる間牛。

その生徒の助けにより。

海王のデツキは、無事に海王へと返された。

間牛の投げ飛ばしたデツキを海王はキャッチ。

間牛は生徒から手を放し、

グラウンドから逃げるように去っていった。

「よ、よかつた〜!」

「君、ありがとう」

「礼には及ばんさ」

「君、僕達のクラスに居た人だよね。」

「名前は？」

生徒の顔を覚えていた遊英。

彼は今日の朝、遊英居た教室の隅に佇んでいた生徒だった。

遊英に名を問われ、彼は答える。

「柳、俺は柳 佞紋だ」

柳 佞紋（やなぎ でいもん）。

それが彼の名だった。

その名を聞き、愛結が目の色を変えて驚いた。

「柳 佞紋って、嘘。」

カーネーションシティ市長の息子!」

彼はこの町、カーネーションシティの市長。

柳家の息子だったのだ。

「すつげえ、超エリートじゃねえかよ!」

「だから間牛君は、あんなに急に態度を変えていたんだね」

「物凄い権力者…!」

「権力など関係無い、必要なのは実力だ。」

これからの学生生活、クラスメイトとして。

よろしく頼む」

「よっしやー!」

とんだ入学デュエルになっちまったが。

デツキは帰ってきた!

友達も出来た!!

楽しい学生生活の始まりだー!」

「おー!!!」

## 呆気の無い勝利

「やべええええ遅刻だあああああ!!」

「急いで海王君!!早く!!早く!!」

「二人とも朝ごはん!」

「時間無いよ!!」

朝からバタバタ騒がしい遊英と海王。

中学生生活初日から遅刻だ。

「二人とも信号には気をつけて!」

「わかってるー!」

「いつてきまーす!」

遅刻の理由は単純、海王の寝坊だ。

今回は根気強く起こし続けた遊英。

しかし海王がいつまでも起きなかつた故に。

二人揃って遅刻となつてしまったのだ。

「あの様子なら、二人とも学校を気に入つたのかな。」

さて、僕も仕事仕事」

全力ダツシユでアカテミアへ向かう二人を見送り。

二人の父、白妙は、仕事に向かった。

一方その頃、アカテミアでは既に朝のHRが開始されていた。

「おはようお前らー、出席を取るぞー」

「はーい」

「遊英と海王、初日から遅刻じゃない…」

遊英達のクラスメイトの愛結。

心配しつつも、初日から遅刻する二人に呆れていた。

柳もまた同様に。

ここは、カーネーションシティのとある路地裏。

「エヴォル召喚!!」

「な、なんだこのモンスター!?!」

「これで終わりだ!消え去れ!!」

ナツクル・シュート!!」

「うわあああああ!!」

「フッフッフハハハハハハハハ!!」

俺は……無敵だああああああ!!」

一限目の授業の終わり頃。

二人は漸く教室に到着していた。

「バカもー……ん!!!!」

「ひええええええ!!」

「ごめんなさあああああ!!」

初日からの遅刻と言うことで、

二人は先生から大目玉を食らう。

「体育じゃなければテストに支障がでる所だ!

今後は二度と遅刻するな!!」

「はい……」

「すみません……」

「罰として課題を渡す!明日までやっつけ!!」

「はい……」

クラスメイトの前でこっぴどく怒られた二人は、

気分を落としたまま授業に出る。

数学、国語、普通の学校と変わらない午前の授業を終えて。

昼休みとなった。

「疲れたー！ー！」

「ああも怒られた後だと… 授業が億劫になるね…」

「もう、二人とも初日から遅刻なんかするからよ」

草臥れた様に机に突っ伏する二人に、

愛結はすっかり呆れた果てた様子だ。

「ほら、シャキッとする！」

午後からはデュエルの授業だから」

「ほんとかよ！よっしゃーやる気出てきたあ！」

「あんたねえ…」

デュエルと聞いて急に元気になる海王。

愛結は更に呆れ果てる。

「つと、デュエルと言えば遊英」

「なに、海王君？」

「お前昨日エヴォルモンスターだっけ？」

出してたよな、あのカード見せてくれよ」

元気になったと思っただら今度は少し真剣な顔になった海王。

そんな海王の質問に愛結も便乗する。

「あ、私にも見せて。」

新しいカードって気になるじゃん」

「はいよ、はい」

愛結と海王の願いを快く承諾し。

遊英は昨日手に入れたエヴォルモンスターを二人に見せる。

『栄光の花 ジンチョウゲ』

地

☆☆☆☆☆

【植物族／エヴォル／効果】

レベル3〜4モンスター

①：1ターンに一度、このモンスターのレベルを1アップする事で発動できる。

相手フィールドのモンスター一体の攻撃力をターン終了時まで半分にする。

ATK / 2200 DEF / 1200

エヴォル召喚モンスター。

未だ得体の知れないこのカードだが。

デュエルモンスターズカードである事は確かだった。

「ここまでまつ黄色のモンスターカードなんて見たことねえな」

「本当に不思議なカードね」

興味津々でジンチョウゲのカードを見る二人に。

遊英は更にデツキからカードを幾つか抜き取り見せた。

「それだけじゃないんだよ、ほら」

「な、なんだこりゃ!」

遊英が見せたカードは。

クロツク・アツプ・エヴォリューションと

忠実の花 アレキアに、それだけじゃない。

「なにこれ、エヴォルモンスターサポートカードがこんなに!」

「あれからデツキを確認してみたんだけど。」

僕のデツキ、新しくエヴォルモンスター関係のカードが幾つも入ってたんだよ」

遊英のデッキに追加されていた複数の新たなカード。

エヴォル召喚の謎は深まるばかりだ。

「テキストが追加されているカードもこんなにあるんだ」

「不思議な事もあるのね」

顎に手を当てる様に唸る遊英と愛結だが。

海王は一人、そんな遊英を羨ましがった。

「いいなあ、エヴォルモンスター。」

俺もそんなカード欲しいぜ！」

海王のお気楽さにまたも呆れそうになる愛結だが。

エヴォルモンスターが欲しいのは愛結も同じなので。

微笑みながら頷いた。

「でも、お陰でデッキ枚数がこんなにあるよ……」

「じゃあさ、昼飯食って俺達三人で遊英のデッキの調整をしようぜ！」

「いいね、そうしましょ！」

「ほんと？じゃあお願いしようかな」

海王の提案でデッキの調整をする事が決定。

遊英達は急ぎ三人で昼食を食し。

出現したカードにより、

40枚を遥かに越えてしまった遊英のデッキの調整をした。

「こんなもんか？」

「ありがとう二人とも。」

お陰でデッキ枚数を40枚にできたよ」

「いいのいいの。」

私も、遊英のデッキが参考になったから」

「よし、遊英！」

デッキ内容が大丈夫かの確認も兼ねて。

早速俺とデュエルしようぜ！」

「いいね、やろう！」

デッキの調整の確認を兼ね。

デュエルを始めようとする遊英と海王だが。

そうしている内にチャイムの音が鳴る。

もう早昼休みは終わりだ。

「あーなんだよ、もう昼休み終わりかよ」

「僕とのデュエルは、また今度だね」

「二人とも、早く体育館に行きましょ」

「うん」

デュエルの授業は基本的に体育館で行われる。

体育館の中、出席番号順に並んで座る遊英達。

入学してはじめてのデュエルの授業が開始された。

「さて、入学初日のデュエルの授業だ。

今回の授業内容だが。

まあ最初の授業だ、楽しくやろうじゃないか」

どんな授業になるのか楽しみで仕方ない海王。

デュエルの準備は万端の海王だが。

そんな彼の期待と希望は早くも打ち砕かれた。

「今日は遊英と柳、まずお前達二人にデュエルを行って貰う」

「ええー！」

先生そりやないぜ！

俺もデュエルしてえよー！」

「おだまらっしやい遅刻坊や!!」

まずお前は観戦だ！」

「うええ……」

立ち上がり抗議を申し立てる海王だが。

先生の圧力に容易く撃沈され、へたり込むように座り直した。

先生に手招きをされ、前へと出る遊英と柳。

そんな二人を紹介するように先生は内容を説明する。

「この二人は、入学試験で満点を出した奴等だ」

入学を決める際に行われた入学試験。

通常の筆記試験と、デュエルの筆記試験。

そして教師とのデュエル。

そこそこの難易度を持つ入学試験だが。

遊英と柳は、たった二人。

それを満点でクリアしていたのだ。

「まずお前達は学年ツートップの実力を目に焼き付けろ、いいな」

「はーい」

「柳君、君も入学試験満点クリアだったんだね」

満面の笑顔で柳に話しかける遊英。

そんな遊英の言葉に、柳は微かに微笑み答える。

「ああ、お前もだったか。

お前の実力はまだ知らんが、  
まずは流石と言っておこう」

「ありがとう。」

でも、流石なのは君もだね」

「さあ、お前達、配置につけ」

距離を取り、配置につく柳と遊英。

振り返り向かい合いスマートフォンを腕のリングにセットする。  
変形に変形を繰り返すスマートフォン。

五つのモンスターゾーン。

五つの魔法、罨ゾーン。

墓地、フィールド魔法ゾーン。

デッキセットゾーン。

たちまちスマートフォンはデュエルディスクへと姿を変える。

「デュエルディスクセット完了！」

デッキを取り出す柳と遊英。

「ソリッドビジョンシステム起動！」

勢い良くデッキをディスクに差し込む二人。

「デュエルオポーンメント、リンク完了！」

デュエルディスクによるデッキの自動シャッフルが行われた。

二人は互いに五枚のカードをドロウする。

デュエルの準備は完了。

「デュエル!!」

二人の掛け声と共に。

ソリッドビジョンのエフェクトが体育館中に広がり。

デュエルが開始された。

『花道 遊英』

手札

五枚

モンスターゾーン

無し

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

4000

『柳 佞紋』

手札

五枚

モンスターゾーン

無し

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

4000

「先行は君にあげるよ」

「：： 良いだろう、先行は俺が頂こう」

柳に先行を譲ろうとする遊英。

一瞬ピクリと眉をひそませた柳だが。

遊英の言葉に甘え先行ターンを取る。

「俺のターンドロー！」

自分の手札を確認する柳。

再び眉をひそめると、彼は軽いため息をついた。  
「：：カードを一枚セットし。」

俺はターンエンドだ」

『花道 遊英』

手札

五枚

モンスターゾーン

無し

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

4000

『柳 佞紋』

手札

五枚

モンスターゾーン

無し

魔法、罨ゾーン

セットカード

ライフ

4000

「モンスターを召喚しないでターンエンドしたわ」

「あいつ、なに考えてんだ？」

モンスターを召喚しない所かセットカードすらたったの一枚。

柳の意図がわからぬ状況に思わず愛結と海王は首を傾げる。

「僕のターンドロロー！」

「何を考えているのかよくわからないけど。」

隙なら隙で、突かせてもらおうよ！

僕は、目覚めの花 ハナズオウを召喚！」

目覚めの花 ハナズオウ レベル4 ATK/1400

「ハナズオウは、召喚に成功した時。

ターン終了時まで攻撃力を600ポイントアップさせ。

その後、ターン終了時までレベルも5に変更できる！」

目覚めの花 ハナズオウ レベル5 ATK/2000

「よっしやー遊英！」

がら空きの柳に攻撃力2000を叩き込めー！」

「ハナズオウでダイレクトアタック！」

起き様のレクイエム！」

「デヤアアアア!!」

早くも攻撃力2000のモンスターで攻撃を仕掛ける遊英。

柳のリバースカードを警戒するが。

「ぐうっ！」

柳ライフポイント、4000—2000||2000

「ふえっ？」

直接攻撃は成功。

遊英はたった2ターン目にして。

柳のライフから半分を削り取れてしまった。

「くっ…：だが、トラップ発動！」

白兵戦！

俺がダメージを受けた時。

相手ライフに700のダメージを与える！」

「白兵戦？」

700ダメージを与えるためにモンスターを出さなかったにしては、ちよつと代償が大きすぎねえか？」

さらに首を傾げる海王。

柳の受けたダメージに対して。

白兵戦で与えられるダメージはたった700。

「この瞬間、手札のダメージ・キャンセラーのモンスター効果を発動！

発生する効果ダメージを無効にして。

こいつを特殊召喚する！」

ダメージ・キャンセラー レベル3 DEF/1300

「さらにダメージを無効?!」

「な、なんだよ、モンスター手札にあんじゃねえか」

「柳君、なんで出さなかったのかしら？」

「さあ・・・」

2000のダメージを受けてしまっただけじゃなく。

遊英に与えられる白兵戦の700ダメージを無効。

さらに手札の下級モンスターをいま特殊召喚。

一見メリットの考えられない戦術に。

海王達を含めた生徒達は混乱するばかりだ。

「僕は、カードを一枚セットしてターンエンド！」

そしてこの瞬間、ハナズオウのステータスは元々の物へと戻る！」

目覚めの花 ハナズオウ レベル4 ATK/1400

『花道 遊英』

手札

四枚

モンスターゾーン

目覚めの花 ハナズオウ レベル4 ATK/1400

魔法、罨ゾーン

セットカード

ライフ

4000

『柳 佞紋』

手札

四枚

モンスターゾーン

ダメージ・キャンセラー レベル3 DEF/1300

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

2000

「俺のターン、ドロー！」

ドローカードを確認する柳。

カードを見る彼の表情から、

どこかホツとした様子が伺える。

「俺は、ダメージ・キャンセラーをリリースする事で。

アンダー・スイーパーをアドバンス召喚する！」

アンダー・スイーパー レベル5 ATK/2100

「トア！」

「なるほどアドバンス召喚か！」

アドバンス召喚。

それはフィールドの自分をモンスターをリリースする事で、

レベル5以上のモンスターを通常召喚する召喚方法。  
「やるね、柳君。」

ただモンスターをセットしては、  
僕にみすみす破壊されるだけ」

「だからダメージを覚悟で手札に残す事で、

アドバンス召喚のリリースを残したのね！」

「すっげえ上手いぜ柳！」

ダメージ覚悟で行われた柳のアドバンス召喚戦術。

クラスメイト達から感心の余りのうなり声が漏れる。

「俺は更に、装備魔法。

闇・エネルギーをアンダー・スイーパーに装備！」

その攻撃力と守備力を300ポイントずつアップする！」

アンダー・スイーパー レベル5 ATK/2400

「ウオオ！トア！」

「すげえ！攻撃力2400だぜ！」

「最上級モンスターレベルの攻撃力を繰り出したか。

これならば2000のライフを代償としたのも領ける。

やるじゃないか柳！」

柳の繰り出したカードコンボに先生も思わず感心を隠せない。

先生の言う通り攻撃力2400は最上級モンスターに匹敵する超攻撃力。

対する遊英のフィールドに存在するモンスターは攻撃力1400のハナズオウ。

遊英有利の状況は一変、柳の逆転となった。

「行くぞ！アンダー・スイーパーでハナズオウに攻撃！」

奴のモンスターを破壊しろ！スナイプショット！」

「そうはさせない！」

トラップ発動！ブロック&ゲイン！

相手モンスターの攻撃宣言時、

その攻撃を無効にし、

攻撃が無効となった相手モンスターのレベル×200ポイント。

僕のモンスター一体の攻撃力を次の僕のエンドフェイズまでアップする！」

「なにっ！」

ハナズオウとアンダー・スイーパーの攻撃は無効。

そしてハナズオウの攻撃力が1000ポイントアップとなった。

目覚めの花　ハナズオウ　レベル4　ATK/2400

「ヌオオ！」

「攻撃力が並んだわ！」

「すげえ！一気に互角の状況に巻き返したぜ！」

「くっ……俺はこれでターンエンド！」

『花道 遊英』

手札

四枚

モンスターゾーン

目覚めの花 ハナズオウ レベル4 ATK/2400

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

4000

『柳 倭紋』

手札

三枚

モンスターゾーン

アンダー・スイーパー レベル5 ATK/2400

魔法、罨ゾーン

闇・エネルギー(アンダー・スイーパー、装備)

ライフ

2000

「僕のターン、ドロロー！」

「ブロック&ゲインのステータスアップ効果はこのエンドフェイズまで…。」

「これ以上アンダー・スイーパーをフィールドに残しておく事はできない！」

「ならばどうする」

「僕は、守りの花 カランコエを召喚！」

守りの花 カランコエ レベル4 ATK/1600

「フーン！」

「ハナズオウでアンダー・スイーパーに攻撃！」

「相討ち狙いか…！」

バトルを行う時、攻撃力が互角の場合双方のモンスターは破壊される。

ハナズオウ、アンダースイーパー、破壊。

「これで柳のフィールドはがら空きだ！」

「カランコエでダイレクトアタック！」

「ぐああ！」

柳ライフポイント、2000—1600||400

「やった！柳のライフはあたたったの400よ！」

「僕はカードを一枚セットして、

ターンエンド！」

『花道 遊英』

手札

三枚

モンスターゾーン

守りの花 カランコエ レベル4 ATK/1600

魔法、罨ゾーン

セットカード

ライフ

4000

『柳 倭紋』

手札

三枚

モンスターゾーン

無し

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

400

「俺のターン！ドロー！」

柳の手札は四枚、ここから巻き返される可能性は大きい。

それを見越した遊英、伏せたカードは。

幻想術―モノマネーション。

それは自分モンスターが、その自分モンスターより攻撃力の高い相手モンスターと戦闘を行う時。

自分モンスターと相手モンスターの攻撃力が同じになるよう自分モンスターの攻撃力をアツプするカード。

この効果の対象となった自分モンスターは、戦闘により破壊された時除外されてしま  
うが。

強力な相手モンスターと相討ちになるのなら、傷は浅い。

「俺は…」

「カードを二枚セットして、ターンエンド」

「ふえ？」

『花道 遊英』

手札

三枚

モンスターゾーン

守りの花 カランコエ レベル4 ATK/1600

魔法、罨ゾーン

セットカード

ライフ

4000

『柳 倭紋』

手札

二枚

モンスターゾーン

無し

魔法、罨ゾーン

セットカード×2

ライフ

400

「な、何もしないでターンエンドかよー！」

「なんだ、柳のやつ何を考えている？」

ここで二度目のカードセットのみのエンド。

つくづく読めない柳の戦術に、皆は首を改めて傾げるばかり。

このターンどう行動するか悩む遊英。

もしかすると、伏せカードには攻撃反応系のトラップがあるかもしれない。

その場合、遊英のモンスターが全滅する可能性も考えられる。

悩む遊英、迷う遊英。

沈黙の後に取られた選択は。

「柳君に、ダイレクトアタック!!」

直接攻撃。

攻撃反応系のトラップで。

モンスターを倒されようが弱体化されようが。

その後新たなモンスターを出せば被害は最小限で済む。

「くっ……ぐあ……!!」

柳ライフポイント、400—1600=0

「ほえ？」

花道 遊英、勝利。

まさかの勝利、呆気の無い勝利。

勝利と呼べるか甚だ疑問なまでの勝利。

予想外の展開に遊英。

思わず制服が崩れる。

クラスメイト一度、崩れる。

先生、ずっこける。

「な、なんだ、この呆気ない試合」

動揺を隠せない。

隠しようがない。

「ちよ、ちよつとどうしたの柳！」

「伏せカードが二枚もあったじゃねえか！」

見せてみるよ！」

あまりの出来事に柳に詰め寄る愛結と海王。

二人は柳のセットカードと手札を見てみた。  
すると。

セットカードのうち一枚は、トラップカード。

血償の守護方陣。

フィールドのモンスターが、モンスターに攻撃をする攻撃宣言時に。

その攻撃を無効にし、自分は500ポイントのダメージを受けるカード。

防御カードだが、柳のフィールドにモンスターが居ない以上使えない上に。

使っても結局ライフは0になる。

うち一枚は、ブラフのマジックカード。

攻撃封じ。

相手モンスターの表示形式を、守備表示に変更するカード。

そして残りの手札はなんと。

二枚とも上級モンスターだったのだ。

「な、な、な、なんだこりゃあー！」

「清々しい手札事故…！」

呆然と立ち尽くす二人。

柳はため息をついて語り出す。

「昔からこうだ。」

俺にはデュエルの才能がない」

「才能が無い？」

「ドロローも、カードパックの開封も、

何もかも悪い方向へと行ってしまふ。

お陰でレアカードなど数えられる位しか持っていない」

まさかの柳、絶望的な不運男だったのだ。

「でも柳君、入学試験は満点だった！」

「あの時は、俺のデッキの中でも最強各のカードコンボが揃った。

珍しく幸運だったんだ」

「ええ〜。〜」

「構築に問題があるんじゃないのか？」

柳、「デッキを見せてなさい。」

疑問を隠せない先生も、

柳にデッキを見せる様に言う。

そして柳からデッキを受け取り中身を見てみた。

「… モンスターのバランスもいい。」

確かにレアカードこそ少ないが。

カードコンボも文壇に組み込まれている…。

お前、よくこの完成度の高いデッキで事故を起こせたな」

「先生、人の傷口に塩を塗るのは止めていただくよう」

再びため息をついた後に。

柳は遊英の方を向く。

「お前にはデュエルの才能があるのだろう。」

努力も感じられる、実力もある。

必要なカードを必要な時にドローしている」

「お前のセットカードは読めている。」

それは攻撃反応系トラップだ」

「なっ!？」

「そして、お前は俺のトラップを攻撃反応系と読んで、

何か起こっても、被害を最小限で済ますべくカランコエのみで攻撃を仕掛けてきた。

俺のライフはたったの400、ほぼ最適解と行っても良いだろう」

「嘘!?!まじ?!」

柳の発言に耳を疑う海王は。

今度は遊英の持ち札を確認する。

読みは全くの当たり。

伏せられている攻撃反応トラップ。

手札にはモンスターカード。

「本当だ・・・」

「柳、……まで読めたの……!?!」

恐るべき洞察力、判断力。

愛結も先生も、感心すると共に。

その圧倒的頭脳に戦慄した。

「仕切り直す……か?」

「いや、デッキの内容を見直す時間が欲しい。

俺は、見学にさせて貰えないだろうか?」

仕切り直しを提案する先生だが。

柳は断り、逆に授業の見学の許可を頼んだ。

「ま、まあ、柳の頼みだ。

仕方無いだろう」

唸りつつも先生は見学を許可する。

「じゃあお前ら、順番にデュエルをして貰う。

とりあえずちゃんとならべー」

「はい」

「柳君…」

授業は終わり、今は放課後。

「かー、おしかったぜー！」

あとちよつとで俺の勝ちだったのに！」

「ぼこぼこにされてただけじゃないのよ…」

「何いってんだ！」

あそこのターン耐えれされすれば。

俺様の奇跡のドローで！」

「運頼みか！」

それに対して、遊英は調子最高だったね！」

海王は一日中ぼこぼこにされて授業を終えた。

対して調子は上々、全勝で授業を終えた遊英だが。

楽しそうにしている海王に比べ、

どこか難しい様子だった。

「遊英？」

「ん、なに？」

「お前柳とのデュエル以来ずっと静かだな」

「いや、ちよつと思う所があつてね」

「思う所、か。」

「そりゃああるよね、あんな手札事故で終わったんだもの」

「それもそうなんだけど。」

「何か別の物を感じたつて言うか…。」

「うーん、手加減とかしてたんじゃねーの？」

「だつてあいつ、強いんだろ？」

「なのかなあ」

三人一緒に帰る帰路。

ふと町のデイスプレイに耳を傾けると、

ニュースの音が聞こえてきた。

「今日、朝8時頃、デュエルの後、

カードと金銭を奪い去られる事件が発生しました。

カードを奪われた松田松茸氏は

「謎のモンスターを使っていた。

エヴォル召喚と言う知らない召喚を使ってきた。

デュエルの後に気を失い、

気付いたら貴重品とカードを奪われていた」

「と、証言しています。

警察は、強盗の疑いがあるとして。

犯人の行方を追っています」

デイスプレイから聞こえて来たエヴォル召喚のワード。

「遊英、今のニュース聞いた？」

「うん、エヴォル召喚って、言ってたよね」

「遊英と間牛以外にも使うやつが居るんだな」

「でも、一般的なカードじゃないのは確かだ。

強盗って言ってたし、僕達も気を付けなきゃね」

あまり深くは考えずに。

強盗には気を付けようと向き合い頷く三人。

すると愛結、少し気恥ずかしそうに。

かつ申し訳なきように二人に言った。

「えっと、気を付けようって言った矢先になんだけど」

「どうしたの、雲堂さん？」

「三人でショッピンング行かない？」

「この前は結局デッキの強化できなかつたしき。」

「私、どうしても新しいカードが欲しくて」

「どうするよ遊英」

「そうだね」

判断を委ねられ、愛結と目を合わせる遊英。

手を合わせ首をコクリと傾げ愛結はねだる。

「いいよ、どうしてもなんでしょ」

「ありがとう遊英！」

「よっしゃ！だつたら折角だし、

どつかでかいところのショッピンングモールに行こうぜ！

俺のデッキも大幅強化で連戦連勝間違い無しだぜ！」

「あんたはデッキよりもプレイングの強化をしなさいよ」

カードショップへ行くことが決定。

今度は中心街の大きなショッピングモールのだ。

電車に乗って三人は大通りへと向かい。

そしてショッピングモールへと到着した。

「すげえー！」

「さすが大通り、色んなお店が充実してるね」

大通りのショッピングモールは伊達じゃない。

店の種類が充実しているだけあり。

訪れる人の量もその種類も尋常な数ではない。

気を抜けば、人の多さで同行人を見失い、

迷子になってしまいそうな程だ。

「よっしゃー！」

今日は遊び尽くすぞー！」

「おー！」

「おー！…ってあれ？」

僕達、カード買いに来ただけじゃ？」

興奮して目的を見失った二人に連れられ。

遊英は、三人でシヨツピングモールを満喫する。

小物売り店で見つけたおかしな道具で笑ったり。

ブティックで互いに着せ替えをして遊び。

二人で海王にキラキラ光るダサイコーデイネットをして遊んだり。

ゲームセンターでクレイジーゲームに搾り取られたり。

遊んでいるうちにお腹が空いてきたので、

折角なのでお寿司を食べたりした。

「遊んだぜ〜」

「お寿司美味しかったね〜」

「うん、満腹満腹!」

「じゃあ、そろそろ帰るか」

「そうね、十分遊んだし」

「今日は楽しかったねー」

シヨツピングモールを満喫し尽くした三人。

すっかり満足し、帰宅することを決定。

「つてちがーう!!」

「うわ!なんだよ遊英!」

「僕達カード買いに来たんでしょ!？」

「あ、そうだったね」

「どうしても来たいって言ってたの雲堂さんじゃない……」

決定、はせず。

遊英が本来の目的を思い出し叫んだ。

言い出しつぺの目的忘れに涙の滝を流す遊英。

「あははー、ついうっかりうっかり」

「全く、二人とも行くよ！」

カードシヨップ！」

「はーい……ってあれ、海王は？」

改めてカードシヨップへ向かおうとした遊英達だが。

海王の姿が突然消えた。

「あれ、さっきまで一緒に。」

海王君？」

「海王ー！」

二人は完全に海王を見失ってしまった。

このだだっ広いシヨッピングモールの中で。

「遊英、どうしよう！」

「とにかく探そう！」

「どうやって！」

「手分けして探そう！」

僕はこつちを、雲堂さんはあつちをお願い！」

「じゃ、じゃあ、30分後お寿司屋さんで合流しましょう！」

「わかった！」

互いに別方向を手分けして探すことにした愛結と遊英。

当の海王はと言うと。

人の波に流されてモールの外へと出てしまっていた。

「うわっぷ！」

ちよつと、お、押さないで！」

無理やり身をよじって何とか波から脱出。

「ぷはっ！」

しかし前述した通り、海王のいる場所はすっかりモールの外。

海王は完全に、遊英達とはぐれてしまった。

「しょうがねえ、早く戻らないとだな。」

って、ちよつと！うおあ！」

遊英達と合流しようとモールの中へ向かう海王だが。

再び人の波に流されそうになってしまい。

慌てて路地裏に避難した。

「危なかった…。あとちよつとでまた流される所だったぜ…。」

やれやれと汗を拭く海王。

いつモールに入るかタイミングを見計らおうとすると。

路地裏の奥から悲鳴が聞こえてきた。

「ぎやあああああああああ!!!」

「な、なんだ!?!」

突然聞こえてきた悲鳴に驚く海王。

野次馬精神で悲鳴の聞こえた方向へ走ると。

その先で見つけた物は、

デュエルの後の様子の二人の男だった。

「デュエル…?」

だが様子がおかしい。

敗北したであろうデュエリストが、

白目を向いて泡を吹いているのだ。

一向に起き上がる気配が無い。

まるで、気絶しているかのような。

危険そうな気配を感じた海王。

警察を呼ぼうと、その場を離れようとする。

地面に転がる空き缶を蹴ってしまった。

静かな路地裏に響き渡る空き缶の音。

「やべっー！」

「待て」

海王は、男に気付かれてしまった。

# 編 発覚する世界の異変、 新たなるエヴォルモンスター 前

「うっ…！」

「呼ぶ気だな…警察を…」

「いや…」

「丁度良い、デュエルだ」

「は!？」

「オレとデュエルをし、勝てたのならば見逃してやらん事もない」

「負けたら、どうなるんだ…?」

「気絶しているこの男の様になる」

デュエル、気絶、海王の中に予感が走った。

もしかするとこの男、ニュースで報道された事件の犯人じゃないのか?と。

走って逃げる選択を取る海王。

しかし、海王の行く先を塞がれるかのように。

そこには見えない壁、厳密には見えなくはない。

黒いソリッドビジョンのエフェクトの様な物がある。

それに道を遮られ逃げられなくなってしまうた。

「なんだこれ！」

「驚いたか、驚いたな。

オレも驚いたよ。

「こんな力がオレの中にあっただなんて」

「くそつ、仕方ねえ！」

受けてたつてやる！」

逃げる選択肢を奪われた海王。

デュエルを断れば何をされるかわからない以上。

やむを得ず、デュエルの申し出を受ける。

その時路地裏の外から一瞬入ってきた車の光。

その光に照らされ、暗くてよく見えなかった男の顔がはつきりと見えた。

「あんだ、名栗 貫太郎じゃねえか！」

名栗 貫太郎、彼はボクサーだ。

それもプロの。

無防備な構えから繰り出される紙一重の回避、そしてカウンター。

それらを持ち味とし、一度はチャンピオンまで上り詰めた男。

「なんだ、オレを知っているのか」

「知ってるさ、紙一重の回避が持ち味のあんただったが。」

そのスタイルは次第に他のボクサーに対応されて行き。

今ではすっかり表舞台には出てこなくなっただけだ！」

「強盗つてニユースに出てたのあんただろ。」

あんた強かったんだろ！

なんで強盗なんてしたんだ！

何で金なんて盗んだ！

また強くなってチャンピオンになりやいいじゃねえか！

男らしくねえぞ！」

「ガキにはわからねえさ。」

オレには直ぐにでも金が必要な理由がある。

さあ早く構えろ、デュエルだ！」

「よっしゃやってやる！」

取り出されたスマートフォン。

腕のリングにセットされると。

忽ち形を変える。

五つのモンスターゾーン。

五つの魔法、罨ゾーン。

フィールド魔法ゾーン、墓地。

デッキセットゾーン。

物の数秒でスマートフォンは。

近代的なデュエルディスクへと姿を変えた。

「デュエルディスク！セット完了！」

腰のケースからデッキを手にする海王と名栗。

「ソリッドビジョンシステム！起動！」

勢いよくディスクにデッキを差し込む。

「デュエルポーンメント！リンク完了！」

ディスクにより自動シャッフルされる互いのデッキ。

そしてドロウされる初期手札の五枚のカード。

デュエルの準備が。

完了した。

「決闘!!」

『創奇 海王』

手札

五枚

モンスターゾーン

無し

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

4000

『名栗 貫太郎』

手札

五枚

モンスターゾーン

無し

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

4000

辺りに広がるソリッドビジョンのエフェクトと共に。

デュエルが開始される。

「先行は俺だ！ドロー！」

「いきなりあるぜ！高攻撃力モンスター！」

俺は！機械銃士 ガンナードを召喚！」

機械銃士 ガンナード レベル4 ATK/1600

「トラップカードを一枚セットしてターンエンドだ！」

「お前、何カードの種類宣言してんだ」

「え？あー！しまった！気持ちが高ぶってつい……」

『創奇 海王』

手札

四枚

モンスターゾーン

機械銃士 ガンナード レベル4 ATK/1600

魔法、罫ゾーン

セットカード

ライフ

4000

『名栗 貫太郎』

手札

五枚

モンスターゾーン

無し

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

4000

「とんだ素人か、

オレのターン、ドロー！」

「攻撃表示のモンスター、宣言されたトラップ。

見え見えの罨だ。

俺はモンスターとリバースカードをセットしてターンエンド！」

『創奇 海王』

手札

四枚

モンスターゾーン

機械銃士 ガンナード

レベル4

ATK/1600

魔法、罨ゾーン

セットカード

ライフ

4000

## 『名栗 貫太郎』

手札

四枚

モンスターゾーン

セットモンスター

魔法、罨ゾーン

セットカード

ライフ

4000

「な、何もせずにターンエンド？」

「へっ！俺のトラップにびびったか！」

素人はどつちだよ！」

「俺は機械銃士 ガンナードをリリースして。

機械剣士 ブースト・ソードマンをアドバンス召喚！」

機械剣士 ブースト・ソードマン レベル6 ATK/2300

「柳の奴も使つてたアドバンス召喚戦術だぜ！」

更に俺は、手札からマジックカード！」

追加ユニット装備を発動！」

「手札の機械族モンスター一体を、俺の機械族モンスターに装備させるカード！」

俺は手札の、機械装甲 メタアームドをブースト・ソードマンに装備！」

「モンスターを装備するカードか」

「へへ、驚くのはここからだぜ！」

ブースト・ソードマンで攻撃だ！」

ブーストソードスラッシュ！」

伏せられていたセットモンスターは。

レベル4、守備力1500のモンスター、パンチマン・ジャブラ。

ブースト・ソードマンにより切り裂かれ、破壊される。  
「この瞬間、ブースト・ソードマンの効果を発動！」

このカードに装備しているモンスターカードを墓地へ送る事で。  
このモンスターはもう一度攻撃できる！」

「なにっ！」

「装備されている機械装甲　メタアームドを墓地へ送り！」

もう一度攻撃を行っぜ！」

加速しろ！第二ブースター点火!!」

墓地へ送られる装備カードとなっていたメタアームド。

メタアームドの力を燃料とし、

ブースト・ソードマンの剣の峰に着くブースターが点火され。

第二の斬撃により、名栗は切り裂かれた。

「ウオオオオ！ハア!!」

「ぐあっ!!」

名栗ライフポイント、4000—2300—1700。

「だが、この瞬間、オレはトラップを発動する！」

トラップカード！増殖カウンター！

ダイレクトアタックを受けた時。

ダイレクトアタックを仕掛けてきた相手モンスターよりレベルの低いモンスターを  
一体墓地より蘇生し！

手札から同じ条件でもう一体、モンスターを特殊召喚する！

まずレベル4のパンチマン・ジャブラを蘇生！

そして、手札から。

デンプシーラー・フックを特殊召喚！」

パンチマン・ジャブラ レベル4 ATK/1500

デンプシーラー・フック レベル5 ATK/1900

「二体のモンスターを特殊召喚だとお!?」

「この効果で特殊召喚したモンスター達は。

効果が無効となり、攻撃力は半減する！」

パンチマン・ジャブラ レベル4 ATK/750

デンプシーラー・フック レベル5 ATK/950

「おお！ラッキー！」

そんな攻撃力じゃあ俺のブースト・ソードマンは倒せないぜ！」

「そう試合を焦るな、オレの攻めはスローなんでな。」

「な、なんだとお！  
見てるがいい、ここからが本番だ」

そんな効果もねえ低攻撃力モンスター二体。

オレのブースト・ソードマンの敵じゃねえよ！

返り討ちにしてやるぜ!!

ターンエンドだ！」

『創奇 海王』

手札

二枚

モンスターゾーン

機械剣士 ブースト・ソードマン レベル6 ATK/2300

魔法、罨ゾーン

セットカード

ライフ

4000

『名栗 貫太郎』

手札

三枚

モンスターゾーン

パンチマン・ジャブラ レベル4 ATK/750

デンプシーラー・フック レベル5 ATK/950

魔法、畏ゾーン

無し

ライフ

1700

「オレのターンドロー！」

効果の有無、そして攻撃力数値でばかり物を見る。

お前の様なバカほど、カウンターを入れやすい奴はそういない」

「なんだと！」

「驚くのはここからだと言ったな。

その言葉、そっくりそのまま返してやろう」

「俺はレベル3モンスター、ブロウラー・タカを召喚！」

ブロウラー・タカ レベル3 ATK/1300

「レベル3、レベル4、レベル5。」

レベル3から5の、異なるレベルのモンスターが三体揃った！」  
「異なるレベルのモンスターが…揃った…？」

異なるレベルのモンスター。

その言葉を聞き、海王は思い出した。

ニユースで聞いたあの事件を

いま自分が戦っている男の正体を。

そして、被害者の松田松茸が供述していた証言。

エヴォル召喚を。

「ま、まさか…!？」

「そのまさかだ！」

オレは、レベル3から5の異なるレベルのモンスター三体で

エクスポネンシャルを取得!!」

「エヴォル召喚！」

「さ、三体のモンスターで…！」

エ、エヴォル召喚…だとお!？」

「現れる初期レベル6！」

沈黙の拳闘士！

静拳神 ナツクル・ジョー!!」

静拳神 ナツクル・ジョー (サイレントボクシン ナツクル・ジョー)  
レベル6 ATK/1600

「シッ!シッシッ!... フウンッ...!!」

現れしエヴォルモンスター。

繰り出される風船が割れたような音が成る程の高速パンチ。

そうして高度なシャドーボクシングを見せるその姿。

引き締められた肉體。

筋肉と言う名の鋼の鎧を纏う戦士が。

海王の前に、降臨した。

場面は移りモールの中。

遊英は海王を探して走り続けていた。

探せど探せど見つからない海王。

走り続け疲労困憊の遊英は立ち止まり。

眉をハの字にひそめさせ、息を整えていると。

まるで何かに呼応するように、

遊英の手の中で、何かが光ったのだ。

「な、なに!?!」

形のない光る何かは、次第に形を作り、  
覚えのある物へとその姿を変化させた。

「これは……カード?!?」

それはカードだ。

だが、ただのカードではない。

「エヴォル……モンスター……!!」

遊英の元に、再び新たなエヴォルモンスターが現れたのだ。

「これは……このモンスターは……!?!」

突如として遊英の手の中に現れたエヴォルモンスターカード。

そのカードの内容に遊英は一つの確信を得た。

「これは、海王君のカードだ!」

遊英の確信を肯定する様にカードは光りを点滅させる。

そしてそのカードは。

遊英を導こうとするかの様に。

一筋の光の帯を伸ばして行った。

「僕を導こうとしている…。」

「この先に、海王君がいる！」

「これが俺のエヴォルモンスター。」

沈黙の拳闘士、ナツクル・ジョーだ！」

静拳神 ナツクル・ジョー（サイレントボクシン ナツクル・ジョー）

レベル6 ATK／1600

「……………ッ!!」

「…っ！」

だがそいつの攻撃力はたったの1600！

俺のブーストソードマンには遠く及ばない!!」

「エヴォルモンスターの真の力はここからだ。」

やれ、ナツクル・ジョー！

ブーストソードマンに攻撃!!」

静拳神 ナツクル・ジョー、レベル6 ATK／1600

機械剣士 ブースト・ソードマン、レベル6 ATK／2300

「攻撃力の低いモンスターで攻撃を仕掛けてくるだど!？」

「この瞬間、静拳神 ナツクル・ジョーのレベルアップエフェクトを発動!!」  
「なに!?!」

「1ターンに一度、このカードが戦闘を行う時。

自身のレベルを1アップする事で。

バトルフェイズ終了時まで、

その攻撃力を1000ポイントアップさせる!!」

「フン……ッ!!」

静拳神 ナツクル・ジョー（サイレントボクシン ナツクル・ジョー）

レベル7 ATK/2600

「攻撃力2600だつてえ!?!」

「いけええい!!」

拳を前に構え迫り来るナツクル・ジョー。

ブースト・ソードマンは斬撃を持ってして迎え撃つ。

だが、むなしい。

高速で繰り出される幾重もの斬撃だが、

その全てが軽く回避され。

「フウン……!」

「グアアアア！」

逆にナツクル・ジョーのボディブローを諸に受け、吹き飛び壁に叩きつけられてしまう。

物のスクラップだ。

ブースト・ソードマンは粉々に粉碎してしまった。

「うわあああ!!」

海王ライフポイント、4000—3000||3700

「ブ、ブーストソードマン！」

「フッフッフハッフハッフ！」

ウオームアツプは終わりだ！

ターンエンド！」

名栗のターンエンドと共にナツクル・ジョーの効果も適用。

その攻撃力は、1000ポイント上昇している2600ポイントから。

元々の数値である1600ポイントへと戻った。

静拳神 ナツクル・ジョー（サイレントボクシン ナツクル・ジョー）

レベル7 ATK/1600

『創奇 海王』

手札

二枚

モンスターゾーン

無し

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

3700

## 『名栗 貫太郎』

手札

三枚

モンスターゾーン

静拳神 ナツクル・ジョー

レベル7

ATK/1600

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

1700

「俺のターン、ドロロー！」

切り札の一つであるブースト・ソードマンは、粉々に粉碎し、破壊されてしまった。

海王の手札は三枚。

そして名栗のフィールドにはエヴォルモンスターが居る。

「へっ、だけどもよお。」

お前のそのエヴォルモンスターは攻撃力たったの1600ポイント。

そんなモンスター、下級モンスターでも破壊できちまうぜ！

俺は、機械槍術士 アイアランサーを召喚！」

機械槍術士 アイアランサー レベル4 ATK/1700

「ハッ！」

「もう一度攻撃が来る前に、さっさと破壊してやる!!」

行け！アイアランサー！

メタルジャベリン！」

「ウオオオ！」

槍を深く構え、ナツクル・ジョーへ向けて突撃するアイアランサー。

アイアランサーの攻撃力は1700。

ナツクル・ジョーの攻撃力は1600，  
攻撃力の差は100。

大きな攻撃力差ではないが。

アイアランサーが上回っている。

これでナツクル・ジョーは、戦闘により破壊されるかと思われた。

「オレの言葉を忘れたか？

お前のようなバカほど、カウンターを入れやすい相手は居ない!!」

「ナツクル・ジョーがバトルを行うこの瞬間！

ナツクル・ジョーのレベルアップエフェクトを発動！」

「相手ターンにレベルアップエフェクトだど!？」

「人は攻撃を仕掛けてくるその瞬間が一番無防備になる物だ。

ナツクル・ジョーの攻撃力上昇幅は、

相手ターンに発動された場合は1000ポイントではない！」

静拳神 ナツクル・ジョー（サイレントボクシン ナツクル・ジョー）

レベル8 ATK／3200

「フンッ……!!」

「こ、攻撃力3200!？」

「ナツクル・ジョーのレベルアップエフェクトは相手ターンに発動された場合、

その攻撃力を現在数値の倍にする!!」

「なんだって!？」

「行け! ナツクル・ジョー!」

カウンターブロウ!!」

突き出された槍を意図も容易く回避するナツクル・ジョー。

そのまま瞬時にアイアランサーの懐に入り込むと。

アイアランサーがブレーキをかけるその前に、

アイアランサーの頭へ向けてパンチを繰り出した。

突撃するアイアランサーの勢いと、

ナツクル・ジョーのパンチ。

二つの勢いが合わさり、パンチの威力は数倍へと跳ね上がる。

パンチは顔面に直撃。

止まらない勢いのまま押し付けられる拳は。

メキメキと音を立ててアイアランサーの頭部を潰す。

「アイアランサー!!」

潰れた頭部は、体から契れ吹き飛んで行く。

頭部を失い狂った回路はショートを起こし。

放電と共にアイアランサーは爆発四散した。

アイアランサー、破壊。

そして海王は、1700と3200、その差分の数値のダメージを受けなければなら  
ない。

3200—1700=1500

よって海王のライフから1500の数値がマイナスされた。

海王ライフポイント、3700—1500=2200

「うわああああ!!」

折角召喚したモンスターは破壊された。

通常、召喚を行えるのは1ターンに一度。

召喚する権限を失い、ライフも大きく削られてしまった海王。

これ以上は成す術も無く、

リバースカードをセットしてターンを終了させる。

「リバースカードを一枚セットして、ターンエンド!」

この瞬間、ナツクル・ジョーの攻撃力は元々の数値へ戻る。

静拳神 ナツクル・ジョー(サイレントボクシン ナツクル・ジョー)

レベル8 ATK/1600

『創奇 海王』

手札

一枚

モンスターゾーン

無し

魔法、罨ゾーン

セットカード

ライフ

2200

『名栗 貫太郎』

手札

三枚

モンスターゾーン

静拳神 ナツクル・ジョー

レベル7

ATK/1600

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

1700

「オレのターン、ドロ―！」

エヴォルモンスターから放たれる光の帯の先に、海王が居ると確信して駆ける遊英。そんな彼を急かすように、エヴォルモンスターカードの光が点滅した。

「海王君…!?くそつ、急がないと！」

光の帯はモールの出口まで続いている。人の入り乱れる中を掻い潜り、遊英は漸くモールの外へと出た。

「魔法カード、レベルオーラを発動！」

オレのエヴォルモンスター一体は次の俺のターンまで、

自身のレベル×100ポイント攻撃力をアップさせる！

更に次のオレのターンまで、攻撃力のアップしたモンスターは戦闘では破壊されず、相手の効果で攻撃力がダウンする事は無い!!」

「なんだって!?!」

静拳神 ナツクル・ジョー レベル8 ATK/2400

「これでナツクル・ジョーの攻撃力は貴様のライフを上回った！」

「く、くそっ！」

「やれ、ナツクル・ジョー！ナツクル・シユート!!」

この攻撃を食らえば敗北は必至。決して受けられない海王は現在唯一のリバースカードを発動する。

「こ、この瞬間トランプカード、緊急出動要請を発動！」

自分ライフより高い攻撃力を持つモンスターからダイレクトアタックを受ける時。

デッキからレベル4以下の機械族モンスター一体を手札に加え。

そのバトルを終了させる!!」

「なにっ…?!」

辛くも敗北を逃れた海王。デッキを開き緊急出動要請の効果で、手札に加える機械族モンスターを選ぶ海王。

有用なカードを選別する中で。淡く光る、見覚えのないカードを見つけた。

M—W 機械軍師 カナメモチ（メタル—ウオリアー きかいぐんし カナメモチ）

「こんなモンスター、デッキに入れた覚えねえぞ…?」

テキストの書かれていない効果モンスターカード。謎のカードに疑問を持っていると、聞き覚えのある声が海王の名を呼んだ。

「海王くーん！」

「この声、遊英!!」

遊英だ。どうしてここに辿り着けたのか海王にはわからないが。海王の元へと遊英が辿り着いたのだ。

「海王君！受け取って!!」

遊英の手から投げられた一枚のカード。そのカードを手にとった瞬間、海王のデッキが光り。

M—W 機械軍師 カナメモチがテキストを表した。

「俺のデッキが、カードが!?!」

「この現象は!?!」

光るカードとデッキ。海王は、遊英は。つい最近この光景を見た。

そう、つい先日の事。間牛とデュエルを行った遊英のデッキで起こった現象だ。

「な、なんだ、奴のデッキが!?!」

「よつしやあああー!?!」

手札に加えるのは、M—W 機械軍師 カナメモチ。

「何が起こるか知らんが。オレはカードをセットして、ターンエンドだ!」

『創奇 海王』

手札

二枚

モンスターゾーン

無し

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

2200

『名栗 貫太郎』

手札

二枚

モンスターゾーン

静拳神 ナツクル・ジョー

レベル8

ATK/2400

魔法、罨ゾーン

セットカード

ライフ

1700

エヴォルモンスターを手にし起こった現象により、勝利の可能性が海王に光を指す。遊英が見せた奇跡の逆転を、海王も。

「俺の、ターーーーン！」

「海王君!!」

「ああ！俺はM—W 機械軍師 カナメモチを召喚!!」

M—W 機械軍師 カナメモチ

(メタルウオリアー きかいぐんし カナメモチ)

レベル4 ATK／1000

「カナメモチの効果！」

このカードの召喚成功時、墓地のレベル3以下の機械族モンスター一体を効果を無効にして、特殊召喚する！

復活しろ！メタアームド！」

甦る機械装甲 メタアームド。そのカードには、遊英のカードと同様に新たなテキストが加えられていた。

M—W 機械装甲 メタアームド(メタルウオリアー きかいそうこう メタアームド)

レベル3 ATK／1000

M―W（メタルウオリアー）、カナメモチと同じ名が。メタアームドに書き加えられていたのだ。

これまで個々の力で戦っていた海王のモンスターカードその全てが。軍師の出現により統率が取れたかのように、同じ名を加えていた。

「奴のカードが、書き変わっている!?!」

「おっしやあ!俺はレベル4モンスター、M―W 機械軍師 カナメモチとレベル3モンスター、M―W 機械装甲 メタアームドで。

エクスポネンシャルを取得!!」

二重螺旋を描く二体のモンスター。

迸る稲妻と共に光は収束し二つの力を一つにする。

「エヴォル召喚!!」

巻き起こる光の大爆発。大宇宙の誕生を連想させるその中から現れし新たなるエヴォルモンスター。

「発進だ!初期レベル5!

M―W 機械竜騎士 ドラゴン・アッシュ!!」

M―W 機械竜騎士 ドラゴン・アッシュ（メタルウオリアー きかいりゆうきし

ドラゴン・アッシュ）



# 編 発覚する世界の異変、新たなるエヴォルモンスター 後

M—W 騎士竜騎士 ドラゴン・アツシユ。

鋼の装甲を身に纏う機械飛竜、同じくして、鋼の装甲に身を包む機械戦士。  
新たなる、海王の、エヴォルモンスターが。

今その姿を表した。

「エヴォルモンスター…だと?！」

「勝つんだ海王君!」

「ああ!行くぜ、ドラゴン・アツシユ!」

振り向かず、声も発さず、海王の言葉に答えるように。

両手に持つ大振りの槍を握り締め、ドラゴン・アツシユは身構える。

「俺はドラゴン・アツシユの、レベルアップエフェクトを発動!!」

1ターンに一度、自身のレベルを1アップする事で。

墓地の機械族モンスター一体をドラゴンアツシユに装備する!

メタアームド装着!ユニオンゲット!!」

ドラゴン・アツシユのレベルはアップし、メタアームドが墓地より現れる。

ドラゴン・アツシユと電磁力で引かれ合うメタアームドは、亀のようなその姿を変形させ。

鎧の姿となってドラゴン・アツシユと合体した。

「また、モンスターを装備したか。」

そんな事をして何になる…！」

「……」からが本番だ！

ドラゴン・アツシユの効果！

このカードの攻撃力は、このモンスターに装備されているモンスターカードのレベル×100ポイントアップする！」

M—W 機械竜騎士 ドラゴン・アツシユ レベル6 ATK/2300

「攻撃力がアップしたぞと!？」

「へっ、ドラゴン・アツシユは。最大で二枚まで、墓地の機械族モンスターを装備する事で、その攻撃力をアップさせるのさ！」

「なんだと…!？」

「そしてお前のモンスターは、戦闘を行う時にレベルをアップする事で攻撃力をアップさせるモンスター。」

つまり俺のターンならば、俺から攻撃しなけりや攻撃力アップもくそもねえだろ！

俺はカードを二枚セットして、ターンエンド！」

ドラゴン・アツシユの効果でメタアームドを墓地より装備。セットカード二枚を伏せ、磐石な状態で次のターンを迎えようとする海王だが。

名栗がそれを許す事は無かった。

「そのターンエンドを、俺が許すと思ったか！」

「この瞬間、ナツクル・ジョーの効果が発動!!」

「なにっ!？」

「この効果は、攻撃表示のレベル5以上のモンスターが相手フィールドに存在する場合。

相手ターンのメインフェイズ終了時、またはバトルフェイズ時に発動できる！」

レベル5以上のモンスターがフィールドに存在する事で発動される効果。

だらりと脱力し腕を垂らすナツクル・ジョー。

まるで隙だらけ、ノーガード、殴ってくださいと言わんばかり。

「相手の攻撃表示のレベル5以上のモンスターはこのターン。

ナツクル・ジョーと強制戦闘を行わなければならない!!」

「きよ、強制戦闘だってえ!？」

まるでノーガードのナツクル・ジョーに。

誘われるように攻撃をしに行くドラゴン・アツシユ。

その手の槍を大きく振りかぶって、空気を貫くような速度で突き出した。

「ハアア！」

「待て！ドラゴン・アツシユ！」

紙一重。

ドラゴン・アツシユの攻撃を紙一重で躲し、ナツクル・ジョーはカウンターを繰り出す。

「もう遅い！攻撃表示で出したのは悪手だったな！！」

ナツクル・ジョー、レベルアップエフェクト発動！

このカードが戦闘を行う時。

自身のレベルを1アップする事で、攻撃力を上昇する！

この効果は相手ターンに発動された場合、攻撃力を現在数値の倍にする！」

ナツクル・ジョー現在の攻撃力は2400その二倍。

つまり4800の攻撃力がドラゴン・アツシユと海王を襲う事となる。

静拳神 ナツクル・ジョー レベル9 ATK/4800

「フッフフ…！！」

「こ、攻撃力4800だとおお?!?!?!!」

「どうだ！これがナツクル・ジョーの真価！

他カードでアップした攻撃力は更に倍化、

その上でお前のエースモンスターと強制戦闘を行う!!

そしてこの攻撃をともに受ければお前のライフは0となる！砕け散れええ!!」

「いいやまだだ！モンスターに装備されているメタアームドの効果を発動！

このカードが装備しているモンスターの戦闘で俺が受けるダメージは半分になる。

更に、装備されているこのカードを墓地へ送る事で、装備モンスターの破壊を無効にする！」

ドラゴン・アツシユの体からパージされるメタアームドは。

更なる変形により鎧から盾となり、

ナツクル・ジョーの攻撃からドラゴン・アツシユを守った。

だが、数値こそ半減するとは言えど、

攻撃力を越えられた分のダメージは完全には回避できない。

攻撃力4800→攻撃力2300∥2500。

メタアームドの効果によりそのダメージは半分となり1250。

よって海王のライフは2200→1250∥950で、残りライフは950となる。

抑えきれない攻撃の余波は、ドラゴン・アツシユの装甲を傷付けると共に。

その衝撃波で海王を吹き飛ばした。

海王ライフポイント、2200—1250＝950

「うわああああ!!」

「海王君!!」

「クリーンヒットは免れたか…!」

攻撃力4800の驚異を躲し、辛くも敗北を免れる海王。

ポロポロの体で立ち上がり、デュエルディスクを構え直し改めて宣言をする。

「耐え抜いたぜ…!」

今度こそ、これでターンエンドだ!」

ナツクル・ジョーの効果により。

攻撃力は倍化された数値から元に戻り、2400となる。

静拳神 ナツクル・ジョー レベル9 ATK/2400

『創奇 海王』

手札

無し

モンスターゾーン

M—W 機械竜騎士 ドラゴン・アッシュ レベル6 ATK/2000

魔法、罨ゾーン

セットカード二枚

ライフ

950

『名栗 貫太郎』

手札

三枚

モンスターゾーン

静拳神 ナツクル・ジョー レベル9 ATK/2400

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

1700

「オレのターンドロロー！」

「この瞬間レベルオーラの効果は切れ、ナツクル・ジョーの攻撃力は1600に戻る」

静拳神 ナツクル・ジョー レベル9 ATK/1600

「ナツクル・ジョーで、M-W 機械竜騎士 ドラゴン・アッシュに攻撃し。」

レベルアップエフェクトを発動！

自分ターンに発動された場合の上昇数値は1000！

よって攻撃力を1000ポイントアップする！

ナツクルシュート!!」

静拳神 ナツクル・ジョー レベル10 ATK/2600

ドラゴン・アツシュの攻撃力は2000。

対するナツクル・ジョーは2600。

攻撃力が負けている以上この攻撃を受ければ、

ドラゴン・アツシュは破壊され更に、

その攻撃力の差分の600のダメージを海王は受ける。

折角遊英が届けてくれたモンスター。

強力な効果を持つエヴォルモンスター、「M—W 機械竜騎士 ドラゴン・アツシュ」。

このモンスターを失えば、勝利への道は閉ざされてしまう。

「海王君トラップだ！」

「ああ！トラップカードリバーズ！

ゲット・ユニオン・ライドオン！

墓地のM—Wモンスターを、フィールドのM—Wモンスターに装備させる事ができる

!

俺はレベル4モンスター、M—W 機械銃士 ガンナードをドラゴン・アツシユに装備！」

墓地より現れ、ビームライフル銃へとその姿を変形するガンナード。

ドラゴン・アツシユは槍を乗っている機械飛竜に連結させ収納。

そしてそのビームライフルを手に取り装備した。

「ドラゴン・アツシユの効果で攻撃力をアップするつもりか。

だが、そのモンスターのレベルは4。

たった400の上昇ではオレのナツクル・ジヨ―は越えられない！」

「それはどうかなー！」

「なに…!？」

「ガンナードの効果！」

このカードを装備したモンスターの攻撃力は。

ガンナードのレベル×100ポイント攻撃力をアップする！」

ドラゴン・アツシユの効果により、装備されているモンスターのレベル×100ポイントの攻撃力アップ。

そしてガンナードの効果により、

装備されているガンナード自身のレベル×100ポ

イントにより。

ガンナードのレベル4×100の400ポイントの攻撃力がアップする。

M—W 機械竜騎士 ドラゴン・アッシュ レベル6 ATK/2800

「相乗効果で攻撃力は800ポイントのアップだ！

行けえ海王君！」

「おうよ！今度はこつちがカウンターだ！

行け、ドラゴン・アッシュ！

ライフル・レーザー・カノン！」

「ハアアア！」

レーザー砲はナツクル・ジョーの眉間にロックオンされ放たれる。

ナツクル・ジョーの攻撃力は2600。

ドラゴン・アッシュの攻撃力は2800。

攻撃力はドラゴン・アッシュが200上回っている。

漸くナツクル・ジョーが、戦闘により破壊されると思われた。

が。

「ならば、更にカウンターで攻めてやろう。

手札から速攻を魔法発動！

フエイク・アタック！」

「なんだって!？」

「まだ手を隠し持っていたのか!？」

「自分モンスターが、自身より攻撃力の高いモンスターと戦闘を行う時。

その攻撃を無効にして、攻撃力を元々の攻撃力の半分の数値にして直接攻撃を行える  
!。」

紙一重。

再び紙一重で躲されるドラゴン・アツシユの攻撃。

そして、ドラゴン・アツシユに攻撃すると思われたナツクル・ジョーの攻撃の矛先が  
海王へと向けられる。

ナツクル・ジョーの元々の攻撃力は1600。

その半分の数値は800、よってナツクル・ジョーの攻撃力は。  
2600から800へと変化した。

静拳神 ナツクル・ジョー レベル10 ATK/800

「直接攻撃だ!ナツクル・シュート!」

「ぐわあぁー!」

海王ライフポイント、950—800〃150

「海王君！」

「く、くそお……！」

「フェイク・アタックによる攻撃力変化はバトルフェイズ中のみ。

よつてナツクル・ジョーの攻撃力は1600に戻る」

静拳神 ナツクル・ジョー レベル10 ATK/1600

「オレはリバースカードを二枚セットして、ターンエンド！」

『創奇 海王』

手札

無し

モンスターゾーン

M—W 機械竜騎士 ドラゴン・アッシュ レベル6 ATK/2800

魔法、罨ゾーン

セットカード

M—W 機械銃士 ガンナード

ライフ

150

『名栗 貫太郎』

手札

二枚

モンスターゾーン

静拳神 ナツクル・ジョー レベル10 ATK/1600

魔法、罨ゾーン

セットカード二枚

ライフ

1700

「俺のターン…ドロー…！」

「この瞬間、トラップカードリバース！」

ノーガードラウンド！

今より三度目のお前のエンドフェイズまで、

お互いのモンスターは守備表示にはできない！」

発動される守備表示を封印するトラップカード。

その効果の適用と共に、ドラゴン・アッシュとナツクル・ジョーの居る空間が。ソリッドビジョンによりボクシングのリングへと姿を変えた。

「そんな!？」

「こ、これじゃあ守備表示で耐えることもできねえ……」  
「更に永續トラップ、コーチ・エールを発動！」

手札のモンスター一体を墓地へ送る事で。

このカードがフィールドに存在する限り今より三ターンの間。

オレのモンスターの攻撃力は、墓地へ送ったモンスターの攻撃力の半分アップする  
！」

リングの外に現れるジャージ姿のモンスター。

雄叫びと共にタオルを握り締めた手を突き上げた。

「ウオオオオオオオ！」

「オレが墓地へ送るのは。

攻撃力1600のブロウラー・アツプライト。

よって攻撃力はその半分の800ポイントアップ！」

静拳神 ナツクル・ジョー レベル10 ATK/2400

「こ、攻撃力2400って……しかも防御はできねえ……。」

こ、こんなの、どうすりゃあいんだよ……。」

ドラゴン・アッシュを攻撃表示で残せば、

ナツクル・ジョーの効果により強制戦闘が開始される。

だが、ノーガードラウンドにより守備表示への変更は不可能。

それに加えナツクル・ジヨ一の攻撃力はコーチ・エールにより800ポイントアップした2400。

強制戦闘が行われ、レベルアップエフェクトにより二倍となればその数値は4800。

そんな状況絶望的、半ば諦めかけている海王は。

遂に地に膝をついてしまった。

「海王君！くそ！まだ、僕が代わりにデュエルを…!!」

膝を付き、俯く海王。

彼を助けようと駆け寄ろうとする遊英だが。

見えない壁に阻まれて、近寄ることが出来ない。

「海王君！海王君！

なぜ、なぜこんな事を！」

「なぜ？金が必要だからだ、すぐにでも大金が必要だからだ。

曲がりなりにもオレはプロボクサー、死に物狂いで試合は探したさ。

だが、どこを探しても、今のオレを出場させてくれる場所は無かった！

金融にも掛け合った。

だが、どこの金融も貸してやぐれない……。

オレの目的を果たすには大金がいる。

だから、こうしてエヴォルモンスターの力を使い。

奪い取っているんだ!!」

「だからって、だからってこんなの！」

海王は動かない、俯いたまま、手札をポーツと見つめている。

「戦意喪失か、ならばお前のターンは終了となるだろう」

必死の思いで壁を叩く遊英。

動かぬ海王、強制的にターン終了時に持ち込まれるかと思われたその時。

「そこまでよー！」

名栗を照らすサーチライトと共に、愛結が現れた。

「モールの外まで走ってる遊英を見つけたからここまで着いてきたの。」

そしたらエヴォルモンスターが居て。

海王がデュエルしてて。

だから、だから警察を呼んできたの！」

サーチライトで名栗を照らし、路地の出口を塞ぐ警察達。

そこにはなんと、警察だけじゃない。

柳の姿も見られた。

「柳君!？」

「用があり警察署に居た。」

通報の電話も聞いていた、愛結の様子を見るに。

ただ事では無いと見受けられたのでな。

「この出動要請は、俺が出した」

数十人にも及ぶ機動警察隊。

本来通報だけではここまで大人数の警官隊は来ない。

そんな所を、偶然居合わせた柳が。

警察に掛け合うことで、これ程の人数を出動させたのだ。

「大人しく投降しろ!」

「貴様は完全に包囲されている!」

「はっ、警察ごときが。」

「今のオレを捕まえられると思っっているのか」

「取り囲め!」

ライオットシールドを構え名栗を取り囲もうとする警察隊だが。

彼等も遊英同様見えない壁に阻まれ、名栗に近づく事すらできなかつた。

「な、なんだこれは!？」

「近付けない」

「エヴォルモンスターを甘く見るなよ。」

モンスターの力を使えない人間ごときじゃこの壁は越えられない。

オレを捕まえることは出来ない」

どうにかして壁を抜けようとする警察達だが。

抜けられない。

通れる場所も無い、壁を取り払うことも出来ない。

「海王！諦めちゃだめよ！」

「海王君！」

「ターンは強制終了。」

この瞬間、ナツクル・ジョーの効果が発動」

必死に呼び掛ける愛結と遊英を尻目に。

ターンを強制終了させ、ナツクル・ジョーの効果が発動しようとしたその時。

海王は、ゆつくりと立ち上がった。

「悪い遊英……俺、諦めかけてた……。」

どうすりゃ勝てるのか俺にはわかんねえけど。

俺は諦めたくねえ……!!」

「海王君! 忘れちゃダメだ!

君にはまだ、伏せカードが残されている!」

「伏せカード……?」

伏せカード、前の自分ターンに伏せていた残り一枚のセットカード。

それは、この状況を覆す事ができる唯一のカードだった。

「そうか…… そうか、そうか!!」

よっしやあぁー!!」

「行け! 海王君!!」

「あぁー! リバーストラップ!!」

M—W スカウト・サイクロン!

手札のカードを一枚捨てる事で、

相手フィールドの魔法、罠を一枚破壊する!」

遙か上空から現れるプロペラを着けたジェットエンジンの様な形の機械。

それは超強力な扇風機、そのプロペラを回し。

狙撃する様にコーチ・エールを対象に竜巻を起こした。

「ウオオオオ!」

竜巻に巻き込まれ遠くへ飛ばされて行くジャージ姿のモンスター。

それによりコーチ・エールが破壊された。

「これでコーチ・エールは破壊された！」

「そうだ海王君！それでいい！」

これによりナツクル・ジョーの攻撃力は1600に戻る！」

静拳神 ナツクル・ジョー レベル10 ATK/1600

「ぐっ……だが、この程度の事で。」

このデュエルに勝利できると思うな！」

2400から1600に戻ったナツクル・ジョーの攻撃力。

これでレベルアップエフェクトを発動され二倍の数値となっても3200。

ドラゴン・アッシュのレベルアップエフェクトを発動し。

墓地のレベル6モンスター、M-W 機械剣士 ブースト・ソードマンを装備すれば。

200上回ることができ攻撃力となった。

だが、名栗にもまだ手があった。

それは残された一枚の手札。

それはトラップカード、レッドカード。

手札からも発動できるトラップカードであり。

その効果は、自分フィールドの戦士族エヴォルモンスターが戦闘で破壊された時。

戦闘を行った相手モンスターの効果を次のターン終了時まで無効にし、攻撃力を500ポイントダウン。

更に相手に500ポイントのダメージを与えるカード。

ノーガードラウンドとコーチ・エール。

そしてこのレッドカードにより。

攻撃力で越えられようと、そうでなかりうと海王に止めを刺す準備が整っていたのだ。

「いいや勝つき！勝って見せるさ！

M—W スカウト・サイクロンの効果はまだある！

「なに!?!」

「デッキから、M—Wモンスターを一体、墓地へ送る！

俺が墓地へ送るのはレベル6モンスター！

M—W 機械無双砲 ローゼス・キャノン!!」

「魔法、罠を破壊しデッキからモンスターを墓地へ送るトラップだ?!」

「海王君今だ!」

「M—W 機械竜騎士ドラゴン・アッシュのレベルアップエフェクト発動!!

墓地の機械族モンスターを一体、ドラゴン・アッシュに装備する！

俺が選択するのは、今墓地へ送ったモンスター、ローゼス・キャノン！」

ドラゴン・アッシュの起こす電磁力に引かれ墓地より甦るローゼス・キャノン。

ここまで装備してきたM―Wと同様、ローゼス・キャノンも変形に変形を繰り返してその姿を変えた。

そして装備されていたガンナードも姿を変形させ、ローゼス・キャノンと合体。二つのモンスターが一つの巨大な砲台となった。

「ローゼス・キャノン装備！ユニオンゲット！」

ローゼス・キャノンのレベルは6。

よってそのレベル×100ポイントの6000ポイント。

ドラゴン・アッシュの攻撃力はアップする。

M―W 機械竜騎士 ドラゴン・アッシュ レベル7 ATK/3400

「ローゼス・キャノンが装備されているモンスターが攻撃する時。」

「な、なんだと!？」

「これでナツクル・ジョーの効果は発動できない！」

「行け海王君！」

「ドラゴン・アツシユ、攻撃だー！」

ナツクル・ジヨールの効果が発動できない。

それは、34000—16000の戦闘ダメージ。

つまり18000の戦闘ダメージを受けると言うこと。

チャージされるエネルギー。

ロックオンされるナツクル・ジヨール。

「ハイパー・メガ・キャノン!!」

攻撃力34000の、耳鳴り響く極太超ビーム砲が出力全開で放たれ。

蒼き閃光を輝かせ、静拳神 ナツクル・ジヨールごと、名栗をライフ0まで焼き付くし

た。

「ぐうううああああああ!!」

名栗ライフポイント、17000—18000〃〃

創奇 海王、勝利

ギリギリの戦い、残りライフたったの150。

全てのカードを使い切ったそんな状況で。

海王は勝利を納めた。

「よっしやあぁー!!」



「怯むな！捕まえろ！」

黒い霧の煙幕に怯む事無く名栗を拘束せんと覆い被さる様に飛びかかる警察隊だが、そこに名栗の姿らしきものは無かった。

「な、なんだ奴が居ないぞ!？」

「抵抗するな！」

「お前掴んでるの俺だつて！」

混沌と化する現場、徐々に晴れ行く黒い霧の中、柳は微かにだが目にした。

門の様に開かれた闇の中に、名栗が消えて行くのを。

「今は……」

「どこにも居ないぞ!？」

「まだ遠くへは行っていない筈だ！探せ！」

消えたなく名栗はまだ遠くへは行っていないと踏み、即座に周辺の搜索を開始しようとする警察達だが。

「待て」

柳がそれを止めた。

「無駄だ、奴はもう近くには居ない」

「柳さん、なぜ言い切れるのです」

「そうですよ、今探せばまだ間に合う！」

「もう間に合わん、奴は近くには居ない」

もう名栗は近くに居ないと、周辺の搜索を開始しようとする警察を止める柳。それでも食い下がり搜索しようとする警察に柳は言った。

「これは命令だ、無駄な労力を割くな」

立场上、柳の命令を警察が断れる事は無い。

警察は歯を食い縛りながら、搜索を諦め。

海王が襲われる前に襲われていた名栗の被害者への応急処置と、現場保存を始めた。激戦の果てに疲労困憊の海王。

海王の心配をする愛結と海王に肩を貸す遊英。

そんな三人の所に警察が来た。

「事情聴取の為、同行を願います」

そして三人は警察署へと連れていかれた。

三人が警察署へ連れていかれた理由は事情聴取の為だ。

警察署の中、取調室へ連れていかれる三人。

促されるままに椅子に掛ける三人。

暫く待っていると、一人の男が入ってきた。

「これから事情聴衆をさせて頂きます。

警察署長のラルゴです」

「警察署長!？」

「警察署長さんが直々に事情聴衆を行うのですか…?」

入ってきた男は、なんとカーネーションシティ警察署長だった。

これから話される内容を書面に書き納めるべく準備を進める。

「こちらにも事情がありましたね」

それからは三人は、様々な事を聞かれた。

名栗の発言、行動を、彼にどのようにして襲われたのかを。

そして、エヴォルモンスターの事も。

警察に取り調べられる三人は何かあったのかをあるがままに話した。

「エヴォルモンスター… またその名前が…」

ラルゴは、エヴォルモンスターの事について何か知っている様な様子だった。

「何か知っているんですか？」

エヴォルモンスターの事」

「ふむ…」

何か知っているのかラルゴに問う遊英だが。

ラルゴは思案顔をし唸るのみだった。

「知っているのなら教えてください！」

エヴォルモンスターがなんなのかを！

知っている事を教えてくれないかと頼み込む遊英だが。

ラルゴは何も言わない。

ただ、難しい顔をして書類を見つめている。

「ラルゴさん！」

何も話してくれないラルゴに痺れを切らした遊英が声を荒げたその時。

柳が取調室の扉を開け、入ってきた。

「話してやれ」

「佞紋様：：!?しかし：：」

「こいつらは、エヴォルモンスターの被害者であり、

エヴォルモンスターの所持者でもある。

もう無関係とは言えんだろう」

「で、ですが：：」

「ラルゴ」

取調室へと入ってきた柳の言葉に。

言い淀まるラルゴ。

だが、柳に話すように言われ、遂にエヴォルモンスターの事を話し始めた。

「エヴォルモンスター、正体不明のモンスターカード…。」

それは、普通のカードとは違う、特別な力を持ったカード。

エヴォルモンスターの所持者となったデュエリストは、心を邪悪に染めてしまうので「す」

「心を… 邪悪に？」

「邪悪に染まった心は、誰しもが心の奥底に持つ破壊の衝動に従い。」

デュエリストを襲うようになってしまう」

「襲われたデュエリストは、どうなるんですか…？」

「邪悪に染まったエヴォルモンスター使いに襲われ、敗北したデュエリストは…。」

「心が闇に飲み込まれ、植物状態となる」

「… ツ!!？」

植物状態、辛うじて生命活動は維持されるが。

意識は無い、生きているのか、死んでいるのか。

邪悪に染まりしエヴォルモンスター使いに敗北したデュエリストは、

そのどちらとも言えない状態となってしまうのだ。

どうすれば意識が戻るのか、その方法は不明。

もしかしたら、二度と意識は戻らないのかも知れない。

そう、海王が襲われる前、名栗に襲われていたあのデュエリストは。

もう二度と、目を覚まさないかもしれないのだ。

「しよ、植物状態…!?!」

「パニックになるのを避けるべく公にはされていないが。

エヴォルモンスター使いに襲われ、敗北したデュエリストは多い。

その誰もが植物状態となり、今も尚目を覚ましていない」

「そ、そんな…」

「それじゃ俺は、もしさっきのデュエルに負けてたら」

「お前も植物状態となっていたかもしれん」

もしさっきのデュエル、海王が負けていたら。

海王は植物状態となっていたかもしれない。

遊英達は戦慄した。

エンターテイメントのゲームだと思われていたデュエルで。

人間が目を覚まさなくなると言う隠された事実には。

「で、でも、俺に負けた名栗はピンピンしてたぜ」

「そう言えば、僕とのデュエルに敗北した間牛君も」

「先日被害にあつた松田とらやもだったな。」

極めて珍しいケースだ、もしかすると。

植物状態となる事を避けられる方法があるのかもしれない」

「いったい何故…。」

「遊英も海王も、どつちも今も穏やかよね…。」

間牛や名栗が植物状態にならなかったのは。

二人の心が、邪悪に染まって居ないから…？」

「可能性はある」

五人は顎に手を当てるようにして黙つた。

柳曰く、間牛と名栗が意識を失わなかったのは稀の例外。

なぜ、意識を失わなかったのか。

数秒の沈黙の後、ラルゴが再び口を開いた。

「それと、エヴォルモンスターについてももう一つ。

エヴォルモンスターは、このカーネーションシティの各地で出現しています」

「エヴォルモンスターが、各地で出現!?!」

「ええ、つい昨日より。」

この町の各地でエヴォルモンスターの存在が確認されたのです」  
「各地で、あんな強力なモンスターが…。」

「今後は我が柳家の協力の元、警察が対応して行く。

お前達は今後、十分に気を付けて生活をしろ」

突然にして明かされた衝撃の事実。

カードの力で心が邪悪に染まり、破壊衝動を刺激される。

カードゲームで人が植物状態となる。

その事実を、頭の中で整理できぬままに三人は、警察署を後にした。

「何か、色々と凄いこと、知っちゃったわね…。」

「ああ、俺、意味がわかんねえ」

「… 兎に角、海王君が負けなくて良かった」

「うん、本当に良かったわ」

これから先何が起こるか分からないこの状況。

遊英は必ず二人を守ると心に誓い。

拳を強く、握り締めた。

## 模索する進化の術 前編

ここはデュエリスト養成学校、デュエルアカデミア。

午前に一般的な授業が行われ、午後からはデュエルの授業が行われる。

そして今は昼休みの終わり、これから授業が始まるという所だった。

「よっしやあー！今日もデュエルが始まるぜー！」

デュエル大好き少年、創奇 海王は友人の雲堂 愛結、そして家族の花道 遊英と共に体育館へと向かっている。

彼は今日も今日とて、デュエルに張り切っていた。

「海王君、すごく張り切ってるね」

「当たり前だろお？」

俺様は前までの俺様じゃねえ。

最強モンスター、エヴォルモンスター使いであり！

世界でも俺しか持ってないであろう超レアカード、M—Wカテゴリーの持ち主なんだからなー！

んわーっはっはっは！！

「でも海王、昨日の授業ではぼろぼろに負けてたじゃない」

鼻高になって高笑いする海王に愛結が手痛いツツコミを入れるが。

海王はそれでも鼻を高くし自信満々で胸を張る。

「なあに！俺様のエヴォルモンスターを持つてすれば、並みのデュエリストなんざイチコロよ！」

「頑張つてね、海王君」

「任せる遊英！進化した俺の実力、見せてやるからな！」

「でも、エヴォルモンスターはあまり使わない方がいいと思うよ。」

昨日柳君から聞いた話だと、エヴォルモンスターを使うことで何が起こるのか分かったものじゃないし」

エヴォルモンスター使いに敗北したデュエリストは、意識不明の植物状態になるのが基本の例。

エヴォルモンスター使いのデュエルで犠牲となり、意識不明になったデュエリストは数多いらしいが。

その中でも現状確認されている例外は。

遊英に敗北した間牛 鉄也、海王に敗北した名栗 貫太郎、そしてその名栗 貫太郎に敗北した松野 松茸と言う男のみ。

慎重に事を進めようとする遊英だが。

一日経って情報を頭の中で整理した海王は。

邪悪に心が染まったエヴォルモンスター使いに敗北する事で意識不明となる。

と言う情報を逆手に考え、ならば邪悪に心が染まっていけないのなら大丈夫だろうとお気楽に考えている。

「大丈夫大丈夫、俺はいつだってピュアハートの持ち主だからよ！」

「海王つたら…。」

何が起ころるか分かりもしないのにお気楽にな海王に呆れる愛結。

斯くして授業が開始された。

「俺のターン！」

『創奇 海王』

手札

三枚

モンスターゾーン

M | W 機械剣士 ブースト・ソードマン レベル6 ATK / 2300

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

500

『倉素 銘斗』

手札

二枚

モンスターゾーン

モイスチャー星人 レベル9 ATK/2800

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

1700

「ドロー！」

ドローカードを確認する海王。

ドローカードは、モンスターカード。

レベル4モンスター、M-W 機械軍師 カナメモチ。

「来たぜ…。モンスターカードが！」

「何をする気だい。」

俺のフィールドには攻撃力2800の強力モンスター、モイスチャー星人がいるんだぜ?。」

「へへ、お前に面白いもんを見せてやるよ!。」

「なんだって?。」

「俺は、M—W 機械軍師 カナメモチを召喚!。」

M—W 機械軍師 カナメモチ レベル4 ATK/1000

「俺はレベル4とレベル6、異なるレベルのモンスターで!。」

エクスポネンシャルを取得!

エヴォル召喚!!」

「なに!?!」

高らかに宣言されるエヴォル召喚。

聞いたことの無い召喚方法に驚くクラスメイト。

異なるレベルを持つレベル6モンスターとレベル4モンスターが今。

二重螺旋を描いて飛び上がり。

『エラーです、エラーです』

「え?。」

はしなかつた。

「あ、あれ、なんだこりゃ？」

「なんでエヴォル召喚できねえんだ？」

「デュエルディスクに表示されるエラー通知。」

「エヴォル召喚はできず、不発に終わった。」

「エヴォル召喚……。俺の知らない召喚方法があるかと思っただけ。」

「どうやらハツタリみたいだね」

「え、いや、違うって！」

「他に手はある？」

「ね、ねえけど……」

「じゃあ俺のターンだね、ドロー！」

「お、おうターンエンドだ。」

「あ、じゃなくて！待てよ！待てって！」

「モイスチャー星人で攻撃！」

「ちよつとまつ！」

「呆然としている間にも淡々と進む会話。」

「海王が気付けは既に相手ターンだ。」

「待ったをかける海王だが、モイスチャー星人のビーム光線は問答無用でブー・ス・ト・」

ソードマンを攻撃。

ブースト・ソードマンの攻撃力は2300、モイスチャー星人の攻撃力は2800。  
2800—2300||500で500の戦闘ダメージ  
が発生。

そして海王の残りライフも残り500。

「ぎょえー！ー！ー！！」

海王ライフポイント、500—500||0

創奇 海王、敗北。

ジャストキル。

エヴォル召喚する事すら叶わず海王は負けてしまった。

「つたく、今日は散々な目に遭ったぜ……」

海王、今日のデュエルは全戦全敗。

セツトモンスターの名前を宣言してしまったり。

優勢だからと調子に乗ってセツトカードの効果进行を明かしてしまったり。

何らかの理由でエヴォル召喚に失敗したり等で。

三戦戦ったが、三戦とも敗北してしまっただ。

「エヴオルモンスター持ってるからって、誰でも強くなれる訳じゃないのね」

「な、なんだとく！今日はちよつと…調子が悪かったただけだ！」

「昨日も、だったでしよ」

「ぐぬっ…！」

海王の戦績をいじって笑う愛結、それに怒って歯を食い縛る海王。

そんな二人に挟まれつつ、遊英は心の中で密かに安心していた。

もしエヴオルモンスターを使っていたら、大騒ぎになっていたかもしれないと。

「うわあああああああ!!」

「そうそう、こんな風に…って、え？」

「悲鳴!?!」

「遊英!」

「急ごう!!」

突然体育館の方から聞こえてきた悲鳴。

遊英達は悲鳴の出所へと走った。

「僕は、ハイウインド・ペガシスで、モイスチャー星人に攻撃!!」

ハイウインドストーム!!」

「うわあああああ!!」

「く、倉素君?!」

体育館で行われているデュエル。

状況は、一方がライフポイント2500。

もう一方が、たった今攻撃を受け、残りライフたったの100。

巨大な差が開いている絶体絶命の状況だ。

「なんだデュエルか? 居残り練習か?」

「なのかな、でも、様子が少し可笑しいわ」

一見するとただの居残りデュエル。

だが、どうにも様子が可笑しい。

デュエルを行っている生徒は、片方が酷く怯え。

片方が狂ったように笑っている。

「どうだい? 僕のエヴォルモンスター、強いだろう、僕は強いんだ!!」

君なんかよりよっぽどね!!」

「エヴォルモンスター!!!」

エヴォルモンスター。

遊英達がその名を聞き逃すことは決して無い。

倉素が戦っている相手モンスターはエヴォルモンスターだったのだ。

邪悪な心に染まるエヴォルモンスター使いに敗北した者は意識不明となってしまう。倉素の相手の生徒は、見るからに精神状態が普通じゃない。

盤面を見れば、逆転は不可能な状況。

「デュエルを中断するんだ！」

遊英は一つの賭けに出た。

この状況、倉素にとって敗北は死を意味すると言つても過言ではない。

ならば、勝利でも、敗北でも、サレンダーでもない。

中断で意識不明を免れられるか、

結果が分かりもしない賭けに出るしか無かった。

「何さ、君」

彼は風流胤 天馬（ふうりゆういん てんま）。

遊英達の、クラスメイトの一人だった。

「中断、ねえ……いいよ、どのみち今のデュエルは僕の勝ちだからねえ」

以外にも天馬は、簡単に中断を承諾する。

思いの外話を通ると思つたその瞬間。

天馬が海王を指さして口にした。

「じゃあ今度は君が僕の相手をしてよ」

「は…?」

「僕はね、今無性にデュエルがしたいんだ…。」

この力で、兎に角誰かを叩きのめしたいんだよ!!」

「待ってくれ、なら僕が!」

「おっと、嫌だとは言わせないよ…。」

君が相手をしてくれないのならこのデュエルは中断しない」

代わりにデュエルをすると申し出ようとする遊英だが。

遮るように天馬に言われた。

海王が天馬とデュエルをするのなら。

倉素が解放され、しないのなら解放されない。

つまり海王がデュエルをするしか無くなったのだ。

「いいぜ、やってやんよ」

「待って海王君!」

相手はエヴォルモンスター使いだよ!?

もし君が負けたら、何が起こるかわからない!」

「そうよ海王!しかも貴方、今日全戦全敗じゃないの!」

必死になって止めようとする愛結と遊英だが。

海王は頷かなかった。

「天馬が要求してる相手は俺だ。

俺がデュエルをしなきゃ、倉素は解放されねえ……。

だったら、乗るしかねえじゃねえか！」

「でも海王君！」

「俺を信じてくれ、遊英！」

信じてくれ、海王のその言葉に遊英は口を紡いだ。

「……わ、わかったでも。

必ず勝ってね……」

「任せろ遊英！」

「決まりだね、じゃ、解放してあげるよ」

「か、海王、ありがとう……ひいいい」

デュエルが中断され無効となり、解放される倉素。

解除されるソリッドビジョンシステム。

解放された倉素は、遊英の元へ走ると、

その後ろに隠れ、震え始めた。

倉素は意識を失っていない。

遊英は賭けに勝った。

中絶であれば辛うじて意識不明だけは回避できる事が分かったのだ。

「は、ハツタリじゃなかった…。」

エヴォル召喚は存在したんだ…！」

「よかった、倉素君…！」

「落ち着いて倉素君、ね？」

怯える倉素が愛結に宥められる中。

デュエルディスクがセットされ、

デュエルの準備が整えられる。

遊英は今も、海王がデュエルをする事に納得をしていないが。

海王の言葉を信じて祈った。

海王が天馬に勝つてくれる事を。

「デュエルディスク、セット完了！」

スマートフォンから忽ち形を変え、

五つのモンスターゾーン。

五つの魔法、罨ゾーン。

フィールド魔法ゾーン、墓地。

デッキセットゾーン。

に展開されるデュエルディスク。

「ソリッドビジョンシステム、起動！」

腰のケースから取り出され、勢い良く差し込まれるデッキ。

「デュエルオポネント、リンク完了！」

ディスクにより自動シャッフルされるデッキ。

そしてドロローされる初期手札の五枚のカード。

「デュエル!!」

デュエルが開始された。

『創奇 海王』

手札

五枚

モンスターゾーン

無し

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

4000

『風流胤 天馬』

手札

五枚

モンスターゾーン

無し

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

4000

「先行は俺だ、ドロー！」

海王の先行でデュエルは開始される。

「俺は、M-W 機械工兵 シードライバーを召喚！」

M-W 機械工兵 シードライバー レベル4 ATK/1500

(メタルウオリアー きかいこうへい シードライバー)

「カードを一枚セットして、ターンエンド！」

『創奇 海王』

手札

四枚

モンスターゾーン

M-W 機械工兵

シールドライバー

レベル4

ATK/1500

魔法、罨ゾーン

セットカード

ライフ

4000

## 『風流胤 天馬』

手札

五枚の

モンスターゾーン

無し

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

4000

「僕のターン、ドロロー！」

「僕は、星絵秤 フレイム・リブラを召喚！」

星絵秤 フレイム・リブラ レベル2 ATK/600

(せいかいびん フレイム・リブラ)

現れたのは星座を身に画く天秤を持つ少年の姿をしたモンスター。

攻撃力は低く、レベルもまた低い。

「星絵秤 フレイム・リブラの効果！」

このモンスターを召喚したターン、

僕は星絵モンスターをもう一度通常召喚できる！」

「僕はフレイム・リブラをリリースし、星絵鷲 アース・アクイラをアドバンス召喚！」

星絵鷲 アース・アクイラ レベル5 ATK/2000

(せいかいしゆう アース・アクイラ)

現れる星座を身に画く大鷲のモンスター。

フレイム・リブラは低ステータスのモンスターだが。

本来一ターンにつき一度のみの通常召喚を。

星絵モンスターでのみもう一度可能とする効果を持つ。

そしてその効果を利用して天馬は、いきなりアドバンス召喚をし。

上級モンスターを召喚してきた。

「いきなりアドバンス召喚戦術だっ!?」

「アース・アクイラの攻撃力は、僕のフィールドの星絵モンスター一体につき300ポイントアツプする!」

星絵鷲 アース・アクイラ レベル5 ATK/2300

(せいかいしゅう アース・アクイラ)

「攻撃力2300だとお!」

「アース・アクイラで、シードライバーに攻撃!

ウイングスラツシュ!!」

「ぐあああ!」

M—W 機械工兵 シードライバー、破壊。

海王ライフポイント、4000—800||3200

「伏せカードはブラフかい?」

返す手も無しに初手から下級モンスターを攻撃表示で出すだなんて。

授業中も見てたけど、君、とんだド素人だねえ」

「くそ...!」

いきなり攻撃表示の下級モンスターを、

高攻撃力の上級モンスターに攻撃をされてしまった事で。

海王のライフは800ポイント削られてしまった。

守備表示で出していればダメージは無かった物を。

「伏せカードが何を意味するのか、僕が教えてあげるよ！

カードを二枚セットして、ターンエンド!!」

『創奇 海王』

手札

四枚

モンスターゾーン

無し

魔法、罨ゾーン

セットカード

ライフ

3200

『風流胤 天馬』

手札

二枚

モンスターゾーン

星絵鷲 アース・アクイラ レベル5 ATK/2300

魔法、罨ゾーン

セットカード二枚

ライフ

4000

「言ってくれるじゃねえか。」

だったら見せてみる！俺のターン!!ドロー!」

ドローしたカードは、M-W 機械剣士 ブースト・ソードマン。

海王のエースモンスターの一つだ。

「来たぜ逆転のドロー!」

相手フィールドにのみモンスターが存在する場合、このカードはリリース無しで召喚できる!!

発進だ!ブースト・ソードマン!!」

M-W 機械剣士 ブースト・ソードマン レベル6 ATK/2300

「ウオオオ!!」

「リリース無しで召喚だって!」

「へへ、ここからが本番だ！」

俺はマジックカード、追加ユニット装備を発動!!

このカードは、手札のM-Wモンスター一体を、フィールドのM-Wモンスターに装備させるカード!

俺は手札のレベル4 M-Wモンスター

M-W 機械銃士 ガンナードを装備させる!!」

装備カードとしてフィールドに現れるM-W 機械銃士 ガンナード。

機械仕掛けのウエスタンボディを變形。

ブースト・ソードマンの剣と合体し、ガンブレードへと姿を変えた。

「ガンナードの効果発動！

このカードを装備しているモンスターの攻撃力は、ガンナードのレベル×1000ポイント。

よって400ポイント攻撃力をアップする！」

M-W 機械剣士 ブースト・ソードマン レベル5 ATK/2700

「又ウン！」

「攻撃力、2700!?!」

「へっへ、どうだ！これが俺様の實力だ！」

運も抜群、タクティクスも抜群！

行け！ブースト・ソードマン！

ブーストソードスラッシュ!!」

背中のブースターを翼の如く点火。

共に剣のブースターを点火し、

ブースト・ソードマンは攻撃を仕掛ける。

「抜群？いいや甘いよ！伏せカードがどんな物か。

これを言うのさ！リバーストラップ！

星座の奇跡（ミラクル・サイン）!!

相手モンスターが星絵モンスターに攻撃を仕掛けてくる時。

僕の星絵モンスターの攻撃力をターン終了時まで半分にする!!」

星絵鷲 アース・アクイラ レベル5 ATK/1150

「じ、自分のモンスターの攻撃力を半分にするだど!」

「気をつけて海王君！

絶対に何か仕掛けてくる!!」

自分のモンスターを半分にするトラップカード。

2700—1150—1150。

このままでは天馬は1550の戦闘ダメージを受け、

更にアース・アクイラを失ってしまう。

「星座の奇跡の効果はまだある！」

この効果で攻撃力が半分となったモンスターはバトルでは破壊されず。

更に戦闘ダメージは相手が受ける！」

「な、なんだと!?!」

自分のモンスターの攻撃力を半分にし、モンスターを戦闘破壊から守り。

戦闘ダメージを相手に押し付けるトラップ。

本来与えられる筈の大きな戦闘ダメージを、

海王が受ける事となってしまう。

「うわあああ!」

海王ライフポイント、3200—1550=2050。

「海王君!」

「海王!」

「はっは!伏せカードってのはこうやって使うんだよ!

有効なタイミングで、有効な表示形式!

手も無く何にも考えずに伏せるのが伏せカードじゃないのさ!」

大ダメージを押し付けられただけではない。

ブースト・ソードマンには本来、相手モンスターを戦闘により破壊出来た時。

装備されているモンスターカードを墓地へ送る事で、更に攻撃を行う事を可能とする  
モンスター。

だが、星座の奇跡の効果によりモンスターの破壊は無効。

それによりブースト・ソードマンの効果は不発。

一気に勝負を決める事が不可能となったのだ。

「さあ、他に手はあるかい？」

「く、くそつ……！ターンエンドだよ！」

この瞬間、星座の奇跡の効果は切れ、星絵鷲アース・アクイラの攻撃力は元に戻る。

星絵鷲 アース・アクイラ レベル5 ATK/2300

『創奇 海王』

手札

二枚

モンスターゾーン

M—W 機械剣士 ブースト・ソードマン レベル6 ATK/2700

魔法、罨ゾーン

セットカード

M―W 機械銃士 ガンナード(M―W 機械剣士 ブースト・ソードマンに装備)

ライフ

2050

『風流胤 天馬』

手札

二枚

モンスターゾーン

星絵鷲 アース・アクイラ レベル5 ATK/2300

魔法、罨ゾーン

セットカード

ライフ

4000

「僕のターン、ドロー！」

「ここまでで海王君のライフポイントは2050」

「天馬には、1ポイントのダメージも与えられて無いわ……」

「劣勢過ぎるよ…… あ、あいつ、めっちゃめっちゃ強いんだよ…… 海王には勝てっこねえつ

て…！」

倉素の言う通り、一見攻撃力で勝っている海王だが状況は劣勢。

デュエルのペースは全て天馬が握っている。

「僕はアース・アクイラの表示形式を守備表示に変更してターンエンド」

「な、なに!?!」

星絵鷲 アース・アクイラ レベル5 DEF/1900

海王の幸運か、天馬に策があるのか。

天馬はアース・アクイラの表示形式を守備表示に変更するのみで。

それ以外は何もせずにターンを終了させた。

『創奇 海王』

手札

二枚

モンスターゾーン

M|W 機械剣士 ブースト・ソードマン レベル6 ATK/2700

魔法、罠ゾーン

セットカード

M|W 機械銃士 ガンナード (M|W 機械剣士 ブースト・ソードマンに装備)

ライフ

2050

『風流胤 天馬』

手札

三枚

モンスターゾーン

星絵鷲 アース・アクイラ レベル5 ATK/2300

魔法、罨ゾーン

セットカード

ライフ

4000

「俺のターン、ドロロー！」

「よ、よし！押ししてるぞ！ブースト・ソードマンで攻撃だ！」

ガンブレード・シヨット！」

天馬がほぼ何もせずにはターンを終了させた事で押ししていると確信する海王。

再びブースト・ソードマンで一気に攻める選択肢を取った。

「ハアア!!」

ガンナードの合体したブースト・ソードマンの剣から放たれる散弾により、アース・アクイラは破壊される。

星絵鷲 アース・アクイラ、破壊。

「行ける！ブースト・ソードマンの効果を発動！

ブースト・ソードマンに装備されているモンスターカードを墓地へ送りもう一度攻撃を行う！

第二ブースター点火!!」

M—W 機械剣士 ブースト・ソードマン レベル6 ATK/2300

「ウオオオオオ!!」

アース・アクイラを戦闘破壊する事に成功し、ブースト・ソードマンの効果を発動。攻撃力こそ下がってしまうが、追い討ちの直接攻撃により一気にダメージを与えようとしたその時。

「この瞬間、アース・アクイラの効果を発動！

このモンスターが戦闘により破壊された時。

墓地の星絵モンスターを一体特殊召喚する！」

星絵秤 フレイム・リブラ レベル2 DEF/1000

「更にこの効果で特殊召喚された星絵モンスターは、一度だけ戦闘では破壊されない！」

「戦闘破壊耐性!?これじゃあ海王君のブースト・ソードマンは効果を発動しても意味がないー!」

「そんな!」

折角発動したブースト・ソードマンの効果だが。

戦闘破壊を一度だけ免れる効果を付与されたフレイルム・リブラの前では意味がない。

何の利もなくガンナードを墓地へ送り、無意味にブースト・ソードマンの攻撃力を下げた結果となつてしまった。

「く、くつそおお!」

「これにより君は無意味にモンスターへの攻撃力を下げただけだ!」

はっは!どうだいこのタクティクス!

僕は強いんだ、強いんだよお!!」

「畜生!ここから逆転してやる!」

ターンエンドだ!」

『創奇 海王』

手札

三枚

モンスターゾーン

M—W 機械剣士 ブースト・ソードマン レベル6 ATK/2300

魔法、罨ゾーン

セットカード

ライフ

2050

『風流胤 天馬』

手札

三枚

モンスターゾーン

星絵秤 フレイム・リブラ レベル2 DEF/1000

魔法、罨ゾーン

セットカード

ライフ

4000

「僕のターン、ドロー！」

ドローカードは、星絵羊 クレイ・アリエス（せいかいよう クレイ・アリエス）。

「来た…！」

そのカード名確認すると、天馬は不敵な笑みを浮かべた。

「僕は、星絵羊 クレイ・アリエスを召喚！」

召喚されるクレイ・アリエス、星座を身に画く羊のモンスター。

星絵羊 クレイ・アリエス レベル3 ATK/1200

(せいかいよう クレイ・アリエス)

「見せてあげるよ、僕のエヴォルモンスターを……最強の切り札を！」

「レベルが異なる二体のモンスター……海王君、来るよ……！」

「あ、ああ！」

「僕は、星絵秤 フレイム・リブラと星絵羊 クレイ・アリエスのレベル2と3のモンス

ターでエクスポネンシャルを取得！」

フレイム・リブラとクレイ・アリエス。

螺旋を描き飛び上がる二体のモンスター。

「天駆ける白馬よ、今神風を巻き起こし、その翼を翻せ！」

迸る稲妻と共に光は収束し、一つの力となる。

「エヴォル召喚!!」

巻き起こる光の大爆発。大宇宙の誕生を連想させるその中から現れしエヴォルモンスター。

「現れよ！初期レベル4!!」

星絵神馬 ハイウインド・ペガシス!!」

星絵神馬 ハイウインド・ペガシス レベル4 ATK/1600

(せいかいしんば ハイウインド・ペガシス)

白鳥が如き翼を携えた白馬。

倉素を完封無きまでに叩き潰したそのモンスターが。

嘶く声を上げ今海王の前に現れ出でた。

「エヴォル… モンスター…!」

「ひ、ひいいい！あいつだ、あいつが俺を俺のモンスターを!!」

「はっはっは！さあ、見せてあげるよ。」

エヴォルモンスターの力を!!」

## 模索する進化の術 後編

「天駆ける白馬よ、今神風を巻き起こし、その翼を翻せ！エヴォル召喚!!」  
螺旋を描き飛び上がる二体のモンスター。

巻き起こる光の大爆発。大宇宙の誕生を連想させるその中から現れしエヴォルモンスター。

「現れよ！初期レベル4!!」

星絵神馬 ハイウインド・ペガシス!!」

星絵神馬 ハイウインド・ペガシス レベル4 ATK/1600

(せいかいしんば ハイウインド・ペガシス)

「エヴォル… モンスター…!」

「ひ、ひいいい!あいつだ、あいつが俺を俺のモンスターを!!」

「はっはっは!さあ、見せてあげるよ。

エヴォルモンスターの力を!!」

白鳥が如き翼を携えた白馬。

倉素を完封無きまでに叩き潰したそのモンスターが。

嘶く声を上げ今海王の前に現れ出でた。

「来るなら来い！」

「エヴォルモンスター専用マジック！」

エヴォリユーション・ブレイク発動！」

「エヴォリユーション・ブレイク!?!」

「1ターンに一度、エヴォルモンスター一体のレベルを1アップする事で。

相手フィールドのモンスター一体を破壊する！」

星絵神馬 ハイウインド・ペガシス レベル5 ATK/1600

「なんだって!?!」

新たなエヴォルモンスター専用マジック。

それは擬似的にレベルアップエフェクトを追加する効果。

エヴォルモンスターのレベルをアップする事で、強力な効果を発動するカード。

「ブリスト・ソードマンを…破壊！」

ハイウインド・ペガシスが起こす旋風に切り裂かれ。

ブリスト・ソードマンはスクラップと化してしまった。

「グオオ!!」

M—W 機械剣士 ブリスト・ソードマン、破壊

「ブースト・ソードマン！」

「そして、ハイウインド・ペガシスでダイレクトアタック！」

ハイウインド・ストーム!!」

嘶きと共に再び旋風を巻き起こすハイウインド・ペガシス。

この直接攻撃を受ければ海王のライフポイントは2050—1600||450で残りが450となってしまう。

この攻撃は受けられない。

「トラップ発動！ブレイク・ブロック・ウォール！」

俺のモンスターが効果で破壊されたこのターン、お前のモンスターはダイレクトアタックを行えない！」

海王はトラップで張り巡らされるバリアーで、ハイウインド・ペガシスの攻撃を防御する。

ライフが削れる事だけは避ける事が出来た。

「漸くまともに伏せカードを使ったね。

君も完全なるバカでは無いつて事か」

「へっ、言ってる。俺様の逆転劇はここからだ！」

「僕はこれで、ターンエンド」

## 『創奇 海王』

手札

三枚

モンスターゾーン

無し

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

2050

## 『風流胤 天馬』

手札

二枚

モンスターゾーン

星絵神馬 ハイウインド・ペガシス レベル5 ATK/1600

魔法、罨ゾーン

セットカード

ライフ

4000

「俺のターン、ドロロー！」

海王の引いたドロローカードは。

「来た！」

マジックカード、死者蘇生。

互いの墓地のモンスターから一体を自分フィールドに特殊召喚するカードだ。

「お前がエヴォルモンスターを出すつてんなら、俺もエヴォルモンスターを出すまでだ

！」

「な、なに!？」

「マジックカード、死者蘇生を発動！」

「このこのカードにより、墓地のモンスター一体を特殊召喚!!」

M—W 機械剣士 ブースト・ソードマン レベル6 ATK/2300

(メタルウォリアー きかいけんし ブースト・ソードマン)

「ハアア!!」

選択されたモンスターはレベル6モンスター、ブースト・ソードマン。

「レベル6!?!海王君一体なにを!？」

「俺は、M—W 機械装甲 メタアームドを召喚!」

M—W 機械装甲 メタアームド レベル3 ATK/1000  
(メタルウオリアー きかいそうこう メタアームド)

「レベル3とレベル6、異なるレベルのモンスターが二体、フィールドに揃った！」

レベルの異なるモンスター、エヴォル召喚の条件を満たして。

「俺はこの二体のモンスターで、エクスポネンシャルを取得！」

二体のモンスターは螺旋を描き飛び上がり。

『エラーです、エラーです』

「は？」

満たしていない、飛び上がりもしない。

エヴォル召喚の条件は満たして居ないので。

「ま、ま、またかよおお！なんでエヴォル召喚できねえんだ!!」

「海王、なにやってるのよ！」

「海王君ったら！」

昼の授業と同様エヴォル召喚に失敗する海王に、遊英と愛結は焦る。

よりよって今、エヴォルモンスター使いを相手にしているこの状況で。

エヴォル召喚に失敗してしまったのだ。

「お、驚かせてくれるね、エヴォル召喚をできていないじゃないか！」

「ち、違う違う、これはその…な、なんでだよ!!」

海王は焦る。死者蘇生と言う強力なカードを使ってまで行おうとしたエヴォル召喚の失敗に。

低攻撃力のメタアームドを攻撃表示で出してしまったこの現状に。

「くそ、だったらブースト・ソードマンで攻撃するまでだ!

行け! ブーストソードスラッシュ!!」

背中のブースターを翼の様に点火、そして剣のブースターも点火して攻撃を仕掛ける。

「無駄だよ! トラップ発動!

天翼の盾―ヘヴン・シールド―!」

発動されるトラップ、

天翼の盾―ヘヴン・シールド―

(てんよくのたて ヘヴン・シールド)。

ハイウィンド・ペガシスを守るバリアーに阻まれ、ブースト・ソードマンの剣は弾かれる。

天翼の盾―ヘヴン・シールド―が発動された事で、ブースト・ソードマンの攻撃が防がれてしまったのだ。

「このカードは、攻撃表示のモンスターにのみ装備が可能なトラップカード。

装備モンスターが戦闘で破壊される時、その破壊を無効にして戦闘ダメージを0にする！」

「な、なんだって?!」

「破壊とダメージが無効…。なんて強力なトラップなんだ…。海王君！」

「そうさ、こいつは強力なトラップだ、だからデメリットは存在する。」

このカードの効果でモンスターを守った時、僕は1000ポイントのダメージを受けてしまう…」

強力な効果のカードにはデメリットは付き物。

そしてこのカードの場合、初期ライフの四分の一の数値の効果ダメージ。

体を突き刺すような強い電撃が走り天馬を襲い、ライフポイントにダメージを与えた。

「ぐ、うわああああ!!」

天馬ライフポイント、4000—1000||3000

漸く海王は天馬にダメージを与える事が出来たが…。

エヴォルモンスターは、ハイウィンド・ペガシスはフィールドに残ったまま。

ここからどうなるのか、分かったものではなかった。

「お、俺はこれで、ターンエンドだ！」

『創奇 海王』

手札

二枚

モンスターゾーン

M—W 機械装甲   メタアームド   レベル3   ATK／1000

M—W 機械剣士   ブースト・ソードマン   レベル6   ATK／2300

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

2050

『風流胤 天馬』

手札

二枚

モンスターゾーン

星絵神馬   ハイウインド・ペガシス   レベル5   ATK／1600

魔法、罨ゾーン

天翼の盾―ヘヴン・シールド―

ライフ

3000

「僕のターン、ドロ―！」

「君は今、死者蘇生によりブースト・ソードマンを『特殊召喚』した」

「だ、だからなんだよ」

「見せてあげるよ、これがハイウインド・ペガシスの効果だ！」

ハイウインド・ペガシスの、レベルアップエフェクト発動!!

ハイウインド・ペガシスは1ターンに一度、自身のレベルを1アップする事で。

相手フィールドの特殊召喚されたモンスター全ての攻撃力を、ターン終了時まで半分になるまでダウンし。

ダウンしただけのその数値の攻撃力を得る!!」

「な、なんだと?!」

ハイウインド・ペガシスの嘶きと共に、ブースト・ソードマンを星屑の光が包み込む。

ブースト・ソードマンボディに組み込まれるライトの光が薄れて行く。

吸われているのだ、ブースト・ソードマンの力が。

「スターライト・ゲイン!!」

M—W 機械剣士 ブースト・ソードマン レベル6 ATK／1150

(メタルウオリアー きかいけんし ブースト・ソードマン)

星絵神馬 ハイウインド・ペガシス レベル6 ATK／2750

「こ、攻撃力2750だとお!？」

「はっはっはっは!これが僕のペガシスの力!

さあ行け、ハイウインド・ペガシス!

ハイウインド・ストーム!!」

天馬が選んだ標的はメタアームド。

攻撃力10000のメタアームドに攻撃を与えれば、海王のライフは2750—1000  
0—1750、更に2050—1750—3000で、残りライフポイントはたったの3  
00となってしまう。

「ぐわあああああ!!」

M—W 機械装甲 メタアームド、破壊

海王ライフポイント、2050—1750—3000

防御手段は無い、防ぐ事はできない。

もう攻撃を受けることができなく成る程の大ダメージだ。

「海王!」

「海王君!!」

「まだまだよ! 速攻魔法、ティンクルスター・ライン!!」

星絵モンスターが戦闘で相手モンスターを破壊した時、相手フィールドのモンスター  
一体を破壊する!」

「な、なにい!?!」

残る海王のモンスターは、ブースト・ソードマンのみ。

だがそのブースト・ソードマンも。

M—W 機械剣士 ブースト・ソードマン、破壊。

破壊されてしまった。

「僕はこれでターンエンド!」

この瞬間、ハイウインド・ペガシスの攻撃力は元に戻る。

星絵神馬 ハイウインド・ペガシス レベル6 ATK/1600

『創奇 海王』

手札

二枚

モンスターゾーン

無し

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

300

『風流胤 天馬』

手札

二枚

モンスターゾーン

星絵神馬 ハイウインド・ペガシス レベル6 ATK/1600

魔法、罨ゾーン

天翼の盾―ヘヴン・シールド―

ライフ

3000

残りライフはたったの300、天馬のライフポイント3000と、天と地の差がある。追撃のモンスターが来た時点で海王の負けは確定する。

もう後が無い。

このターンだ、このターンが、ラストターンと言っても過言ではないのだ。

「お、俺のターン……」

「海王君……！」

「海王……」

「も、もうだめだ……海王の負けだ……」

遊英に見守られ、愛結に祈られ、倉素が海王の負けだと諦める中海王は考えた。

なぜエヴォル召喚に失敗したのかを。

なぜ天馬がエヴォル召喚を行う中、自分だけエヴォル召喚を行えないのか。

異なるレベルのモンスター。

ふと海王は、エヴォルモンスターのカードテキストを思い出す。

レベル3と4モンスター。

エヴォルモンスターのカードには、そう書かれていた。

それを思い出したその時、海王の頭に電光が走る。

レベル3と4、異なるレベルのモンスター。

そう、エヴォル召喚の条件は、数字の並びだ。

数字の並びの順に揃えられた、異なるレベルのモンスター。

それがエヴォルモンスターの条件。

漸く気付いたエヴォル召喚の正しい条件。

切り札を召喚する方法。

このターンで決着をつけねば、ほぼほぼ後の無い海王だが。

海王のデッキには、今の手札でこの状況を覆すカードが一枚だけ眠っている。

全てを掛けたラストドロ。

呼吸を整え、気持ちを落ち着け。

祈り、願い、そして海王は、カードを引く。

「ドロオー……！」

ドロカードを確認、そのカードを見て海王は、思わず笑みを溢した。

「……っ!!」

「海王君！」

「海王！」

「……っへへ。これだからデュエルはやめらんねえ……」

「な、何を引いた……?」

「来たぜ、逆転のキーカードが……」

逆転のキーカード、それは。

「俺は、M—W 機械軍師 カナメモチを召喚!!」

M—W 機械軍師 カナメモチ レベル4 ATK/1000

「そのカードは……！海王君！」

「おう！いつくぜえ！」

俺は機械軍師 カナメモチのモンスター効果を発動!!」

「なに!?!」

「このモンスターの召喚に成功した時、墓地のレベル3以下のM—Wモンスター一体を、効果を無効にして特殊召喚できる！」

甦れ!メタアームド!!」

M—W 機械装甲 メタアームド レベル3 ATK/1000

「レベル3から4、異なるレベルのモンスターがフィールドに揃った!」

M—W 機械軍師 カナメモチ レベル4 ATK/1000

M—W 機械装甲 メタアームド レベル3 ATK/1000

数字の並びの順に揃えられた異なるレベルのモンスターが、海王のフィールドに揃った。

「この布陣、まさか!?!」

「俺はレベル3から4の異なるレベルのモンスターで、エクスポネンシャルを取得!」

漸く揃えられたモンスター、完璧に整った条件。

螺旋を描き飛び上がるモンスター。



「いづくぜえ！俺は機械竜騎士　ドラゴン・アツシユのレベルアップエフェクト発動！  
1ターンに一度、自身のレベルをアップする事で、自分墓地の機械族モンスター一体を装備できる！」

墓地の機械族モンスターを装備する事のできるレベルアップエフェクト。  
海王が選択する装備カードとなるモンスターは。

「俺はM―W　機械工兵　シードライバーをドラゴン・アツシユに装備する！」

選択されたモンスターは、機械工兵　シードライバー。

ドラゴン・アツシユの起こす電磁力で墓地より再び姿を見せる。

変形するシードライバー、ドラゴン・アツシユの乗る機械飛竜と合体。

シードライバーが車輪となり、機械飛竜を装甲車へと姿を変えさせた。

「ドラゴン・アツシユの攻撃力は、こいつに装備している機械族モンスターのレベル×1  
00ポイントアップする！」

装備されたM―W　機械工兵　シードライバーのレベルは4、よつてそのレベル×1  
00ポイントの数値の400。

ドラゴン・アツシユの攻撃力はアップする。

M―W　機械竜騎士　ドラゴン・アツシユ　レベル6　ATK/2400

「そしてシードライバーを装備しているM―Wエヴォルモンスターは、二回の攻撃を行

えるー!」

「な、なに?!」

「ドラゴン・アツシユで攻撃!

ダブルドライブ・ステインガー!」

角のように槍を構え急発進するドラゴン・アツシユ。

そのスピードはスーパースポーツカーの比ではない。

「天翼の盾―ヘヴン・シールド―の効果を発動!

戦闘による装備モンスターの破壊と戦闘ダメージを無効にし、僕は10000ポイント

のダメージを受ける!」

「そうだ、ドラゴン・アツシユを相手にしてはエヴォルモンスターを手放せない!

天馬君は、その効果を発動せざるを得ない!」

「二回攻撃だぜ!20000ポイントのダメージを喰らいな!」

「うわああああ!!」

天馬ライフポイント、30000―20000=10000

「だが、まだ僕のライフは10000ポイント残っている!

次のターン、ペガシスの効果によりドラゴン・アツシユを君諸とも葬り去る!君に勝

ち目は無い!」

「そうでもないさ！マジックカード、パージボムを発動！」

「パージボム!？」

「自分フィールドの装備カード一枚を墓地へ送り、そのカードを装備していたモンスターの元々の攻撃力の半分の数値のダメージを、相手に与える！」

「な、なんだって!?!君のフィールドには、装備カードとなっているシードライバーが……」

「そしてドラゴン・アツシユの元々の攻撃力は2000ポイント！」

「その半分で……じゃ、ジャスト1000ポイント……!!?」

最後の最後で発動された、大きな効果ダメージを与える海王のマジックカード。

その数値は、ジャスト1000ポイント。

「これで終わりだ、いつけええええ!!」

ドラゴン・アツシユから分離するシードライバーは、天馬目掛けて突撃し。

大破による大爆発を起こしてダメージを与え。

天馬ライフポイント、1000—1000=0

「うううわああああ!!」

そのライフポイントを、0にした。

海王、勝利。

デュエルは海王の勝利で終わった。

「すげえ… 海王が…」

「海王がやったわ、遊英！」

「うん！海王君！」

奇跡の大逆転に唖然とする倉素、そして海王の勝利に喜び勇む遊英と愛結。

二人は倉素を放つて海王に駆け寄った。

「海王君！」

「やったわね！」

「ああ！やったぜ遊英、俺の勝ちだ！」

顔を合わせ笑う三人を尻目に、デュエルに敗北し倒れていた天馬が身を起こした。

「うっ…」

それに気付いた海王、天馬にゆっくりと歩み寄る。

「あつ… その、えっと、ご、ごめんなさい… !!」

僕はただ、デュエルに勝てるのが楽しくて楽しくて… 僕、本当は臆病で… 弱く

て…。

だから、強力なエヴォルモンスターを手に入れてつい…」

座り込み、長々と言いつつ訳を重ねる天馬に、海王は手を差し出した。

「へ？」

「お前、めちやくちや強ええな！」

満面の笑みで手を差し出す海王に天馬は目を丸くした。

散々見下してバカにしていた筈の海王が、清々しい様子で手を差しのべているのだから。

「今のデュエル、超楽しかったぜ！またやろうぜ！」

半信半疑で海王の手と顔を交互に見る天馬。

びくついた動きで、恐る恐る海王に手を伸ばす。

「僕を……許してくれるのかい……？」

海王は伸ばされた天馬の手を迎え、握り繋いだ。

「あつたりまえよ！過ぎたことは過ぎたことだ」

天馬は海王に引かれるままに起き上がる。

二人は向かい合い微笑み、繋がれたてをより強く握り。

その手を握手とした。

激闘の末に和解する二人を見て遊英はふと思う。

（今日もまた、新たなエヴォルモンスターが……）

なぜエヴォルモンスター使いは邪悪な心に染まるんだ……

果たして本当に染められているのか？

それとも人の心に宿る心の闇を増幅させられているのか……？

僕と海王君が平気な理由も分からない……すっかり僕が海王君と雲堂さんを守る為に、今後も警戒しなければ……)

と。

天馬と海王が戦ったその後日の事だ。

海王と遊英はチャイム音と共に教室に滑り込む。

遅刻ギリギリか、ギリギリ遅刻か、二人は教室の地面にへたり混む。

「ぎ、ギリギリセーフ、セーフ……だよな……遊英？」

「ぼ、僕に聞かないで……はあ……もう、起こしたら起きてよ……はあ……」

「残念、今のラインは遅刻だよ」

息も絶え絶えな遊英と海王に遅刻を告げるのは。

「て、天馬……!？」

風流胤 天馬だ、彼はこのクラスのクラス委員長。

臆病ながらもきつちりした性格故に、担任にクラス委員長に抜擢されていたのだ。

「チャイムと共に滑り込むのは遅刻。」

よって二人は、一限目は欠席となります、いいね」

「ええー!？」

「天馬あゝ、頼むよおゝデュエルで語り合った仲だろおおゝ！」

「だーめ、遅刻は遅刻、先生に確りと報告するからね」

「そ、そんなあゝ…！」

無慈悲な欠席宣告、声を揃えて嘆く海王と遊英は。

天馬の脚にしがみついてギリギリセーフにしてくれとごねた。

「はあ… 海王が海王なら一緒になってる遊英も、ほんとバカなんだから…」

今日も愛結に呆れられ、遅刻から始まる一日が流れて行くのだった。

「エヴォルモンスター… か… 私にも、そんな力があればな…」

## 闇に潜む怪しき影

禍々しい力に満ちた薄暗い空間。

怪しき影の元へと歩み進む一人の男が居た。

「戻ったか… 名栗 貫太郎よ」

影の中に潜む者、影の者とも呼ぼうか。

影の者の元へ行くその男の名は名栗 貫太郎。

以前に海王とデュエルを行い敗北を喫したエヴォルモンスター使いだ。

「言われた通り、各地に闇の力をばら蒔いてきた。これで文句は無いな？」

「ああ、無いさ。今のところはな」

「ならば約束の金を寄越せ」

約束の金とやらを要求する名栗。

影の者を急かす名栗だが、影の者はそんな名栗を止め話を始めた。

「まあ待て、その前に話がある」

「話だど…？」

「名栗よ、この花を知っているか？」

悪魔の様な鋭い爪の伸びる手腕は、一輪の花を摘まんでいた。差し出されたその花の名を名栗は知らない。

「なんだそれは」

「グラジオラス、勝利の花と人は呼ぶ」

今にも萎れ枯れてしまいそうな程弱々しい花の名はグラジオラス。

「勝利の花……縁起物か、御守代わりに持てとでも言うつもりか？」

「花は弱い、どれほど気高き名を持つ花でも、所詮英雄にはなれない」

影の者の体から霧のように滲み出る禍々しき闇がグラジオラスの花を包む。

闇が晴れた時、グラジオラスの姿はそこには無かった。

そこにあつたのは、灰と成り行く見る影もない残りカスのみ。

「何が言いたい……？」

「フッフッフッフッフッフッフッフッフッフッフ……！！」

場面は変わり遊英の家。本日は休日なので、海王と遊英は二人でお出かけに行く準備の途中だ。

洗面所で顔を洗う海王と、朝食を用意する遊英を見て。二人の父、白妙は、少し不思議そうに声をかけた。

「海王君に遊英君、今日は学校お休みなのに早起きだね」

「おはようお父さん、今日は学校の友達にデュエルに誘われてね」

「これから遊英と一瞬に出掛けるんだ」

海王と遊英は、天馬の誘いでデュエルをする約束がある。なんやかんやあって、愛結も着いてくる事となつてもいた。

「二人とも、早速良いお友達が出来たんですね」

「おう！片方とは一度だけ戦つたけど、めっちゃめっちゃええんだぜ！」

「楽しそうで良かったです。僕はもう仕事に出るけれど、二人とも遅くなりすぎないようにするんですよ」

「はーい」

仕事へ出掛ける白妙を見送る遊英。足元に冷たい違和感を感じて見ると、突然の惨事。

「わーーーーー！海王君ちゃんと顔拭いてから来てよ!!」

ろくに顔を拭かずに白妙を見送りに来た海王のせいで、廊下はびしゃびしゃの石鹼の泡まみれだった。

色々とあつて二人は家を出て待ち合わせの駅へ向かう。

今日は十時頃から駅前の広場でデュエルをして。近くのカフェで昼食を食べた後に

愛結の買い物に付き合ひ、ついでにカードシヨップを見る予定だ。

「なあ遊英、そんなに起こないでくれよ」

「結局掃除したの僕だからね、一人呑気に朝ご飯食べて」

「だから悪かったって、今度からは掃除手伝うからさ」

「そう言う問題じゃない！」

的外れの謝罪をする海王に怒る遊英。そんな二人の元へと愛結が合流する。

「遊英ー、海王ー！」

「雲堂さん、おはよう」

「よう、愛結」

「二人ともどうしたの？なんだか喧嘩してたみたいだったけれど」

遠目に見ても分かる立腹の遊英の様子を愛結は問う。彼女の問いに歩きなが

ら答える遊英。その訳を聞き愛結は言った。

「海王何してるの……遊英も怒る筈よ」

「だって父さんが出かけるんだから、見送らないとだろ？」

「時と場合と状況を考えてよ！」

次やっても、僕掃除しないからね」

「だから悪かったって」

他愛も無いことを話しつつ三人で駅前広場に到着。天馬が広場のベンチに座り、デッキを確認していた。四人はエヴォルモンスターを使う事で何が起こるかまだはつきりとしていない手前。遊英の提案でエヴォル召喚を封じた上で、くじ引きで順番を決めてデュエルを行った。

愛結と海王がデュエルを行いブースト・ソードマンもろともライフを削り切れ海王の敗北。

遊英と天馬が戦い、天馬の戦術を見事にいなし遊英の勝利。

遊英と海王が戦い、海王は手も足も出せずに遊英に敗北。

愛結と天馬が戦い、ギリギリの勝負で愛結が勝利。

天馬と海王が戦い、先日とは違い天馬が勝利。

それから何度もデュエルを行った遊英達だが、今日のデュエルで一つはつきりした。

この四人の強弱関係は。

遊英>愛結>天馬>海王、となる様だ。

遊英と愛結に比べて戦術の安定しない天馬と海王だが。

その中でも海王は下の下。最早驚く事ですら無い程に負ける海王は、今日も今日とて一勝もしていない。

「ついこの前僕とデュエルした時は、ギリギリの所で僕が負けたつて言うのに。今日は随分と弱いね、海王君」

「くっそお……、何でだ？。遊英にはそうそう勝てた試しはねえが、愛結にも天馬にも一回も勝てねえなんて」

「もう驚きもしないわ、海王あんた弱いだよ」

悪気のない天馬のちくちく言葉と悪気しかない愛結のちくちく言葉は海王に刺さる。二本の矢に刺され海王のメンタルは満身創痕だ。

「お、お前ら……」

「ふ、二人ともそこまで言わなくても！」

見るに耐えない様子に見かねた遊英がフォローに回る。

「遊英く、やつぱりお前は俺の味方であく……」

「海王君も頑張ってるし、本当に時々だけど。一矢報えそうでもない時あるじゃない？まだまだこれから強くなるよ！きつと！」

海王は死んだ。フォローしているつもりは遊英だが、まったくフォローになっていない。寧ろ止めを刺され海王は死んだ。精神的に。

「遊英、海王君が死んでるよ」

「うわー！……、ごめん海王君、悪気は無かったんだ！」

「いや、無意識下で悪気はあったわね。これはきつと朝の仕返しよ」

「も……いや……倍返し……」

「お、お昼食べよお昼！僕が海王君の分奢つてあげるからさ！」

地に額を着けて落ち込む海王を引きずり、遊英達はファミリーストランへ向かった。

顔を削るように引きずられる海王を尻目に愛結は遊英に言う。

「遊英、ちよつとエヴォルモンスターに対して慎重すぎやしない？」

天馬と海王がデュエルしてお互いに大丈夫だったんだから。

エヴォルモンスターの謎を解明するためにも、そろそろ貴方達のエヴォルモンスター同士で戦つてみてもいいと思うの」

愛結の言葉に遊英は足を止め、俯いた。

「うん……僕自信少し慎重だとは思うけれど。」

でも方が一海王君や雲堂さん、風流胤君に何かあったら大変だ、もう少しだけ慎重でありたい。

せめて、柳君と話し合いをしないと……」

海王達を守るために少しでも慎重でありたい遊英。

せめて柳との話し合いの後にエヴォルモンスターの日常的な使用を考えたい所。

そう思い、ふとレストランで電話を掛けてみようかと思ったその時。何人もの男達が突然遊英達を取り囲んだ。

「ちよ、ちよつと、なんですか!」

突然の出来事に驚く愛結、遊英に身を寄せて携帯に手を掛ける。

「へへへ……女、お前可愛いな、何て名前だよ」

「な、なんなの……この人達……」

「な、ナンパかい……?海王君起きて!起きて!」

自分達を囲む柄の悪い男達に怯える天馬、海王を起こしつつ、盾にするように隠れた。躊躇い無く海王を盾にする天馬の様子に笑いつつも、男が一人遊英を指さした。

「ナンパもいいが、今俺達が用があるのはお前だ」

遊英は眉をひそめる。

「僕に……?」

「ああ、お前だ花道 遊英」

「なぜ、僕の名前を知ってる」

「俺達の中じやお前はちよつとした有名なんだよ。」

何せ俺達不良の中じや最強と名高い、あの間牛鉄也を倒した男だからなお前は」

広く開かれた手を広げ、肩を竦め、おどけたように男は笑う。

「ちよつと面貸せや」

「…」

遊英は海王を盾に怯える天馬、すぐに警察を呼べるようにしているが内心怯えているであろう愛結、状況を掴めていないがとりあえず眉をひそめている海王達を見て、男へ言った。

「いいよ、でも、着いていくのは僕だけだ、海王君達は巻き込まないで欲しい」  
「… いいぜ、用があるのはお前だけだからな」

そう言い男が手を肩ほどに上げると。

他の不良達が乱暴に愛結の体を掴み拘束した。

「うおー！」

「きゃー！」

「ひいひいー！」

「皆ー！」

いいぜと言われた矢先の不良達の行動に驚き遊英は男を睨み付けた。

「皆は解放してくれるんだろう！」

「解放するなんて行ってねえよ、今警察を呼ばれちや敵わねえしな。」

「まあ安心しな、そう悪くはしねえよ、暫くしたら解放してやるさ… 連れてけ！」

乱暴に引かれ連れていかれる遊英。拘束される海王と愛結は、遊英を助けるべく。必死に不良達の手を振りほどこうと暴れていた。

「遊英！」

「ゆ、遊英！」

「海王君！雲堂さん！風流胤君！」

そのまま遊英は車に投げ入れられ、どこかへと連れていかれてしまった。

ある廃屋、椅子に座りカードを手に見つめる一人の男が居た。

禍々しい闇の力を放つカード。

それはエヴォルモンスターカードだ。

「クツクツクツク…このモンスターさえあれば俺は無敵だ…。それだけじゃねえ、間牛を倒したとか言う奴のエヴォルモンスターも俺が奪ってやる…。そうすれば俺こそが真に最強のデュエリストになる…。クツクツクツク…フフフハハハ」

三つの蛇の首を持つ竜の様な形をしたエヴォルモンスター。そのエヴォルモンスターから発せられる闇に男の目が染まった時。

廃屋の奥から、コッソ…コッソと足音が聞こえてきた。

「蛇谷 主（へびたに かず）…」

「… あん…？？」

足音は徐々に男へと近付いて来る。

ゆっくり、ゆっくりと、迫り来る様に。

「邪悪に堕ちし愚かなデュエリストよ…」

「誰だ！」

暗い廊下から現れる一人の男は…。

「貴様のカードのその闇の力… 俺が回収させて貰おう」

遊英は今、車でどこかへと連れていかれている。

海王達の事と心配でどうしたら良いのかわからず何も出来ずにいる遊英を乗せた車は、ある廃屋の前で止められた。

「出る」

車から投げられる様に出された遊英は、そのまま廃屋の中へと連れていかれた。

「俺達のボスがな、お前のあるカードを欲しがってんだ」

「あるカード…？」

「とぼけんなよ、持ってたんだろ？エヴォルモンスター」

「なっ…?!」

この男達、エヴォルモンスターの存在を認知している。

遊英は、間牛との戦い以来エヴォルモンスターを使つていない筈だ。

だがなぜか男達は知っている。

アカデミア内では海王と愛結と柳、そして間牛と天馬しか知らないであろう遊英のエヴォルモンスターを。

「なぜ…… 僕のエヴォルモンスターを……？」

「フフフ…… さあな……」

遊英の問いをはぐらかす様に。男はゆっくりと振り向き、不適な笑みを浮かべた。

廃屋の奥へと進み、ひとつの広い部屋へと入ったその時。

「ボス！ 連れてきましたぜ！」

大きな揺れと共に、部屋の中から耳を聳するほどの炸裂音が鳴り響いた。

「うおお！」

「な、なに!？」

揺れに耐えつつも音の鳴る方へ顔を上げる遊英は、目の前に広がる光景に目を疑った。

そこに見える光景は、二体のモンスターが対峙する光景だ。

三つの首を持つ竜の様な姿をした巨大なモンスター。

そして、マントの様に翼を靡かせ、禍々しくも雄々しく、そして荒々しくも美しい槍を手に携えた巨大な悪魔のモンスター。

一見すると普通のデュエルの光景。

だが、遊英にはわかる、このモンスターは、二体ともエヴォルモンスターだ。

そこに存在するだけで思わずたじろぎそうになる程の存在感と禍々しき力を放つモンスターが二体も。

遊英の目の前に居ると言うのだ。

「な、なんなんだお前は……なんなんだよおお!!」

「貴様のエヴォルモンスター、この程度のか……期待外れも良い所だ」

それぞれのモンスターを従えるデュエリスト達。

彼等の姿を見て、遊英は再び目を疑った。

ガタガタと震え叫ぶ男に対し、冷たい眼を向ける男は。

遊英の目に写るデュエリストは、柳だった。

「終いでしょうか……やれ、アスラ」

マントが如き翼を靡かせる悪魔は。柳の命令のままに槍を回し、振りかぶる様に掲げ、その槍に赤黒い闇の力を纏わせる。

「デモンズ……ランス!!」

柳の宣言と共に悪魔の槍は投擲される。

肌を突き刺す気迫のままに放たれた槍は、いとも容易く蛇のモンスターの腹を貫き。そのモンスターを従えたデュエリストごと、モンスターを破壊した。

「ぐうわあああああああ!!!」

貫かれた腹から、モンスターは爆発四散する。

これはソリッドビジョンのエフェクトだ。

エフェクトの筈なのだが、男は爆発に巻き込まれ、派手に吹き飛び壁に叩き付けられた。

ソリッドビジョンには設定さえすれば映像化された衝撃を体感できるシステムがある。

だが体感できる衝撃はデュエリストが大怪我をしないように抑えられている。普通ならばここまで派手に吹き飛びはしない。

「ぐふあつ…！」

「フン」

背中から叩き付けられ倒れる蛇谷は、ゲロを吐き出す。

道路を横断する虫を見るような目で柳に見下ろされる蛇谷。

蛇谷のライフポイントは0となり、このデュエルは柳の勝利となった。

「ボス！」

倒れる蛇谷に駆け寄る取り巻きの男。

「ボス！大丈夫ですか!？」

取り巻きの男は意識が朦朧としている蛇谷の体を揺する。

蛇谷は、意識こそあるが起き上がろうにも起き上がれない様子だ。

「俺の勝ちだ。その闇の力、回収させて貰う」

倒れる蛇谷へ向けて柳がエヴォルモンスターカードを掲げると。

柳のエヴォルモンスターカードから闇の力に類似した物が蛇谷へ向けて放たれた。

「ぐわあああああああああ!!!」

稲妻に撃たれた様に悶絶する蛇谷。そうして蛇谷の体から漏れ出た蛇谷の闇の力が

柳のカードに吸われ、蛇谷は意識を失った。

「フン」

「ボ、ボスー!!」

「柳君…君は…!？」

柳の視線は遊英へと移る。

「お前もエヴォルモンスター使いだっとな」

そう言う柳はデュエルディスクを構えた。

「デュエルは… しないよ」

デュエルを断った遊英だが。それを聞いた柳が指をパチンと鳴らすと、部屋から繋がる廊下への道がすべてシャッターで塞がれた。

「デュエルをしなければ、ここからは出られんな」

「くっ…！」

「さあデュエルだ遊英！」

デュエルをしなければここからは出してもらえない。

やむを得ず遊英スマホを腕のリングにセットする。

忽ち形を変えるスマートフォン。

五つのモンスターゾーン。

五つの魔法、罨ゾーン。

フィールド魔法ゾーン、墓地。

デッキセットゾーン。

物の数秒でスマートフォンは。近代的なデュエルディスクへと姿を変えた。

「デュエルディスク！セット完了！」

腰のケースからデッキを手にする遊英。

「ソリッドビジョンシステム！起動！」

勢いよくディスクにデツキを差し込む。

「デュエルオポーンネット！リンク完了！」

ディスクにより自動シャッフルされる互いのデツキ。

デュエルの準備が、完了した。

「決闘!!」

二人の掛け声と共に、ソリッドビジョンにより辺り一帯の風景にサイバネティックなエフェクトが広がった。

互いにデツキからカードを五枚ドロロー。

デュエルの幕が開けられた。

『花道 遊英』

手札

五枚

モンスターゾーン

無し

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

## 『柳 佞紋』

4000

手札

五枚

モンスターゾーン

無し

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

4000

「僕の先行！ドロー！」

先行は遊英。

「手札のモンスター二体を墓地へ捨てて、このモンスターを特殊召喚する！」

守護結界の魔剣士!!」

早速発動されたモンスターの特殊効果。光の剣を携えた魔法剣士が現れる。

守護結界の魔剣士 レベル7 DEF/2400

「更にカードを一枚伏せて、僕はターンを終了させる！」

『花道 遊英』

手札

三枚

モンスターゾーン

守護結界の魔剣士

レベル7

DEF/2400

魔法、罨ゾーン

セットカード一枚

ライフ

4000

『柳 佞紋』

手札

五枚

モンスターゾーン

無し

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

4000

「俺のターン、ドロー」

「1ターン目から最上級モンスターを召喚してくるとは、流石と誉めてやろう」  
 「俺はモンスターとカードを一枚ずつセットしてターンエンドだ」

『花道 遊英』

手札

三枚

モンスターゾーン

守護結界の魔剣士 レベル7 DEF/2400

魔法、罨ゾーン

セットカード一枚

ライフ

4000

『柳 倭紋』

手札

四枚

モンスターゾーン

セットモンスター

魔法、罨ゾーン

セットカード一枚

ライフ

4000

「僕のターン、ドロー！」

立ち上がりは静か、最上級モンスターを携え先にフィールドを制圧したのは遊英だ。

ここは攻めるしか無い。

「守護結界の魔剣士の表示形式を攻撃表示に変更！」

守護結界の魔剣士 レベル7 ATK/2000

「守護結界の魔剣士で攻撃だ！護・封・剣!!」

「速攻魔法、自爆特攻を発動！互いのフィールドのモンスターを一体ずつ破壊する！」

「な、なに!?!」

柳セットモンスターはダメージ・キャンセラー。

ダメージ・キャンセラーは守護結界の魔剣士に突撃し爆発、道連れ形で自らを破壊

した。

守護結界の魔剣士、破壊

ダメージ・キャンセラー、破壊

「この瞬間、手札の異界の棘紫竜の効果を発動！」

俺のフィールドのモンスターが戦闘、効果で破壊された時、このモンスターを手札から特殊召喚する！」

異界の棘紫竜 レベル5 ATK/2200

「コンボ攻撃!？」

守護結界の魔剣士は、戦闘で破壊される時自分フィールドのカードを墓地へ送る事で。そのターンの守護結界の魔剣士の戦闘による破壊を無効にする効果がある。

だが、効果破壊に対する耐性は無い。

そんな守護結界の魔剣士を耐性の無い効果で破壊しつつ、異界の棘紫竜の効果の発動条件を整える。

巧みのカードコンボだ。

「くっ…：僕はモンスターをセットしてターンを終了させる…：」

『花道 遊英』

手札

三枚

モンスターゾーン

セットモンスター

魔法、罨ゾーン

セットカード一枚

ライフ

4000

『柳 佞紋』

手札

三枚

モンスターゾーン

異界の棘紫竜 レベル5 ATK/2200

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

4000

「俺ターン、ドロー」

「装備魔法、ビッグバン・シユートを異界の棘紫竜に装備！これにより異界の棘紫竜の攻撃力は4000ポイントアップする！」

異界の棘紫竜 レベル5 ATK/2600

上級モンスターに装備魔法を装備させる事で、その攻撃力を最上級モンスターと同等とする装備魔法戦術。

初手で守護結界の魔剣士を出し遊英が制圧をした筈のフィールドは、既に返され。攻撃力2600と言う高攻撃力モンスターにより、逆に制圧されてしまった。

「… 異界の棘紫竜で攻撃を行う。棘毒牙(ポイズン・ソーン・バイト)!!」  
「くっ…!」

セットモンスターは守備力500、逆境の花 カモミール。

異界の棘紫竜の攻撃力との差は2600-500=2100の2100ポイントだ。

「ビッグバン・シユート装備したモンスターが守備モンスターを攻撃する時、その攻撃力が守備力を越えた分の貫通ダメージを与える!」

「なにつ?!」

異界の棘紫竜は己の胃酸を逆流させ牙を濡らし、逆境の花 カモミールに噛みつく。破壊されるカモミール、攻撃の余波として遊英に毒の飛沫が吹きかかる。

「ぐ… うわああああ!!」

遊英ライフポイント、4000-2100=1900。

予期せぬ貫通ダメージ。2100分のダメージを受ける遊英、4000—2100〓  
1900で残りライフは1900となってしまった。

「か、体が… 焼けるようだ… い、痛い…」

全身に吹きかかる胃酸に遊英の肌は焼かれ、服は穴だらけに溶かされた。

おかしい。衝撃体感システムのあるソリッドビジョンと言えど、肌を焼き服を溶かす程の威力は持たない。

遊英は気付いた。

「ダメージが… 現実になってる…!?」

ソリッドビジョンで写し出された映像が、本物となり遊英に襲い掛かっているのだ。

「… フン」

「う、うう… こ、こんな事って…」

あり得ない、普通ならばあり得ない。

だが相手はエヴォルモンスター使い、そしてデュエルの直前に見た光景。

何らかの力で禍々しい力を吸いとられたであろう蛇谷の様子。

悶絶し気絶した彼の事を思い出せば、今は普通じゃない事は明白だった。

「くっ…」

「俺はカードを一枚セットして、ターンエンド」

## 『花道 遊英』

手札

三枚

モンスターゾーン

無し

魔法、罨ゾーン

セットカード一枚

ライフ

1900

## 『柳 佞紋』

手札

二枚

モンスターゾーン

異界の棘紫竜 レベル5 ATK/2600 (ビッグバン・シユート装備)

魔法、罨ゾーン

ビッグバン・シユート (異界の棘紫竜に装備)

セットカード一枚

4 ラ  
0 イ  
0 フ  
0

## 妖紅に染まりし霸王の眷族

ダメージが現実となっているであろう以上は、これ以上ダメージは受けたくない。遊英はここで逆転しなければならぬ。

「僕のターン……ドロー！」

ドローカードは……。

「来た！」

「僕は、カクタス・ショットマンを召喚!!」

ウエスタンハットを被り、マントに身を包むサボテン銃士。

ウエスタンハットの鍔をピンツ、と指で弾き現れる。

カクタス・ショットマン レベル4 ATK/1600

「ハッ！」

「マジックカード、エヴオリユーション・デリバリー・サービスを発動！僕のフィールドに存在するモンスター一体を選び。

そのモンスターとレベルが異なるレベル4以下のモンスターを一体、手札から特殊召喚する！」

「僕はレベル3モンスター、忍耐の花バジルを特殊召喚！」

遊英のモンスター忍耐の花 バジルが、甘くスパイシーな香りを漂わせ現れた。

「ただし。この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃力と守備力が0になり、効果は無効となる」

忍耐の花 バジル レベル3 DEF/0

レベル4カクタスショットマンと、レベル3忍耐の花バジル。

「これにより、レベル3から4のモンスターがフィールドに揃った！」

数字の並びに異なるレベルを持つモンスターがフィールドに揃い、エヴォル召喚の条件が整った。だが。

「ならば。そのモンスターが召喚されたこの時、カクタス・ショットマンを対象に永続トランプ、ミニチュアライズを発動する!!」

「ミニチュアライズ!!」

「これにより、カクタスショットマンの攻撃力を1000ポイントダウンさせ。

そしてレベルを1ダウンさせる!!」

「な、なんだってー!?!」

萎む様に小さくなるカクタス・ショットマン。

ミニチュアライズにより、カクタス・ショットマンがミニマム化された。

カクタス・シヨットマン レベル3 ATK/600

「へによよ…」

レベルダウン、これが遊英のデッキにとって何を意味するか。

それはエースモンスター召喚の妨害だ。

本来レベル3から4のモンスターを素材として出せていた筈の遊英のエヴォルモンスター、栄光の花 ジンチヨウゲ。

だが、レベル4モンスターであるカクタス・シヨットマンのレベルが罫カード、ミニチュアライズによりダウンさせられ3になったと言う事は。

揃っていたレベル3から4のモンスターが、二体のレベル3モンスターに変わってしまった事になる。

それにより、整った筈のエヴォル召喚の条件が崩され。

守備貫通効果を得たモンスターを前に遊英は、無防備にも攻撃力600モンスターと守備力0モンスターを晒してしまう事となってしまう。

「この俺がそう易々とエヴォル召喚をさせると思うか？ 全て計算済みだ、このターン貴様がエヴォル召喚をしてくると読んでいた。だからこのカードを伏せた。」

「そ、そんな…」

「……は俺が一手、上手だった様だな」

「ぼ：： 僕はこれで、ターンエンド！」

『花道 遊英』

手札

一枚

モンスターゾーン

カクタス・シヨットマン レベル3 ATK/600

忍耐の花 バジル レベル3 DEF/0

魔法、罨ゾーン

セットカード一枚

ライフ

1900

『柳 佞紋』

手札

二枚

モンスターゾーン

異界の棘紫竜 レベル5 ATK/2600 (ビッグバン・シユート装備)

魔法、罨ゾーン

ビッグバン・シユート（異界の棘紫竜に装備）

ミニチュアライズ

ライフ

4000

「俺のターン、ドロー」

「貴様のモンスターの効果は記憶している。守備貫通と調子に乗ってバジルを攻撃すれば、すかさずカクタス・シヨットマンの効果は発動され、攻撃対象はカクタス・シヨットマンへ。」

そしてカクタス・シヨットマンの守備力は1200、異界の棘紫竜の攻撃力2600から引くと1400。

「貴様に止めを刺すのに500足りない」

知られている、遊英のカードの効果も、記憶されている。

「この一手、ぬかりはしない。俺は異界の棘紫竜でカクタス・シヨットマンに攻撃!!」

カクタス・シヨットマンの攻撃力は600、異界の棘紫竜の2600と戦闘を行えば、2000のダメージを受け遊英のライフは0となる。

「まだだ！ 永続トラップ！ スピリットバリア！ 僕のフィールドにモンスターが存在する限り、僕が受ける戦闘ダメージは0になる!!」

「ピャアアー！」

意気揚々と小さくなった体のままに立ち向かい異界の棘紫竜に飛び込むカクタス・シヨットマン。

一飲みにされ破壊されてしまったが、これにより遊英のライフは死守された。

カクタス・シヨットマンがフィールドに存在しなくなった事で、ミニチュアライズも破壊される。

カクタス・シヨットマン、破壊。

ミニチュアライズ、破壊。

「なるほど、無策でターンを終了する程甘くは無いか」

「なんとか、守りきれた・・・」

「フン、俺はこれで、ターンを終了させる」

『花道 遊英』

手札

一枚

モンスターゾーン

忍耐の花 バジル レベル3 DEF/0

魔法、罨ゾーン

スピリットバリア

ライフ

1900

『柳 佞紋』

手札

三枚

モンスターゾーン

異界の棘紫竜 レベル5 ATK/2600 (ビッグバン・シュート装備)

魔法、罨ゾーン

ビッグバン・シュート (異界の棘紫竜に装備)

ライフ

4000

「僕のターン、ドロロー！」

「僕はスピリットバリアを墓地へ送り、マジックカード、マジックプランターを発動！

デッキからカードを二枚ドロローする！」

「守りの花 カランコエを召喚!!」

守りの花 カランコエ レベル4 ATK/1600

レベル4の守りの花カラコンコエとレベル3の忍耐の花バジル。

再び整うエヴォル召喚の条件。そして今柳のフィールドに伏せカードは無い。遊英のエヴォル召喚を邪魔するカードは無い。

「僕は、レベル3から4のモンスターで、エクスポネンシャルを取得!!」

天に現れる光の輪、それへ向かって飛んで行く二体のモンスター。

連なるレベルが糧となり、次なるレベルへとアップする。

「遥かなる彼方の戦士よ!二輪の力を糧とし蕾を開き、今栄光をその手に掴み取れ!!」  
光の輪から現れるモンスター。

「エヴォル召喚!」

遊英のエースとなりしエヴォルモンスターカード。

「初期レベル5!栄光の花 ジンチョウゲ!!」

栄光の花 ジンチョウゲ レベル5 ATK/2200

「ハアアア!ヌン!」

格も雄々しき衣に身を包む花の侍、栄光の花 ジンチョウゲが今現れた。

「来たか! エヴォルモンスター!」

「僕は栄光の花ジンチョウゲの、レベルアップエフェクトを発動!!」

鋭い眼光で異界の棘紫竜に圧をかけるジンチョウゲ。

その眼光が異界の棘紫竜の目を貫いた時。

「1ターンに一度、自身のレベルを1アップする事で。相手モンスター一体の攻撃力をターン終了時まで半分にする！」

異界の棘紫竜の体から幾つもの蔓が生え伸び出し、異界の棘紫竜を糸切りを起こしそうな程に強く縛り付けた。

「ギャアアアアア!!」

「蔓拘縛封!! (かずらこうばくふう)」

栄光の花 ジンチョウゲ レベル6 ATK/2200

異界の棘紫竜 レベル5 ATK/1300

「更にマジックカード、クロック・アップ・エヴォリューションを発動!このターンジンチョウゲは、エヴォル素材となったモンスターの数分。つまり2回の攻撃を行える!」

ジンチョウゲは腰を落とし、刀の鞘を左に持ち、その柄に手を添える。

「異界の棘紫竜に攻撃!そして柳君に、ダイレクトアタック!桜花一閃!舞血桜!(おうかいつせん まいちざくら)」

「ハアアアアア!!」

加速するジンチョウゲ、目にも止まらぬスピードで動いたジンチョウゲのその手には。いつの間にか抜かれた刀が握られている。

そしてその刀がゆっくりと鞘に納められ、鏗と鞘のぶつかる金属音が鳴った瞬間。異界の棘紫竜は真つ二つになり、柳のライフにダメージを与えられた。

「ギエエエエエアアアア!!!」

「ぐっ…！」

異界の棘紫竜、破壊。

攻撃力1300の異界の棘紫竜との戦闘で、2200—1300≡900。  
直接攻撃により2200のダメージ。

900+2200≡2900で柳のライフは2900ポイント削られた。  
柳ライフポイント、4000—2900≡1100

「よし、通った！僕はカードを一枚セットして、ターンを終了させるー！」

『花道 遊英』

手札

一枚

モンスターゾーン

栄光の花 ジンチョウゲ レベル6 ATK/2200

魔法、罨ゾーン

セットカード一枚

ライフ

1900

『柳 倭紋』

手札

三枚

モンスターゾーン

無し

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

1100

エヴォルモンスターの召喚の成功により、一気に逆転した遊英。

柳のライフは残り1100と、あと一度だけでもダイレクトアタックを通せれば遊英の勝利と言う状況を作れた。

ギリギリの逆転により一先ず安心した遊英だったが。

「俺のターンドロー」

柳がとうとう、本格的に動き始めた。

「遊英、なぜ俺が追撃のモンスターを出さなかったと思う」

「何故って、まさか……温存……!?!」

「察しが良いな。そうだ、手札を温存していたのだ。貴様は必ずあの状況を返してくる。先程までの俺の手札ではそれをさせまいと追撃を出し詰めるには少々心許なかったからな」

余裕の表情で目を瞑りカードを手取る柳に、遊英はゴクリと喉をならして唾を飲む。

汗も流れる、冷や汗だ。

柳から感じる気迫から体が本能的に危機感を感じ発汗しているのだ。

「見せてやろう……俺のエヴォルモンスターを」

そう言い、カッと見開かれた柳の瞳はまるで死神。

獲物となる人の魂を見つけたかのような生気に餓えた血の様に赤い眼は。

遊英の背筋を凍らせ、唇を急激に乾かし、喉は痛む程にカラカラに乾燥させた。

「このカードはレベル5モンスターだが、リリース無しで召喚できる。ミストデーモン！」

ふわりと現れ漂う霧が収束し、黒き悪魔の姿を形作った。

ミストデーモン レベル5 ATK/2400

「自身の効果で召喚されたミストデーモンはエンドフェイズ時に破壊され、俺は1000ポイントのダメージを受けるが。」

エヴォル素材として墓地へ送ってしまえば関係は無いな」

「なっ…!!?」

「そして、俺のフィールドにレベル5モンスターが存在する場合。このモンスターは、守備表示で特殊召喚できる。デビル・コネクター」

自身の体からにじみ出る黒い霧の中に手を突っ込み、ミストデーモンは一本の手綱を引き抜いた。

その手綱に繋がれるモンスターは、ケタケタと笑うバスケットボール程の大きさを持つ小悪魔、デビル・コネクター。

デビル・コネクター レベル4 DEF/500

「キツキキ！」

「これにより、レベル4から5のモンスターがフィールドに揃った…！」

「レベル4から5…く、来る…！」

「俺はレベル4から5のモンスターで、エクスポネンシャルを取得!!」

天に現れる光の輪、そしてそれに向かって飛んで行く二体のモンスター。

連なるレベルが糧となり、次なるレベルへとアップする。

「妖紅に染まりし霸王の眷属よ…内に秘めし、猛き一筋の槍と共に。今その姿を、我が眼前に顕現せよ!!」

光の輪から現れるモンスター。

それは新たなるエヴォルモンスター。

「エヴォル召喚!!」

マントの様に翼を靡かせ、三ツ又の白き槍をその手に携える妖しき紅の悪魔。

「現れよ、初期レベル6！我が魂の化身!!」

深き闇の力をその身に纏い今降臨する。

「カーマイン・デモニクス…アスラ!!」

カーマイン・デモニクス・アスラ レベル6 ATK/3000

堂々たる佇まい、絶対的王者の気迫。

目を合わせるだけで魂を抜かれそうな気になる眼光。

そのオーラは部屋全体の空気を重く振動させるが如く。

驚くべきは破格の、圧巻の攻撃力。

「元々の攻撃力が…3000ポイント…だって!?!そんな攻撃力のモンスター、今まで見たことが無い…。」

まるで伝説に謳われる白き竜…青眼の白龍じゃないか…!?!」

「青眼の白龍：…なんだそれは？いや、そんな事はどうでも良い。これが俺のエヴォルモンスター、魂の僕。」

カーマイン・デモニクス・アスラだ：…!!」

爪を立てる様に開かれたその手を突き出しガシリと握り締め、柳は高らかに宣言する。

「さあ受けるが良い、俺の魂の一撃を！やれ!!アスラ!!

妖星なる三叉槍、デモンズ・ランス!!!」

柳の宣言と共にアスラは動く。地に突き立てられた槍を重い風切り音を鳴らし軽々しく回転させ闇の力を解放させた。

突き出された槍の矛先から放たれる三ツ又の光線は、雷鳴が如く耳鳴りを遊英に起こしジンチョウゲを襲った。

「トラップカードリバース！聖花の加護！僕のフィールドに存在する植物族エヴォルモンスターをターン終了時まで除外する！そして柳君。君はこのターン、ダイレクトアタックを行えない！」

栄光の花 ジンチョウゲ、除外。

ジンチョウゲは別の次元へと飛ばされる様に消え去り、アスラの攻撃は空振りに終わる。

だが決して空しい物ではない。空振った光線が放つ衝撃は遊英を襲い、その余波だけで遊英の体を浮かし飛ばした。

「うわああ！」

「エヴォルモンスターを守り、更に直接攻撃を封じたか……！」

余波に飛ばされ倒れた遊英は、火傷と擦り傷を痛ませながらも立ち上がる。

「ならば俺は、アスラのレベルアップエフェクトを発動！」

身構える遊英、ジンチョウゲがフィールドに存在しないこの瞬間に発動されるレベルアップエフェクト。

効果ダメージか、展開を妨害する物か、逆に柳の展開を後押しする物か。

「1ターンの一度、アスラは自身のレベルを1アップさせる事ができる！」

終末への一刻（ジエンド・トウ・モーメント）!!」

巻き上がるオーラに翼をバタバタと靡かせ力を高めるカーマイン・デモニクス・アスラ。重い地鳴りを起こし周囲の空間は揺れる。

カーマイン・デモニクス・アスラ レベル6↓レベル7 ATK/3000

「カードを一枚伏せてターンを終了させる」

「な、なに!?!」

何が来るのか身構えたが、起こったのはアスラのレベルアップのみ。不気味にもター

ンは終了する。

「くっ… この瞬間、ジンチョウゲはフィールドに舞い戻る」

栄光の花 ジンチョウゲ レベル5 ATK/2200

除外され一度フィールドから離れた事により、ジンチョウゲのレベルは元々の物へと戻った。

『花道 遊英』

手札

一枚

モンスターゾーン

栄光の花 ジンチョウゲ レベル5 ATK/2200

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

1900

『柳 佞紋』

手札

一枚

モンスターゾーン

カーマイン・デモニクス・アスラ レベル7 ATK/3000

魔法、罨ゾーン

セツトカード一枚

ライフ

1100

「僕のターン、ドロー！」

ジンチョウゲを守り抜いた遊英。ジンチョウゲは相手モンスター一体の攻撃力を半分にする効果を持ち、アスラが何が特殊な効果を持っていない限り攻撃力では軍配が上がる。

下手に守らず、早々に攻める選択を取った。

「ジンチョウゲのレベルアップエフェクト！」

葛拘縛封!!（かざらこうばくふう）」

アスラに眼光を飛ばすジンチョウゲ。アスラの体から蔓が生え出し、急激に成長しアスラを縛り付ける。

栄光の花 ジンチョウゲ レベル5↓6 ATK/2200

カーマイン・デモニクス・アスラ レベル7 ATK/3000↓1500。

縛り付けられ、攻撃力を半減させられようが柳とアスラは動じない。そして等のアスラはびくともしない、苦しそうな素振り一つ見せやしない。

「手札の共鳴の花 アルメリアの効果を発動!!」「花」と名に付く植物族モンスターが効果を発動した時、このモンスターは、手札から特殊召喚できる!!」

共鳴の花 アルメリア レベル4 ATK/1000

「更に、強健の花 サンシユユを召喚!!」

強健の花 サンシユユ レベル5 ATK/1800

「サンシユユはレベル5モンスターだが、元々の攻撃力を2200から1800にダウンさせる事で、リリース無しで召喚できる!」

「追撃のモンスターが二体…か」

柳の残りライフは1100としてアスラの攻撃力は1500。例えば攻撃力が1600以上であるジンチョウゲかサンシユユ何れかの攻撃を防がれてももう一方で攻撃を行いアスラを破壊、そして攻撃力1000のアルメリアの直接攻撃で止めを刺せる。

「栄光の花 ジンチョウゲでカーマイン・デモニクス・アスラに攻撃!!桜花一閃!舞血桜!!」

腰に携えた刀を抜刀し、沈丁花の花弁を舞散らせアスラにジンチョウゲは斬りかかる。

「これのターンで決められるかと思われたその時。

「リバースマジック！速攻魔法！真剣勝負!!（シリアス・ゲーム）」

「真剣勝負!」（シリアス・ゲーム）」

「フィールドに存在する全てのモンスターの攻撃力と守備力を、元々の数値に変更させる!!」

「な、なんだってー!?!」

遊英は伏せカードの事をよく考えていなかった、失念していた。正常な判断力を失い見落としていた意識外の伏せカード。

発動された速攻魔法、真剣勝負（シリアス・ゲーム）。ジンチョウゲの効果により半分の数値までダウンしていたアスラの攻撃力は1500。

だがジンチョウゲを守り抜き発動させた効果は、一枚の伏せカードによって無力化、無かった事にされてしまい。アスラの攻撃力は、元々の数値である3000になってしまった。

カーマイン・デモニクス・アスラ レベル7 ATK/1500↓3000

栄光の花 ジンチョウゲ レベル6 ATK/2200

強健の花 サンシユ レベル5 ATK/1800

共鳴の花 アルメリア レベル4 ATK/1000

強健の花 サンシユユは “元々の攻撃力” を2200から1800に変更させるカード。真剣勝負（シリアス・ゲーム）によってフィールドのモンスターの攻撃力が “元々の攻撃力” に戻される場合でも、その攻撃力は1800のままだ。

そしてこれにより、遊英のフィールドから柳のアスラを越える攻撃力のモンスターは消え去った。

「攻撃は既に宣言されている。さあ、アスラよ、奴のモンスターを返り討ちにしろ。

妖星なる三叉槍、デモンズ・ランス!!」

アスラの槍から放たれる三本の光線。ジンチョウゲは内一本を刀で弾いたが、残り二本の内一本に手を撃たれ刀を落としてしまい。

「ウオッ！グッ!!」

残りの光線に腹を貫かれ、破壊されてしまった。

そしてその戦闘により遊英は、アスラの攻撃力からジンチョウゲの攻撃力を引いた分の戦闘ダメージを受ける。

「グラ．．グアアアアア!!」

栄光の花 ジンチョウゲ、破壊。

遊英ライフポイント、1900—800＝1100

「うわああああ!!」

攻撃の余波で再び吹き飛ばされる遊英は、壁に叩き付けられ、重心を保つ力を失い倒れた。

遊英は考える、今のこの状況を打破する方法を。

フィールド、手札、墓地、このデュエルで使用された全ての札を朦朧とする意識の中で思い出し整理する。

だが、無い。この状況を打破する方法は、もう遊英には無かった。

「このターン貴様が起こせる行動はもう何も無い。次の俺のターンで、アルメリアに攻撃を行い、このデュエルに終止符を打ってやる。さあ、さっさとターンを終了させるんだな」

(英:..)

その時遊英の耳に、柳の声とは別で、どこからともなく声が聞こえた。

(英:.. 遊英:..)

「だ:.. 誰:..」

聞こえるのは女性の声。遊英を呼ぶその女性は諭すように言う。

(遊英、忘れないで。貴方の目的を、果たすべき使命を)

「僕の:.. 使命:..?」

(守りたいのでしょうか、守ると決めたのでしょうか)

「守る…… そうだ…… エヴォルモンスターから、その驚異から…… 海王君を…… 皆を……」

遊英の目に、遊英自身が身に付けているペンダントが写る。それはずっと昔、まだ遊英が小さい頃に、父親に、白妙に貰ったペンダント。

デュエルモンスターズカードの形をしているが、イラストは無い、テキストも無い。そんなペンダントだが、それは大切な父親から貰った遊英の宝でありお守り。

（貴方には、それを果たし得るかもしれない力がある）

「僕の…… 力……」

遊英は力を振り絞り、ペンダントを握り締めて立ち上がった。すると突然、ペンダントが光始めた。

「なんだ……?」

困惑する柳。ペンダントの光は輝きを増し、すり抜ける様に遊英の手から落ちる。

ペンダントが落ちた遊英の手には、一枚のカードがあった。

「僕は…… 強健の花サンシユと共鳴の花アルメリア。レベル4から5のモンスターで、エクスポネンシャルを取得!!」

天に現れる光の輪。アルメリアとサンシユは、その輪に向かって飛んで行く。

「まさか、これは……!?!」

連なるレベルが糧となり、次なるレベルへとアップする。

「現れよ、壮麗なる花の守護者……未来を願いし思いを守る為。今再び、ここに咲き誇れ!!」

光の輪から現れし、更なる遊英のエヴォルモンスター。

「エヴォル召喚!!」

美しき花弁を舞い散らせ。

「初期レベル6!」

深き眠りから目覚める様に降臨する。

「堅固の花 トウシヨウブ!!」

堅固の花 トウシヨウブ レベル6 ATK/2500

「ハアアア!!」

堅固の花 トウシヨウブ。白を基調としたピンク、赤、紫と唐菖蒲の花が如き花の衣に身を包む戦士。

新たに出現したエヴォルモンスターに驚く柳だが。それ以上に柳と遊英の二人はその姿に驚いていた。

「僕に……そっくりだ」

似ている。その姿は、モンスターらしく荒々しくも美しい見た目だが。トウシヨウブ

の顔は遊英の顔に酷似しているのだ。

(それは貴方であり、貴方ではない)

「僕であり… 僕じゃない…？」

(貴方の思いがこの世界に具現化し、姿を形作つた貴方の力の化身。それがそのモンスター、堅固の花 トウシヨウブ)

「堅固の花… トウシヨウブ…」

(勝つて遊英。貴方の果たすべき使命の為に、貴方はここで負けてはいけない… 遊英勝つて… 遊英…)

遊英の勝利を願い、遊英の名を呼び、女性の声は静かにエコーし消え行く。

遊英は固く心に刻んだ。エヴォルモンスターとの戦い、立ちはだかる強敵が現れようと。いつ如何なる時も、決して負けないと。

守るべき物を守る為に、二度と負けはしないと。

「柳君… 僕は決して負けない。勝ち続け、皆を… 友を守り抜く!!それが僕の使命!!」「いきなりだな、何を言っている?まるで意味がわからんぞ」

「エヴォル素材となつた強健の花サンシユの効果!!このカードが、植物族エヴォルモンスターのエヴォル素材となつた時、デッキからカードを一枚ドロウできる!!」

遊英は勢い強く、抜刀の様にカードをドロウする。静かにドロウカードを確認する

と、そのカードをセットして、遊英はターンを終了させた。

「僕はこれで、ターンを終了させる!!」

『花道 遊英』

手札

無し

モンスターゾーン

堅固の花 トウシヨウブ レベル6 ATK/2500

魔法、罨ゾーン

セットカード一枚

ライフ

1100

『柳 佞紋』

手札

一枚

モンスターゾーン

カーマイン・デモニクス・アスラ レベル7 ATK/3000

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

1100

「俺のターン、ドロウ」

「まあいい……。何はともあれ、それが貴様の真のエースモンスターと言う訳か。

そしてなるほど、理解したぞ。

人の意思とその強き思いが、エヴォルモンスター出現の原因の一つ」

遊英は返事を返さない、険しい顔のまま、口を閉じ、黙って柳とそのモンスターを見つめるのみ。

「どんな効果のモンスターであろうと、俺とアスラはそのモンスターごと貴様を粉碎し、我が手に勝利を納めるのみ！

カーマイン・デモニクス・アスラのレベルアップエフェクトを発動!!

終末への一刻(ジエンド・トウ・モーメント)!!」

カーマイン・デモニクス・アスラ レベル7↓8 ATK/3000

上昇するアスラのレベルは8。レベル8、攻撃力3000、最上級のレベル、最高峰のステータス。

「さあ攻撃だアスラ！デモンズ……ランス!!」

三度放たれるアスラの攻撃、その三本の光線がトウシヨウブを襲おうとしたその時。

「永続トランプリバーズ！光の護封楯！！（ひかりのごほうじゅん）。僕のモンスターが攻撃対象となった時、その攻撃を無効にする！」

遊英はトランプを発動した。トウシヨウブの前に現れた光の盾がトウシヨウブを守る。激突する光と闇から迸る力。

だが、この手を読まない柳では無かった。

「その手を読まない俺だと思ったか!?速攻魔法、悪夢の狼煙!!」

攻撃を無効にする効果が発動した時その効果を無効にし、攻撃を行う自分モンスターの攻撃力を、この攻撃が終了するまでそのレベル×200ポイントアップする!!」

「な、なに!!?」

攻撃無効効果を無効にしその攻撃が終了するまでの間アップする攻撃力は、そのモンスターのレベル×200ポイント。アスラのレベルは8、つまり8×200、200×8＝1600となる。

カーマイン・デモニクス・アスラ レベル8 ATK/3000↓4600

「貫け闇槍！そして散れ！遊英!!」

「くっ…!!」

闇闇の槍に貫かれた光の盾。防御は突破された、万事休すか。

だが、遊英は諦めない。

「堅固の花 トウシヨウブのレベルアップエフェクトを、発動！

1ターンに一度トウシヨウブが破壊される時、自身のレベルを1アップする事で発動できる!!トウシヨウブのその破壊を無効にする!!」

「なに?」

堅固の花 トウシヨウブ レベル6↓7 ATK/2500

巻き起こる旋風は花卉と木葉を散らして壁となりアスラの前にはだかる。

「セイント・リーフ・シールド!!」

止まらない攻撃、止まらない防御。花卉と木葉の盾に防がれ鏢迫り合いが如く力を散らすアスラの攻撃だが。

「だが、戦闘ダメージは受けてもらう!!これで終わりだ!!」

破壊が無効になろうとも戦闘ダメージは避けられない。その数値は4600―2500=2100。遊英の残りライフを遙かに凌駕する。

「いいやまだだ!墓地の逆境の花 カモミールの効果を発動!!自分のライフポイント以上の戦闘ダメージを受ける時、墓地のカモミールを除外する事で、その相手モンスター  
の攻撃力の半分の数値、ライフポイントを回復する!!」

「なんだと?」

まだ遊英は手を残していた。カモミールの効果により回復する数値は、アスラの現在の攻撃力4600の半分、つまり2300。遊英のライフは1100+2300=3400。

遊英ライフポイント、1100+2300=3400。

更にそこから戦闘ダメージ分の2100が引かれて3400-2100で残りライフは1300となる。

衝撃波を拡散させその盾を突き破るアスラの攻撃は遊英を包み込み、貫き飛ばした。

「ぐうわああああ!!」

遊英ライフポイント、3400-2100=1300。

そして攻撃が終了、それによりアスラの攻撃力は元に戻り3000となる。

カーマイン・デモニクス・アスラ レベル8 ATK/4600↓3000

「くっ… 耐え抜いたか…。俺はカードを一枚伏せて、ターンエンドだ!!」

『花道 遊英』

手札

無し

モンスターゾーン

堅固の花 トウショウブ レベル7 ATK/2500

魔法、罨ゾーン

光の護封楯

ライフ

1300

『柳 佞紋』

手札

無し

モンスターゾーン

カーマイン・デモニクス・アスラ レベル8 ATK/3000

魔法、罨ゾーン

セットカード一枚

ライフ

1100

アスラの攻撃がほぼ直撃となり全身ぼろぼろとなってしまった遊英は、がくがくと体を震わせながらも立ち上がる。

だが耐えた、柳の怒濤の攻撃を辛うじて耐え抜いたのだ。

「……………」

彼はデッキトップのカードに手を掛けると、険しい顔のままドローをする。

「僕のターン…… ドロオオー!!」

雄叫びのドロロー。ドロローカードを確認すると遊英、険しい顔を微かに緩ませて宣言した。

「堅固の花 トウショウブで、カーマイン・デモニクス・アスラを攻撃!!」

「馬鹿な! 攻撃だと……!?!。貴様のモンスターの攻撃力は2500。アスラの攻撃力の3000ポイントを越えてはいはず!!」

宣言される攻撃に驚愕する柳だが、トウショウブは躊躇うこと無く攻撃を行う。

トウショウブの起こす旋風と共に舞い上がる花卉と木葉は集束し一つの花の玉となる。

「ハアアアアアア!!」

そしてその花の玉は、玉から弾と成り、トウショウブの手よりアスラへ狙いを定めて発射された。

「血迷ったか……!?!いや、ならば返り討ちだ! やれアスラー! デモンズ・ランス!!」

アスラの放つ闇の光線、トウショウブの放つ花の弾丸は激突する。ぶつかり合うエヴォルモンスターのエネルギーは火花の様に迸った。

「トウショウブのレベルアップエフェクトを発動! セイント・リーフ・シールド!!」

再び発動されたトウシヨウブのレベルアップエフェクト。トウシヨウブのレベルは1アップし、本来起こる筈のトウシヨウブの戦闘による破壊は無効となる。

堅固の花 トウシヨウブ レベル7↓8 ATK/2500

だが戦闘ダメージは避けられない。花の弾丸は圧され、遊英に3000→2500  
||5000による500ポイントの戦闘ダメージが入った。

遊英ライフポイント、1300→500||800。

残りライフは800、トウシヨウブとアスラの攻撃がぶつかり合うエネルギーとその衝撃波の中。柳はその隙を逃さなかった。

「速攻魔法発動！」(隠居の猛毒薬!!貴様に800ポイントの、ダメージを与える!!これで終いだ!!」

発動される速攻魔法。両者衝撃波に耐えるこの時に発動された800ポイントの速攻効果ダメージ。800ポイント。

そう、遊英の残りライフと同じ数値。ジャストキルだ。  
だが。

「それはどうかな?!速攻魔法発動!デイス・T・バット・サプライズ!!」

「デイス・T・バット・サプライズ!!」

続けて発動された速攻魔法。花に折られた紙の薬玉が高らかに開かれ、花吹雪が舞い

散るイラストの速攻魔法カード。

「レベルが変化している自分モンスターが戦闘で破壊されなかった場合、このカードを発動できる!!」

このターン、そのモンスターと戦闘を行った相手モンスター一体を破壊し、そのモンスターの元々の攻撃力分のダメージを……君に与える!!」

「なん……だと……!!?」

先に発動されたのは柳のご隠居の猛毒薬、そして次に発動されたのが遊英のカード、デイス・T・バット・サブライズ。連続してカードが発動されたこの時、後に発動された効果から先に適用される。

繰り返すが先に発動されたのは柳のカード。後に発動されたのが遊英のカード。つまり、この場合遊英のカードの効果が先に適用される。

柳の発動した効果ダメージが遊英に止めを刺すその直前に。遊英の発動したカードによってカーマイン・デモニクス・アスラが破壊され、その攻撃力分、つまり3000ポイントの戦闘ダメージを受ける。

一步。ほんの一步、遊英が勝った。

「ボタニカル・シード……フレアアアアア!!」

アスラの攻撃とぶつかり合い衝撃波を放っていた花の弾丸は爆発する。そしてその

爆発した花の弾丸は、その光と衝撃でアスラの光線を打ち消し花吹雪を起こす。その花吹雪はアスラを襲い破壊。そして柳に直撃しその身を吹き飛ばし。

「ぐうううあああああああああああああ!!」

カーマイン・デモニクス・アスラ、破壊。

柳ライフポイント、1100—3000=0。

遊英、勝利。

柳のライフポイントを、0にした。

勝った。

遊英は勝った。テニスのラリーの様に互いが互いの攻撃を許さない激しいぶつかり合い。

強者と強者故の鬼気迫る戦いに遊英は勝利した。

だが、喜んだのもつかの間。

「あっ…」

遊英は、その場で意識を失った。

## 月の少女

白く靄が掛かっている様な空間……。

どこかも分からない場所に遊英は立っていた。

いや、立っているのかも怪しい。

そう思う遊英の感覚はふわふわと、まるで浮いている様に見受けられた。

「……は……？」

ここはどこだろう、そう考える遊英は思い出した。

「そうだ：：僕は柳君と戦って：：気を失って」

ここがどこかも、何が起こっているのかも分からないが。

兎に角今は、海王達の元へ戻ろう。そう遊英は考えた。

だがそう思ったのも束の間、何者かが遊英に話し掛けてきた。

「……からは出られないわ」

聞き覚えのある声、懐かしい様で、最近聞いた気がする声。

と言うより、遊英はその声に心当たりがある。

この声は、柳と戦っている時に聞こえた声。

新たなエヴォルモンスターを手にした時に聞いた、あの女性の声だ。振り向くと、一人少女が佇んでいた。と言うより浮いていた。

ふわふわと、今は遊英を客観視したらこうなっているのだろうと思わせるほど。分かりやすく、絵に描いたように浮いていた。

「ここは貴方の精神世界、貴方の記憶の眠る場所。だから出られない」  
「僕の世界？」

「夢みたいな物ね。この空間は、誰もが持っている物よ」

「そんな場所に、どうして君は？」

そう遊英と話す彼女の姿は美しかった。

咲き誇る花の様な衣、ゆらゆらと揺らめく髪。

「その衣、バーベナの花を模してるのかな？」

「詳しいのね」

「僕のお父さん、花屋さんだから」

「そう。花は貴方と縁の深い物なのね」

身に付ける己の衣を見下ろし、遊英と話す彼女はどこか嬉しそうだ。

「君は、さつき話した・・・」

「そうよ、遊英。私と貴方はいさつき会話をした。」

彼と、柳 佞紋と貴方が戦っているその最中にね」

「やっぱり。もう一度聞くけれど、どうして君は僕の世界に？」

「貴方を見守る為」

「僕を見守る為？」

「ええ、エヴォルモンスターはまだまだ出現し、貴方達を狙い、その前に立ちほだかるわ。

「これからの戦いは、もつともつと激しくなる」

「僕達を狙って？」

「そうよ、エヴォルモンスターは。

エヴォルモンスターを従えているデュエリスト、そして従える可能性のあるデュエリ

ストを狙っている」

「なぜ？」

「いざれ知るわ。今はただ、力を付けて。

あの強きデュエリストと、柳 佞紋と共に」

「柳君と共に？」

淡々と続く会話。互いに互いと話慣れている様に進む話だが。

彼女は、浮いたままふわりと少し後ろに下がると、肩を竦めて言った。

「もう時間ね」

「時間？」

「気絶し、眠っている貴方が意識を取り戻すの。」

大丈夫、また逢えるわ」

彼女がそう言うのと。

突然遊英の視界の端が白くなり、それは広がりに。

廳で遊英の視界を真っ白に染め上げた。

「待って、君の名前は!？」

「……ルナ…… また逢いましょう。遊英……」

ふわりと跳ねる様に意識が覚める。

「ルナ……」

気が付くと遊英は見知らぬ部屋のベッドの上、横になっていた。

「ハハハ」

また知らない場所だ。

自分の服装が入院服に変わっている所を見るにここは病院だろう。

そう部屋を見回す遊英。

横たわるベッドの横のテーブルにデッキリと、スマートフォンを見つけた。

「これ、僕のだ」

スマートフォンがあるなら海王と連絡を取れる。

そう一安心していると、部屋の扉が機械音を上げて開いた。

横開きの自動ドアの様だ。

「遊英！」

「海王君、皆！」

「無事で良かった、遊英……！」

扉が開き、遊英の姿を見た途端飛び込むように入ってきたのは。

海王と愛結と、天馬の三人だ。

「つたく、二日も心配させやがって！」

「二日？」

「遊英、一昨日から今まで目を覚まさなかったんだよ！」

「ええ!？」

遊英は仰け反って驚いた。

海王と天馬の話によると。

遊英は二日間ずっと眠っていた様だったのだ。

「柳の奴は時期に目を覚ますって言ってたけどよ。」



「な、なんだいまの」

開いた扉の向こうに居たのは。

遊英と海王の父、白妙だった。

急いで来た故に、勢い余って扉が開く前に突撃してしまい。

物の見事に激突したようだ。

「遊英君！」

白妙は飛び込んで遊英の両頬に手を添えた。

「大丈夫かい、遊英君。どこか痛かったり、気持ち悪かったりしないかい?!」

心配そうに、それでもどこか嬉しそうに遊英の頬を撫でる白妙。

彼の顔からは安堵の表情が見てとれた。

「本当に良かった。海王君から遊英君が目を覚ましたって連絡が来たから。

お店を閉めて飛んできたんです。本当に良かった。」

「心配してくれてありがとう、お父さん。」

でもお仕事閉めてまで来てくれなくても大丈夫だったのに」

「子供の心配をしない親がどこに居ますか。本当に良かったですよ。」

遊英の無事を確認して安堵する白妙を尻目に。

今度は部屋に、病院の先生が入ってきた。

「お待たせしました。目を覚ました様ですな」

売店へ物を買いにいったついでに愛結が呼んだのだ。

白妙が退くと、先生は手慣れた手付きで軽い検査を行い遊英の容態を見て告げた。

「見た所異常はありませんね。明日にでも、しっかりと検査した後には、何事も無ければすぐに退院出来るでしょう」

すぐにでも退院出来る。その言葉で改めて安心だ。

軽い検査の後に部屋から先生は立ち去る。

先生に続くように、天馬、愛結、海王、白妙と順番に。

皆は遊英に一声挨拶をすると帰っていった。

それから二日後の事。

何事も無く退院した遊英は、学校帰りの道、制服姿のままにある場所へと赴いていた。それは警察署だ。

以前柳に連れられ、カーネーションシティの各地でのエヴォルモンスターの出現、そしてそれによる被害の事実を知らされた場所。

なぜここへ赴いたか、それは柳に会うためだ。

夢で見た少女。ルナの言った言葉、「柳と共に力を付けろ」その言葉に従おうとした訳

ではないが。

それは遊英の気掛かりとなっていた。

だが、今日柳は学校を欠席していた。

担任に理由を聞けど、担任も欠席の理由は知らされていなかったらしい。

だから遊英は、自分が知る限り最も柳の所在地を知り得るであろうここへと足を運んだのだ。

所内の受付へと話を聞きに行く。

遊英はいつの間にか顔パスとなっている様で、意図も容易く所長のラルゴと話をさせて貰える事となった。

別室へ連れられ、ソファに座りラルゴの到着を待っていたその時。

大きな音を立てて扉が蹴破られた。

「うわ!? な、なに!?!」

思わず驚き飛び上がる遊英。

扉の方へと目を向けると、凡そ公務員とは呼べない身形の男が入ってきた。

「お前が花道 遊英か」

「・・・ どうして僕の名前を?」

「いやね、ちよつと聞いたのさ。お前をデュエルで倒せば何でも願いを叶えてやろうつ

てね」

「デュエルで倒せば願いを？」

「前金も頂いてる、簡単な話だ。さあデュエルしようぜ」

いきなり入ってきた男にいきなり要求されるデュエル。

了承する義理はない。

「断るよ。君とデュエルをする理由も道理もない」

「道理ならあるさ、ほらよ」

そう言い男が遊英に見せたのは、エヴォルモンスターカード。

カードを掲げ、男がニタリと張り付いた様な笑みを浮かべると。

遊英はルナの言葉を思い出した。

『エヴォルモンスターは、エヴォルモンスターを従えているデュエリスト、従える可能

性のあるデュエリストを狙っている』

もしこの男のデュエルを断るとどうなる。

ルナの言い方を思うに、エヴォルモンスターは個々に意思を持つ可能性がある。

更に可能性として考えられるのは。

遊英を狙っているのは男ではなくエヴォルモンスターと言うこと。

そしてあのエヴォルモンスターが狙っているのが、自分ではなく。

エヴォルモンスターを従える自分であるのなら。

もし断れば。遊英と同じくエヴォルモンスターを従える海王か、もしくは天馬の元へと行く可能性がある。

背筋が凍った。

海王が敗北し、昏睡状態となる映像が。

ダメージが現実となり、エヴォルモンスターに無惨にバラバラにされる映像が。遊英の脳裏を過った。

「わかった、やろう」

遊英が最も恐れる事は、海王に、愛結に、天馬に、仲間被害が及ぶ事。

そして、取り返しのつかない事になってしまう事。

「いいねえ、そうでなくちゃあ」

デュエルを行う理由が、道理ができた。

そしてデュエルを断る選択肢を、失った。

遊英はポケットからスマートフォンを取り出すと。

腕のリングにセットする。

スマートフォンは変形に変形を繰り返した。

忽ち形を変えるスマートフォン。

五つのモンスターゾーン。

五つの魔法、罨ゾーン。

フィールド魔法ゾーン、墓地。

デッキセットゾーン。

物の数秒でスマートフォンは。

近代的なデュエルディスクへと姿を変えた。

「デュエルディスク！セット完了！」

腰のケースからデッキを手にする遊英と男。

「ソリッドビジョンシステム！起動！」

二人は勢いよくディスクにデッキを差し込む。

「デュエルオポネント！リンク完了！」

ディスクにより自動シャッフルされる互いのデッキ。

デュエルの準備が。

完了した。

「決闘!!」

二人の掛け声と共に、ソリッドビジョンにより。

辺り一帯の風景にサイバネティックなエフェクトが広がった。

互いにデッキからカードを五枚ドロ。  
デュエルの幕が、開けられた。

『花道 遊英』

手札

五枚

モンスターゾーン

無し

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

4000

『弾崎 宇津』

手札

五枚

モンスターゾーン

無し

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

4000

「俺の先行だ、ドロー！」

「俺はマジックカード、グラージ・メテオを発動！」

手札のモンスター一体を捨てて、お前に1000ポイントの効果ダメージを与える！」

遊英ライフポイント4000↓3000。

「ぐわああ！」

「更にマジックカード、死者蘇生を発動！」

墓地のモンスター一体を特殊召喚する！」

特殊召喚されるのは、たった今グラージ・メテオの効果で捨てられたカード。

モンスターカードだ。

プラナリー・フライ レベル7 ATK/2300

「俺はこれでターンエンドだ」

『花道 遊英』

手札

五枚

モンスターゾーン

無し

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

3000

『弾崎 宇津』

手札

三枚

モンスターゾーン

プランナリー・フライ レベル7

ATK/2300

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

4000

「僕のターン、ドロロー！」

初手から現れた最上級モンスター、プラナリー・フライ。最上級モンスターを墓地へ送りカードにより蘇生させる事で。

本来通常召喚するのに必要なリリースを無視して最上級モンスターの速攻召喚を行う戦術。

エヴォルモンスター使いである以前にこのデュエリスト、並みではない実力の持ち主だ。

だがそれは遊英とて同じ事。

「目覚めの花 ハナズオウを召喚！」

目覚めの花 ハナズオウ レベル4 ATK/1400

「ヌーン！」

「目覚めの花 ハナズオウの効果！」

このカードが召喚、特殊召喚されたターンにのみ発動できる。

ターン終了時までこのカードの攻撃力を600ポイントアップさせ、レベル5モンスターとして扱う！」

目覚めの花 ハナズオウ レベル4↓5 ATK/1400↓2000

「ヌオオ！」

「更に！手札のカード一枚を墓地へ捨て、迅速の花、ストックを特殊召喚！」

迅速の花 ストック レベル3 ATK/1000

遊英の手札にはこの盤面にはお誂え向きのカードがある。

劣性ではない、今は攻め時なのだ。

「ハナズオウで、プラナリー・フライに攻撃！」

「間抜けが！攻撃力は俺のプラナリー・フライの方が上だ！」

「それはどうかな？速攻魔法、即席のブーケを発動！」

「即席のブーケ…!?!」

「即席のブーケは、僕のモンスター一体の攻撃力を。ターン終了時まで互いのフィールドに存在する植物族モンスターの数×500ポイントアップするカード！」

フィールドに存在する植物族モンスターは現在遊英のフィールドに居る二体、ハナズオウと、ストックだ。

つまりアップする攻撃力は500×2で1000。

「ハナズオウの攻撃力を、1000ポイントアップする！」

目覚めの花 ハナズオウ レベル5 ATK/2000↓3000

「バカな、攻撃力3000だど!?!」

「行け、ハナズオウ！起き様のレクイエム！」

ハナズオウ自身の効果と合わせ、攻撃力が合計1600アップしたハナズオウの攻

撃。

耳を劈く爆音の草笛はプラナリー・フライを破壊し、男に、弾崎に700の戦闘ダメージを与えた。

「ぐわあああ！」

プラナリー・フライ、破壊。

弾崎ライフポイント、4000→700＝3300。

「ストックの攻撃と合わせれば、このターンの戦闘ダメージは1700だ！」

続けて遊英が、追撃にストックで攻撃を行おうとした時。

「だがここで、プラナリー・フライの効果を発動！」

「なに!？」

「プラナリー・フライはフィールドから墓地へ送られた時、プラナリー・フライ以外の昆虫族モンスターを手札または墓地から二体まで特殊召喚できるのさ！」

来い！グレイト・クイン・インセクト！

そしてビッググレイト・モス！」

グレイト・クイン・インセクト レベル7 ATK／2400

ビッググレイト・モス レベル8 ATK／3000

高攻撃力の最上級モンスターが二体も、同時にフィールドに現れた。

「な、なんだってー!?!」

弾崎の狙いは最上級モンスター、プラナリー・フライによるフィールドの制圧ではない。

その逆だ。

弾崎が狙っていたのは、遊英にプラナリー・フライを破壊させる事だったのだ。

「更にグレイト・クイン・インセクトの攻撃は、フィールドの昆虫族モンスターの数×200ポイントアップする」

フィールドに存在する昆虫族モンスターは、グレイト・クイン・インセクトとビッグレート・モスの二体。

200×2=400、よって攻撃力は400ポイントアップし。

攻撃力2400から、攻撃力2800となった。

グレイト・クイン・インセクト レベル7 ATK/2400↓2800

「キシヤアアア!!」

最初の最上級モンスターと入れ替わり、フィールドに並んだ二体の最上級モンスター。

その攻撃力は驚異の3000ポイントと2800ポイント。

「元々の攻撃力が、3000ポイント…」

つい先日にも、元々の攻撃力が3000ポイントのエヴォルモンスターと戦い、傷付き倒れた遊英にとつては。

すこしばかり嫌な数値だ。

「僕はカードを一枚セットして、ターンを終了させる」

この瞬間、即席のブーケ並びに目覚めの花 ハナズオウの効果は切れ。

ハナズオウのステータスはレベル5攻撃力3000から、レベル4攻撃力1400へと戻る。

目覚めの花 ハナズオウ レベル5↓4 ATK/3000↓1400

そして遊英のターンは、終了した。

『花道 遊英』

手札

二枚目

モンスターゾーン

目覚めの花 ハナズオウ レベル4 ATK/1400

迅速の花 ストック レベル3 ATK/1000

魔法、罨ゾーン

セットカード一枚

ライフ

3000

『弾崎 宇津』

手札

一枚

モンスターゾーン

グレイト・クイン・インセクト

レベル7

ATK／2800

ビッググレート・モス

レベル8  
ATK／3000

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

3300

## 異世界からの支援

## 『花道 遊英』

手札

二枚目

モンスターゾーン

目覚めの花 ハナズオウ レベル4 ATK/1400

迅速の花 ストック レベル3 ATK/1000

魔法、罨ゾーン

セットカード一枚

ライフ

3000

## 『弾崎 宇津』

手札

一枚

モンスターゾーン

グレイト・クイン・インセクト レベル7 ATK/2800

ビッググレイト・モス レベル8 ATK/3000

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

3300

「俺のターン、ドロロー！」

「このまま終わらせてやる！。グレイト・クイン・インセクトで、迅速の花 ストックに攻撃！。パーフェクト・クイン・プレス！」

不快極まりない金切る奇声を上げ。

グレイト・クイン・インセクトは、迅速の花ストックへと胃酸のプレスを吹きかける。

「トラップカードリバーズ！姫菜危く切り花!!」

このカードを発動したターン、僕の植物族モンスターは戦闘では破壊されず僕が受けるダメージは半分になる！」

「なに、防御カードだっ!?」

発動されたトラップカード、姫菜危く切り花により。

本来このターンで尽きる筈だった遊英のライフは守られた。

「だがこの時、僕のフィールドのカードを一枚破壊してしまう」  
強力なトラップにはデメリットが付き物。

姫菜危く切り花の効果により遊英のカードは破壊される。

「僕はその破壊に、迅速の花をストックを選択する！」

迅速の花 ストック、破壊。

「な、なんだと！」

攻撃対象だった迅速の花をストックがフィールドから居なくなつた事により。

攻撃は一時中断、そしてこれにより遊英はをストックを攻撃される事による大ダメージをカッとした。

「ぬう…：ならば、目覚めの花ハナズオウに攻撃だ！。パーフェクト・クイン・プレス!!」

「くっ…：！」

しかし攻撃は止まらない。

遊英はをストックに代わりハナズオウが戦闘を行った事によるダメージ、その半分を受ける。

遊英ライフポイント、3000—700〓2300。

「ビッグレート・モス、お前も攻撃だ！奴のライフを削り取れ!!」

ビキリと音を立てて動き出すビッグレート・モス。

巨大な羽を羽ばたかせ、暴風と共に毒鱗粉を撒き散らし遊英のライフを削った。

遊英ライフポイント、2300-800=1500

「うわああああ!!」

「俺はカードを一枚伏せ。これで、ターンをエンドさせる」

『花道 遊英』

手札

二枚目

モンスターゾーン

目覚めの花 ハナズオウ レベル4 ATK/1400

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

1500

『弾崎 宇津』

手札

一枚

モンスターゾーン

グレイト・クイン・インセクト レベル7 ATK/2800  
ビッググレート・モス レベル8 ATK/3000

魔法、罨ゾーン

セットカード一枚

ライフ

3300

「僕のターン、ドロー！」

ドローカードは、〃レベル3〃モンスター『グロキシニア・ウィッチ』。

来た、現状を打破するキーカードだ。

「僕は、グロキシニア・ウィッチを召喚！」

グロキシニア・ウィッチ レベル3 ATK/1200

「これにより、レベル3から4のモンスターがフィールドに揃った！」

「まさか！」

「僕はグロキシニア・ウィッチのレベル3から、目覚めの花 ハナズオウのレベル4まで

で、エクスポネンシャルを取得！」

天に現れる光の輪、それへ向かって飛んで行く二体のモンスター。

連なるレベルが糧となり、次なるレベルへとアップする。

「遙かなる彼方の戦士よ！二輪の力を糧とし蓄を開き、今栄光をその手に掴み取れ!! エヴォル召喚！」

現れよ！初期レベル5！

栄光の花 ジンチョウゲ!!」

栄光の花 ジンチョウゲ レベル5 ATK/2200

遊英の所持するエヴォルモンスターカード。

花の衣に身を包む侍。

栄光の花 ジンチョウゲ、遊英のデッキを代表するバトルに置けるエースモンスターだ。

「とうとう現れたか。そいつが話しに聞く貴様の切り札、エヴォルモンスター……！」  
「そうだ！これが、僕の持つエースカードの一つ！」

そしてその効果は、1ターンに一度、自身のレベルを1アップする事で、相手フィールドのモンスター一体の攻撃力を、ターン終了時まで半分にする効果！」

「ターン終了時まで半分にだど!?!」

「ジンチョウゲ！レベルアップエフェクトを発動！葛拘縛封！（かずらこうばくふう）」

ジンチョウゲが眼光と共にエネルギーの衝撃波を、ビッグレート・モスへと送ると。

ビッグレート・モスの体内から蔦が生え成長し出し、その身体を堅固に縛り付けた。

栄光の花 ジンチョウゲ レベル5↓6。

ビッグレート・モス レベル8 ATK/3000↓1500

「攻撃力が1500に…!?!」

「行け! ジンチョウゲ! ビッグレート・モスに攻撃!

桜花一閃! 舞血桜! (おうかいっせん まいちぎくら)」

固く拘束され動けなくなったビッグレート・モス。

成す術もなくジンチョウゲに幾重にも切り裂かれ破壊される。

ビッグレート・モス、破壊。

「ぐわあああ!!」

弾崎ライフポイント、3300→700||2600

「そしてこの瞬間、速攻魔法、エヴォリーション・イレイザーを発動!

僕のエヴォルモンスターが相手モンスターを戦闘により破壊した時、そのエヴォルモンスターのレベルを1アップする事で。

破壊した相手モンスターよりレベルの低い相手モンスター一体の攻撃力を0にして、

そのモンスターの元々の攻撃力の半分の効果ダメージを与える!」

「なんだと!?!」

栄光の花 ジンチョウゲ レベル6↓7。

破壊したビッググレート・モスのレベルは8。

そしてフィールドに存在する弾崎のモンスターはレベル7モンスター、グレート・クイン・インセクトのみ。

グレート・クイン・インセクトの攻撃力は0となり、その元々の攻撃力の半分の数値の効果ダメージを弾崎は受ける。

グレート・クイン・インセクト レベル7 ATK/2800↓0  
弾崎ライフポイント、2600—1400=1200。

「ぐわああああ!!」

一気に捲った。

ライフポイントは遊英が逆転し、その差は300。

そして弾崎のフィールドには攻撃力0のモンスターが一体のみ。

圧倒的不利から圧倒的有利に、たった1ターンで捲った。

「くっ…：だ、だが、これで俺はトラップカードを発動できる！」

トラップ発動！羽虫の大量発生！

俺の昆虫族モンスターが相手の攻撃によって破壊された時。

自分フィールドにレベル7以上の昆虫族モンスターが存在すれば。

破壊された昆虫族モンスターのそのレベル2につき、カードを一枚ドロウする！」

「なんだって!？」

フィールドにはレベル7のグレイト・クイン・インセクトが存在、条件は満たしている。

そして破壊された昆虫族モンスターは、レベル8ビッググレート・モス。

そのレベル2につき一枚カードをドロウ、つまりレベル8÷2＝4で合計4枚のカードを弾崎はドロウした。

「僕はカードを一枚伏せて… ターンエンドだ」

『花道 遊英』

手札

無し

モンスターゾーン

栄光の花 ジンチョウゲ レベル7 ATK/2200

魔法、罨ゾーン

セットカード一枚

ライフ

1500

『弾崎 宇津』

手札

五枚

モンスターゾーン

グレイト・クイン・インセクト レベル7 ATK/0

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

1200

「俺のターン、ドロロー！」

勢い良く引かれたドロローカードを確認し、弾崎はニヤリと笑みを浮かべる。

「こっちも来たぜ、エヴォル召喚の条件がな……！」

「なに!？」

「魔法カード、分裂増殖を発動！」

「分裂増殖……?!」

「このカードは、俺の昆虫族モンスター一体を選択しそのレベルが奇数ならば。

そのモンスターをリリースして、そのレベルの合計がリリースした昆虫族モンスターと同じになる様。」

ヤマトトークンを二体特殊召喚するのさ！」

「レベルを分ける効果だつて!？」

グレイト・クイン・インセクト、リリース。

「グレイト・クイン・インセクトのレベルは7だ。

俺は、レベル3とレベル4のヤマトトークンを特殊召喚するぜ」

ヤマトトークン レベル3 ATK/0

ヤマトトークン レベル4 ATK/0

「この布陣は—」

「気付いた所でもう遅い!」

俺は、ヤマトトークンのレベル3から、ヤマトトークンのレベル4までで、エクスポ

ネンシヤルを取得!」

天に現れる光の輪、それへ向かって飛んで行く二体のモンスター。

連なるレベルが糧となり、次なるレベルへとアップする。

「エヴォル召喚!現れ出でよ!初期レベル5!

寧猛なる甲虫のガンマン。

地獄弾甲虫 ブレット・ビートル!」

地獄弾甲虫 ブレット・ビートル レベル5 ATK/2000。

固い外骨格を身に纏う黒光りする甲虫。

鋭くも滑らかな角を呷り今現れた。

「地獄弾甲虫： ブレット・ビートル：！？」

「どくよ、これが俺のエヴォルモンスターだ」

「でも、攻撃力2000程度じゃ、僕のジンチョウゲは越えられないよ」

そう、ジンチョウゲの攻撃力は2200。

今現れたブレット・ビートルの攻撃力は2000。

僅かだがジンチョウゲが勝っている。

が。

「そいつあさどうかなあ」

「なに？」

「俺は、地獄弾甲虫 ブレット・ビートルのレベルアップエフェクトを発動！

1ターンに一度、自身のレベルを1アップする事で、相手フィールドのモンスター一体につきその攻撃力をターン終了時まで500ポイントアップさせ。

その数値分のダメージを相手に与えるのさ！」

地獄弾甲虫 ブレット・ビートル レベル5↓6

「なんだって!？」

「お前のフィールドにはエースモンスターとやらが一体存在する！。500ポイントのダメージを、受けるお！」

遊英ライフポイント、1500→500||1000。

「うわあああ!!」

「そして、その数値分、ブレット・ビートルの攻撃力はアップする！」

地獄弾甲虫 ブレット・ビートル ATK/2000↓2500。

僅かだが勝っていた200の攻撃力。

だが差はブレット・ビートルの効果により覆り、今度はブレット・ビートルがジンチョウゲの攻撃力を越えた。

「攻撃力がジンチョウゲを上回った……!?!」

「行け！ブレット・ビートル！ビートル・シヨット!!」

攻撃力はブレット・ビートルが300ポイント上。

よってジンチョウゲは破壊され、遊英が戦闘ダメージを受ける。

遊英ライフポイント、700。

「うわああああ!!」

栄光の花 ジンチョウゲ、破壊。

「くっ……だが、この瞬間、エヴォル素材となっていたグロキシニア・ウィッチの効果！」

グロキシニア・ウィッチを素材としたエヴォルモンスターが破壊された時、自分フィールドにモンスターが存在しなければ。

素材となっていた墓地のグロキシニア・ウィッチを除外する事で、元々のレベルからアップしていたレベル分カードを一枚、最大で二枚までドロウできる！」

グロキシニア・ウィッチを素材としていたジンチヨウゲは破壊され、遊英のフィールドにモンスターは存在しない。

条件は整い効果は発動される。

墓地のグロキシニア・ウィッチ、除外。

グロキシニア・ウィッチを素材としていたジンチヨウゲは元々のレベル5からレベルは7まで、つまり2アップしていた。

よって遊英はカードを二枚ドロウする。

「うわっはははは！今更カードを引いても無駄だ！」

俺はカードを一枚セットしてターンエンド！」

この瞬間、ブレット・ビートルの攻撃力は元に戻る。

地獄弾甲虫 ブレット・ビートル ATK/2500↓2000

『花道 遊英』

手札

二枚

モンスターゾーン

無し

魔法、罨ゾーン

セットカード一枚

ライフ

700

『弾崎 宇津』

手札

四枚

モンスターゾーン

地獄弾甲虫 ブレット・ビートル

レベル6

ATK/2000

魔法、罨ゾーン

セットカード一枚

ライフ

1200

遊英の手札には魔法、罨が一枚ずつ。

このターンでどうにかしなければ次のターンにはダイレクトアタックを決められ敗北してしまう。

「僕のターン… ドロー！」

ドローカードは、レベル5モンスター『強健の花 サンシユユ』。

墓地には、迅速の花 ストックの効果で墓地に送ったあのカードがある。

これならば、突破が可能。

そう思い遊英は心の中でぐつと拳を握りしめる。

「墓地の捧献の花 ナズナの効果！ 相手フィールドにのみモンスターが存在する場合。

このカードは墓地から特殊召喚できる！」

捧献の花 ナズナ レベル4 ATK/0

「なに!? そんなカードいつの間に墓地に！」

「覚えていないかい？ 僕の最初のターンに発動された、迅速の花ストックの効果を」

「迅速の花ストック… はっ!!」

「そうさ、これはストックの効果で捨てたカード。

最初から仕込まれていたモンスターなのさ！」

「だが、そんなモンスター一体で何をしようってんだ」

「まだモンスターはある！ このカードは元々の攻撃力を1800に変更する事で、リ

リース無しで召喚できる。

強健の花 サンシユユ!」

強健の花 サンシユユ レベル5 ATK/1800

これにより、遊英のフィールドにレベル4から5のモンスターが揃った。

「はっ、エヴォルモンスターはもう使い切っちゃったぜ。」

レベルを並べても何にもできやしねえ」

「いいや、あるのさ、僕にはもう一つ。真のエースモンスターが!」

「なに!」

そう、遊英は持っている。

二枚目のエヴォルモンスター。

遊英の真のエースモンスターを。

「僕は、捧献の花 ナズナのレベル4から、強健の花 サンシユユのレベル5までで。

エクスポネンシャルを取得!」

「なんだと!」

天に現れる光の輪、それへ向かって飛んで行く二体のモンスター。

連なるレベルが糧となり、次なるレベルへとアップする。

「現れよ、壮麗なる花の守護者!」

遊英が持つ二体目のエヴォルモンスター。

美しき花の衣に身を包む、遊英の思いが力となり具現化したカード。

「今ここに再び咲き誇れ！初期レベル6！」

堅固の花！トウシヨウブ！」

堅固の花 トウシヨウブ レベル6 ATK/2500

捧献の花 ナズナは、自身の効果で特殊召喚された場合、フィールドから離れた時除外される。

捧献の花 ナズナ、除外。

「二体目の…エヴォルモンスターだ?!?そんなの俺あ聞いてないぞー！」

「強健の花 サンシユユの特殊効果！このカードがエヴォル素材となった時、デッキからカードを一枚ドロウする！」

並ぶ遊英とトウシヨウブ。

そっくりな顔立ちだ。

知り得なかったモンスターの登場に驚愕し、ダラダラと汗を垂らす弾崎だが。

袖で汗を拭い、一呼吸入れ、冷静な表情へと戻った。

「攻撃力はトウシヨウブが上だ。行け！トウシヨウブ！」

トウシヨウブは旋風を巻き起こし、木葉と花卉をエネルギーと共に収束圧縮させ花の

弾丸を作り出す。

「ボタニカル・シード・フレア！」

遊英の掛け声と共に、トウショウブは花の弾丸を発射した。

攻撃力2500、この攻撃を通せば攻撃力2000のブレット・ビートルは破壊され、弾崎はダメージを受ける。

しかし、弾崎は既に策を打っていた。

「想定内だ！トラップ発動！無視避けースルー・バリアー！」

手札のカードを全て除外し、バトルフェイズを強制終了させる！」

「なに!？」

弾崎の手札は除外されバトルフェイズは強制終了。

そこまでは良い、そこまですらば遊英も想定していた。

だが、手札を全て除外。

これだけは理解ができなかった。

弾崎の手札の枚数は四枚。

ここから幾らでも動ける手札の枚数だ。

だが、除外、それも全て。

何故？戸惑う遊英だが。

次の瞬間、それが元より狙っているタクティクスだったと理解した。

「この瞬間、除外されたエヴォル・ナイト・ブースターの特殊効果を発動！」

「除外された時に、発動!？」

「このカードが手札、フィールド、墓地から除外された場合に発動する。」

フィールドのエヴォルモンスター一体の攻撃力を、500ポイントアップさせる！」

「なんだって!？」

そう、狙っていたのだ。

エヴォル・ナイト・ブースターの効果を、それにより、ブレット・ビートルの攻撃力をアップさせる事を。

「除外されたエヴォル・ナイト・ブースターは二枚ある！」

よってえ！攻撃力は1000ポイントアップだああ!!」

地獄弾甲虫 ブレット・ビートル レベル6 ATK/2000↓3000

「こ、攻撃力3000だって!？」

再び現れる攻撃力3000。

潰しても潰しても湧き出てくる虫の様に。

倒しても倒しても、弾崎のフィールドから遊英のモンスターを越える高攻撃力モンスターが絶えない。

圧倒的タクティクス。

始めにも遊英は思ったが。

このデュエリスト、弾崎 宇津、並みのデュエリストではない。

幸いなのはバトルが既に終了している事。

仮に今発動されたトラップが、バトルを止めずに手札を除外するカードならば。

攻撃力2500のトウシヨウブと、攻撃力3000となったブレット・ビートルのバトルにより。

遊英は5000の戦闘ダメージを受け残りライフが200に、そして次の弾崎のターン。

ブレット・ビートルの効果により500の効果ダメージを受け、敗北していた。

不幸中の幸いだ。

敵のトラップの性質が遊英を守ったのだ。

「くっ… 僕は、カードを二枚伏せて、ターンエンドだ…」

『花道 遊英』

手札

無し

モンスターゾーン

堅固の花 トウショウブ レベル6 ATK/2500

魔法、罨ゾーン

セットカード三枚

ライフ

700

『弾崎 宇津』

手札

無し

モンスターゾーン

地獄弾甲虫 ブレット・ビートル レベル6 ATK/3000

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

1200

「俺のターン、ドロロー！」

「はっはっは！オーバーキルとはこの事か！」

除外されている、異次元の葬儀屋の効果を発動!!。除外されているこのカードと、そ

の他二枚のカードを墓地に戻す事ができる！」

除外されたカードを墓地に戻す効果。

異次元の葬儀屋と共に戻されたカードは二枚ともエヴォル・ナイト・ブースター。

エヴォル・ナイト・ブースターは、墓地から除外された場合でも効果を発動し、エヴォルモンスターの攻撃力をアップさせる。

もし再びこのカードを除外されれば。

遊英がそう唾を飲んだ瞬間。

「魔法カード、魂の解放を発動！互いの墓地のカードを、五枚まで除外する!!」

「なに!?!」

互いの墓地のカードを最大で五枚まで除外するカード。

墓地のカードを除外、そう、エヴォル・ナイト・ブースターもだ。

遊英の墓地から、栄光の花 ジンチョウゲが、サンシユユが、ハナスオウが。

そして弾崎の墓地から、二体のエヴォル・ナイト・ブースターが。

除外された。

「この瞬間！除外されたエヴォル・ナイト・ブースターの効果!」。

俺のエヴォルモンスターの攻撃力を500ポイントアップさせる！そしてこの効果は二体分発動する！」

「ま、また、1000ポイントアップだって…!?」

地獄弾甲虫 ブレット・ビートル レベル6 ATK/3000↓4000

「攻撃力4000!?!」

攻撃力4000、ブレット・ビートルの元々の攻撃力の二倍の数値。

そして極め付けには墓地のモンスターの、ジンチョウゲごと除外された。

ジンチョウゲは相手のモンスターの攻撃力を半減させる強力なモンスター。

だが仮に、遊英の伏せカードに、墓地のジンチョウゲを復活させるカードがあったとしても。

墓地のジンチョウゲの効果を利用できるカードがあったとしても。

これでその効果を発動する事すらできない。

「更に…レベルアップエフェクト発動!」

相手フィールドのモンスターの数だけターン終了時まで攻撃力を500ポイント

アップし、その数値分のダメージを与える!」

地獄弾甲虫 ブレット・ビートル レベル6↓7。

遊英のフィールドには、トウシヨウブが一体存在する。

よって攻撃力アップは、効果ダメージの数値は500。

地獄弾甲虫 ブレット・ビートル ATK/4000↓4500。

「4500だって…!?この状況で、攻撃力4500!」

戦く遊英を追い討ちする様に、効果ダメージは遊英を襲う。

恐れ戦く暇も与えん、恐怖の感情を見せるその前に息の根を止める。

そうと言わんばかり。

ブレット・ビートルは弾丸のように高速で回転して飛び回り。

遊英へ突進し、遊英を叩き飛ばした。

遊英ライフポイント、700—500=200。

「うわあああああ!!」

「止めだ！ブレット・ビートル！攻撃だ！ビートル！ショット！」

この攻撃が通れば遊英の敗北。

受ける事はできない。

「トランプ発動！カット&リカバリー！」

このターン、トウショウブのバトルで僕が受ける戦闘ダメージを0にする！」

カット&リカバリー、自分モンスター一体を対象に発動するダメージカットの防御

札。

これにより遊英のライフは守られる。

「だが、モンスターは破壊させてもらうぜ！」

「トウシヨウブのレベルアップエフェクト！自身のレベルを1アップする事で、その破壊を無効にする！」

セイント・リーフ・シールド!!」

吹き上げる旋風が木葉と花卉を巻き上げ壁を作り出す。

ブレット・ビートルは緑花の盾に弾き返された。

これでトウシヨウブの破壊は無効。

「くっ…：うわああああ!!」

だが遊英は、攻撃による衝撃のその余波により再び吹き飛ばされた。体を強く打ち付け一瞬視界が真っ白になった遊英。

その拍子に、床に顔をずってしまい、頬に擦り傷が出来た。

「ちい、目障りな…！。だがもう俺の勝利は確定したも同然。

次の俺のターン、ブレット・ビートルの効果発動すれば。

その効果ダメージにより、お前のライフは0になる！」

そしてたった1ターンで、攻撃力4000を越えたブレット・ビートルを越えられやしねえ！」

傷付きながらも立ち上がる遊英。

次のターンで逆転のできなければ、遊英の敗北は必至だと言うのに。

その瞳は闘志に燃え、その眼光はギラギラと弾崎を見つめている。

「いいや、僕は負けない。」

必ず勝つ！勝つて辿り着いて見せる！。

僕達の目指す、勝利の未来へ！」

「はっ、何が勝利の未来だ。やれるもんなら、やってみなあ！ターンエンドだ！」

この瞬間、ブレット・ビートルの攻撃力は再び元に戻る。

地獄弾甲虫 ブレット・ビートル レベル7 ATK/4500↓4000

『花道 遊英』

手札

無し

モンスターゾーン

堅固の花 トウシヨウブ レベル7 ATK/2500

魔法、罨ゾーン

セットカード二枚

ライフ

200

『弾崎 宇津』

手札

無し

モンスターゾーン

地獄弾甲虫 ブレッド・ビートル レベル7 ATK/4000

魔法、罨ゾーン

無し

ライフ

1200

倒れた拍子に出来た頬の擦り傷を拭い、遊英はデッキトップに手を添える。

急場は凌いだ。

時間は稼いだ。

ここまでの展開で勝利への布石となる種は既にばら蒔いた。

「僕のターン…！」

逆転に必要なキーカードはただ一つ。

あとは、このドローに勝利の望みを託すのみ。

「ドローオオオオオオ!!」

ドローカードは…。

魔法カード、『異世界からの支援』。

「待っていた…。」

これこそが、このデュエルで遊英の待ち続けたカード。

この逆境を覆す唯一のカード。

「このカードを…!!」

「なに…?」

「魔法カード、異世界からの支援を発動!!」

「異世界からの支援…!?!」

「このカードは、除外されている僕のモンスターの枚数分だけ僕のモンスター一体のレベルを、任意の数値変更させるカード!」

「除外されている遊英のモンスターは、除外されている遊英のモンスターは。」

グロキシニア・ウィッチ。

捧献の花 ナズナ。

強健の花 サンシユユ。

目覚めの花 ハナズオウ。

栄光の花 ジンチヨウゲ。

合計五枚。

「僕はトウシヨウブのレベルを、5アップさせる！」

堅固の花 トウシヨウブ レベル7↓12 ATK/2500。

「レベル12だと!?エヴォルモンスターを、エヴォルモンスターの到達できる最大レベルにして、いったいなんのつもりだ!?!」

「更に!リバースカード!装備魔法、アルストロメリアの花弓!

このカードを装備したモンスターが相手モンスターを戦闘で破壊した時。

このカードを装備しているモンスターのレベル×200ポイントの効果ダメージを与える!」

アルストロメリアの花弓。

これを装備した今のトウシヨウブが戦闘で破壊できた時。

その効果により与えられる効果ダメージは、200×12||2400で2400ポイント。

「行け!トウシヨウブ!」

地獄弾甲虫 ブレット・ビートルに攻撃!」

「だが、攻撃力は俺のブレット・ビートルが遙かに上!届きやしねえよ!その矢は!」

地獄弾甲虫 ブレット・ビートル レベル7 ATK/4000。

堅固の花 トウシヨウブ レベル12 ATK/2500。

「それはどうかな!」

「なに!?!」

「トラップカード、リバース!!レベル・バースト!!」

残された最後のリバースカード。

それは、トウシヨウブがエヴォル召喚されたターンに伏せられたカード。

グロキシニア・ウィッチが除外された時点から。

遊英がこのカードのドローを予測し。

ナズナを除外し、牽制を兼ねてアルストロメリアの花弓を伏せ。

その牽制で弾崎に自分の墓地のカードを除外させ。

虎視眈々と、異世界からの支援とのコンボの為の布石を仕込み続けていたカード。

「このターン僕のエヴォルモンスター一体は!」

元々のレベルからアップしているレベル×400ポイント!

その攻撃力をアップする!!」

元々のレベルからアップしているレベル×400ポイント。

トウシヨウブの元々のレベルは6、現在のレベルは12。

元々のレベルからアップしているレベルは6。



弾崎ライフポイント、1200—900〓300。

「ふぐうううあー！」

そして勢い止まる事無く弾崎の胸に突き刺さり。

「がっ…!!」

「トウシヨウブのレベル×200ポイントの効果ダメージを…君に与える!!」

矢に込められたトウシヨウブの力を遊英は解放。

大爆発を起こし弾崎の僅かなライフを粉々に粉碎し。

「ぐうわあああああああああ!!!」

弾崎ライフポイント、300—2400〓0。

そのライフを、0にした。

花道 遊英、勝利。